

國立臺灣大學文學院日本語文學系

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master's Thesis



日本紅学研究における脂硯齋批語の誤読問題

—諸家の説の検討を中心に—

The Misreading of Zhiyanzhai's Annotations in Japanese

Redology: A Study Focusing on the Theories of Various Scholars

邱昱綺

Yu-Chi Chiu

指導教授： 田世民 博士

Advisor: Shih-Min Tien, Ph.D.

中華民國 113 年 11 月

November 2024

謝辭



在完成這一篇對日文系來說屬於比較特殊题目的論文，我可以說是經歷了非常多的掙扎和煩惱，但是最後可以如願將這個題目構想成形並且順利完成，無疑是受到了各方貴人的幫助和指點迷津。在這當中，我首先必須感謝徐興慶教授對我的各種鼓勵與指導，因為有老師常常提起的「學術研究就是要追求一個真理」的理念，我才能鼓起勇氣勇敢追求自己所想探究的學問，並且也是因為徐興慶老師，我才有了繼續走在學術道路上的想法及動力。再來我想感謝我的指導教授田世民老師，在我提起想要做《紅樓夢》相關研究時非常正向地鼓勵我思考题目的可行性，並且在論文執筆期間都給予在論文書寫上還有許多未成熟之處的我很多幫助跟指導，使我可以順利地完成論文。

接著，我要感謝我的兩位口試委員：黃智暉老師、陳威璿老師。感謝兩位老師不辭辛勞的兩度前來為我審閱論文，並提供了我很多的研究資料，且在兩次的審查中都給予我各種意見和思辨方向，促使我最終順利完成論文，在此獻上我由衷的謝意。

再來，我還想要感謝我在學期間，給予我很多鼓勵與指導、建議以及關懷的王憶雲老師、林欣慧老師、龜田俊和老師。在老師們的課上我總是能得到很多啟發，也讓我發現了很多新的視角，開拓自己的學術視野。

此外，也感謝台灣大學文學院日本研究中心的林佳辰學姊，以及這一路上陪伴我的各位學長姐、學弟妹們，跟大家開心地討論生活的快樂瑣事，又或是在研究上的疑難煩惱，都是我的重要且開心的回憶。

最後，感謝我的父母還有弟弟，在我的論文寫作過程中的支持與包容，以及生活上的種種幫助，我才能順利完成這篇論文。

研究的過程中，雖然常常遇到挫折，並且自我懷疑、失去信心，但是回過頭來看這一段路程，就會發現如果要開闢一條屬於自己的道路，就勢必要接受迎面而來的各種質疑和挑戰。唯有持有自己的核心思想並且勇往直前，且不失虛心求教、精進自身的心態，才能活出自己的人生。

摘要



《紅樓夢》是中國古典文學的瑰寶之一，歷來在中國與日本的文學研究中都佔有舉足輕重的地位。特別是脂硯齋的批語，作為對《紅樓夢》文本的重要補充與詮釋，對於理解作品的深層含義和曹雪芹的創作意圖至關重要。然而，在日本紅學研究中，脂硯齋的批語卻經常被誤解甚至忽視，這導致對文本核心意義的錯誤解釋與偏頗理解。本論文深入探討了日本紅學研究中對脂硯齋批語的誤讀問題，並對相關學者的主要觀點進行評析與批判，重點分析了脂硯齋批語在《紅樓夢》文本解釋中發揮的獨特作用及其在日本紅學界所遭遇的誤讀現象。

本論文首先概述了《紅樓夢》研究在中國和日本的歷史，闡述脂硯齋批語在中國紅學研究中的重要地位，及其在版本學和文本解釋中提供的貢獻。隨後，本文具體提出日本紅學研究者的誤讀內容與文本的出入，分析了日本紅學界忽視了脂硯齋批語價值的現象。具體而言，部分日本學者的解釋將脂硯齋批語視為外部附加或次要內容，未能認識到這些批語在揭示《紅樓夢》人物內心、情節安排及作者意圖方面的重要性。

本論文還系統性地檢視了主要日本紅學研究者的觀點，對於脂硯齋批語的不同理解模式進行比較分析。例如，有些學者偏重於《紅樓夢》的文學價值，卻忽視了評語所帶來的脂硯齋和曹雪芹共同創作的脈絡。這種傾向導致了對《紅樓夢》的部分章節和人物行為的誤解，例如秦可卿之死和賈寶玉的性格描寫。筆者指出，這樣的誤解源於對脂硯齋批語的選擇性閱讀。

最後，筆者提出了重新評價脂硯齋批語在《紅樓夢》研究中應有地位的必要性，並建議日後的紅學研究應更注重對脂硯齋批語的全面分析，以促進中日學界對《紅樓夢》更深入且準確的理解。

關鍵字：《紅樓夢》，脂硯齋批語，日本紅學

Abstract



Dream of the Red Chamber, one of the Four Classic Chinese Novels, holds significance in Chinese and Japanese literary studies. Zhiyanzhai's annotations are central to understanding this monumental work, providing critical insights into the narrative and authorial intents of the novel. However, in Japanese Redology, Zhiyanzhai's annotations have frequently been misunderstood or overlooked, resulting in misinterpretations of the novel's core values and themes. This thesis explores the issue of misunderstanding Zhiyanzhai's annotations in Japanese Redology, providing an analytical critique of the main theories proposed by various Redologists. This thesis also delves into the significance of Zhiyanzhai's annotations as essential elements for textual interpretation and the phenomenon of neglect and misinterpretation in Japanese academic circles.

The thesis begins by tracing the history of Dream of the Red Chamber's reception in China and Japan, underlining the prominent role of Zhiyanzhai's annotations in the evolution of Chinese Redology, especially in editionology and interpretative studies. The thesis then investigates the marginalization of these annotations in Japan. Notably, certain Japanese Redologists have treated Zhiyanzhai's annotations as peripheral addenda, failing to acknowledge their integral role in revealing character motivations, plot structures, and authorial intents.

The study systematically reviews the perspectives of leading Japanese Redologists and analyzes the divergent approaches to interpreting Zhiyanzhai's annotations. For example, some Redologists emphasize the literary value of Dream of the Red Chamber but neglect the context of co-authoring between Zhiyanzhai and Cao Xueqin indicated by the annotations. This oversight has led to significant misinterpretations of crucial plots, such as the death of Qin Keqing and the characterization of Jia Baoyu. The thesis argues that these misinterpretations stem from selective reading of the annotations.

Finally, the thesis advocates reassessing the significance of Zhiyanzhai's annotations in Redology, urging future research to incorporate a more comprehensive analysis of these annotations to foster a more accurate and profound understanding of the novel.

Keywords : Dream of the Red Chamber ,Zhiyanzhai's annotations, Japanese Redologists

要旨



『紅樓夢』は、中国四大古典文学の一つとして、中日両国の文学研究において重要な位置を占めている。この作品を理解するうえで、脂硯齋の批語は物語の展開や人物像、そして作者の意図を解明するための鍵となるが、日本の紅学研究においてはこれらの批語が誤解される、あるいは軽視されることが多い。その結果、作品の本質的な意味やテーマが誤って解釈されてしまう場合がある。本稿は、日本紅学における脂硯齋批語の誤読問題を取り上げ、様々な学者による理論を批判的に分析・再検討するものである。特に、脂硯齋の批語がテキスト解釈において果たす重要な役割と、日本紅学研究者による誤読の背景を明らかにすることを目的としている。

論文では、まず『紅樓夢』研究が中日両国でどのように受容されてきたかを概観し、中国紅学研究において脂硯齋批語が版本学やテキスト解釈において果たしてきた役割を示す。続いて、日本紅学研究者による誤読と実際のテキストとの相違を具体的に指摘し、日本紅学界における脂硯齋批語価値の軽視現象を分析する。特に、一部の日本学者が脂硯齋の批語を外部的な付加要素とみなし、作品全体の構造や登場人物の心理に対する洞察を提供する役割を軽視してきた点に焦点を当てて考察する。

さらに、本稿は主要な日本紅学研究者の見解を系統的に検証し、脂硯齋批語の解釈方法の違いを比較する。例えば、作品の文学的価値を重視しつつも、批語がもたらす曹雪芹と脂硯齋による共同作業の過程を反映する内容が見過ごされることが多い。このようなアプローチは、秦可卿の死や賈宝玉の性格描写といった作品の重要な要素に対する誤解を招くことがある。本稿は、これらの誤解は脂硯齋批語の断片的な読み方や、作品全体との関連を無視したことにより生ずる現象であると明らかにしている。

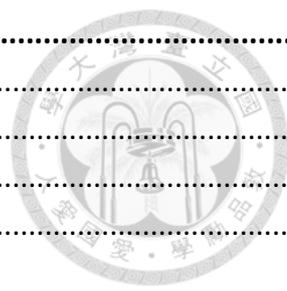
最後に、本稿は脂硯齋批語の再評価の必要性を提起し、今後の紅学研究において批語の包括的な分析が不可欠であることを主張する。そのことによって、作品に対するより正確かつ深い理解が促進されることを期待している。

キーワード：『紅樓夢』、脂硯齋批語、日本紅学

目次



謝辭	i
摘要	ii
Abstract	iii
要旨	iv
目次	v
序論	1
一、『紅樓夢』研究.....	2
1.旧紅学.....	2
2.文学評論派.....	2
3.新紅学.....	3
二、日本紅学概要.....	4
1.日本紅学の確立時期(1794～1893).....	4
2.漢学轉換期（1894～1938）.....	5
3.学術低迷期（1939～1955）.....	6
4.日本漢学復興期（1956～1978）.....	6
5.中国熱時代から現在.....	7
三、脂硯齋の重要性に関する先行研究.....	7
1.胡適.....	7
2.周汝昌.....	11
3.高明月の研究.....	14
4.木斎の研究.....	15
5.脂硯齋反証学派.....	16
四、日本語版『紅樓夢』の版本使用状況.....	19
五、問題意識.....	21
六、研究内容と研究方法.....	22
1.研究内容.....	22
2.研究方法.....	23
第一章 脂硯齋評語をめぐる誤読.....	25
一、「石兄」と「玉兄」関係の混同.....	25



二、「情不情」	28
1.陳維昭の研究	28
2.田佳漣の研究	28
3.孫遜の研究	29
4.脂硯齋批語の位置	30
三、脂硯齋に対する誤評価	30
四、結び	33
第二章 「列女伝」説の検討	34
一、船越達志の『金陵十二釵』列女伝説	34
1.金陵十二釵の概要	34
2.女性描写の視点	34
3.別個の小説としての金陵十二釵	35
4.（大）金陵十二の存在	35
二、船越達志の列女伝説をめぐる検討	35
1.香菱の重要性への軽視	35
2.王熙鳳に対する誤読	38
3.「悪女」説をめぐる検討	42
4.風月寶鑒について	50
5.ミニ小説であることへの反論	51
6.『石頭記』という題名の確定性	58
7.晴雯に対する評価と脂硯齋の批評との乖離	59
三、結び	66
第三章 「性同一性障害者」説と用語をめぐる検討	68
一、性別不一致	68
二、論点分析	70
1.賈宝玉の性格と行動に見られる性別認同障害の特徴	71
2.賈宝玉のGIDとしての解釈と『紅樓夢』の再評価	71
三、「性的衝動が起きない宝玉」をめぐる検討	72
四、脂硯齋への批判をめぐる検討	76
五、「宝玉の女性崇拜」をめぐる検討	77
六、結び	81
結論	82

参考文献..... 84



序論

『紅樓夢』は、中国四大奇書の一つとして、『水滸伝』『三国演義』『西遊記』と並び広く知られている。日本における『紅樓夢』の流行を研究した伊藤漱平によれば、『紅樓夢』は1793年に日本に伝来したという記録が存在する¹。この記録は、『紅樓夢』が海外に初めて登場した事例として注目され、日本への伝来時期を明示する重要な資料となっている。また、中国で『紅樓夢』の初の活字印刷出版である「程甲本」の発行が1792年だったことを考えると、『紅樓夢』が世に出た後に早くも日本に伝わったのが分かる。しかし、この伝来の早さに反して、日本では長い間『紅樓夢』は注目されず、アカデミーの世界では長らく重要視されてこなかった。

本稿では、『紅樓夢』が日本に伝来してから研究されるまでの過程を明らかにし、その背景として「脂硯齋評本」の欠落がどのように影響を与えたかを探ることを目的とする。具体的には、『紅樓夢』が日本において広く流布されず、重視されなかった理由として、「脂硯齋評本」の欠落がどのように作品の評価や理解に影響を与えたのかを検討する。また、脂硯齋評本が中国における『紅樓夢』研究において果たした役割と比較し、日本での受容の違いを分析することで、日本における『紅樓夢』研究の特異性とその背景を考察する。

先行研究では、『紅樓夢』の日本への伝来や初期の受容について検討がなされてきたが、その多くは日本における『紅樓夢』伝来の経緯や流布の状況に焦点を当てており、脂硯齋評本の欠落が作品の評価や理解に与えた具体的な影響については十分に解明されていない。また、社会的・文化的背景についてある程度触れられているものの、脂硯齋評本の有無がどのように学問的研究に影響を与えたのかについての分析も不十分である。本研究では、その欠陥を埋めるとともに、脂硯齋評本の欠落が日本での『紅樓夢』の受容と研究に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

本研究は、脂硯齋評本の欠落が『紅樓夢』の日本での評価や理解にどのような影響を与えたかを解明することにより、日本における文学作品の受容メカニズムを明らかにするものである。この研究を通じて、日本と中国における『紅樓夢』の受容の違いを分析することで、両国の文学研究の特異性を理解し、東アジアにおける文学の伝播と受容に関する学術的な貢献を果たすことを目指す。

本稿は、文献調査および歴史資料の分析を通じて、『紅樓夢』の日本での受容過程を明らかにする。具体的には、脂硯齋評本の欠落が日本での『紅樓夢』の評価や理解に与えた影響を検討するために、現存する関連文献や資料を精査し、日中両国における研究の発展の違いを比較分析する。

¹ 伊藤漱平、「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」、『伊藤漱平著作集 第三巻』（東京：汲古書院、2008年）、184頁。

一、『紅樓夢』研究

ここでは、まず中国におけるこれまでの『紅樓夢』研究の流れについて概観しておく。

1. 旧紅学

旧紅学とは、五四運動（1919年）以前の『紅樓夢』研究を指す。これには大きく分けて評点派と索隱派の二つの流派が存在する。

(1) 評点派

評点派は、『紅樓夢』本文を批評し、評論する学派である。『紅樓夢』研究の最初期に属するが、その多くは随筆的であり、文人の読書感想の色彩が強い。現在では、清代の文人がどのように『紅樓夢』を読んでいたかを探る研究材料として用いられることがほとんどであり、純粋な学術論文とは言い難い。代表的な人物には周春、王希廉、張新之、姚燮らがいる。

(2) 索隱派

索隱派は、『紅樓夢』の内容を清代の歴史や政治事件に結びつけて解釈する学派である。代表的な成果には蔡元培の『石頭記索隱』があり、『紅樓夢』を反清復明を主旨として創作されたと考える研究がこの派閥に属する。また、王夢阮と沈瓶庵が提唱した「賈宝玉は世宗順治帝を暗示している」「林黛玉は董鄂妃を指している」という説も有名である。索隱派の研究方法は史実を基にした考察であるが、直接的な証拠が乏しく、推論の色彩が強い。

2. 文学評論派

文学評論派は、王国維を代表とする学派で、西洋の哲学思想を取り入れて、『紅樓夢』の文学的価値を論じる方法論である。それに関して、呉孟昌は次のように述べている。

〈紅樓夢評論〉はドイツの哲学者ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）の哲学観を「立脚地」として、『紅樓夢』の芸術的内涵及び地位について述べ、評価している。内容は五章にわたっている。一、人生および美術の概観。二、『紅樓夢』の精神。三、『紅樓夢』の美学的価値。四、『紅樓夢』の倫理的価値。五、余論。総じて言えば、王国維は「人生は欲望であり、それは苦痛である」という人生観を論述の起点としており、解脱を求めるには「美術」（注：特に詩歌、戯曲、小説などの文学作品）が必要であると強調している。なぜなら、美術は人が物我の関係を忘れるのを容易にするからである²。

²原文：〈紅樓夢評論〉乃以德國哲學家叔本華（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）的哲學觀點為「立脚地」，對《紅樓夢》的藝術內涵及地位進行闡述和評價，內容共有五章：一、人生及美術之概觀；二、《紅樓夢》之精神；三、《紅樓夢》之美學上之價值；四、《紅樓夢》之倫理學上之價值；五、餘論。總體而言，王

3. 新紅学

新紅学は、胡適をはじめとする学者たちによる科学的実証主義に基づく研究を指す。胡適は「大胆な仮説、慎重な検証」をモットーに掲げ、証拠なしに学問を語ることを否定し、旧紅学、特に索隱派や蔡元培の学説を徹底的に批判した。現代において定説となっている『紅樓夢』に関する多くの学説も新紅学派が確立したものである。具体的な例として、曹雪芹の著作権の確立、諸版本の発見、後四十回と前八十回の別作者説、「脂批」の評価と鑑定など、『紅樓夢』に対する基本的な認識はほとんど新紅学の研究成果である。以下に新紅学の主要な各学派を細分化して紹介する。

(1) 曹学

曹学は、「曹雪芹が『紅樓夢』の作者である」という説を前提に、曹雪芹の生涯および家系に関する史料の研究を指す。曹雪芹以外にも、曹璽、曹振彦、曹寅など曹家全体に対する研究も多方面に行われている。また、「曹雪芹本人が作中の主人公である」という説に関する研究もこの分野に含まれる。

(2) 版本学

版本学は、『紅樓夢』に関する諸版本の研究を指す。主に原稿に最も近い「脂本」と、高鶚が完成し程偉元によって編纂された「程乙本」との比較を中心とする。他にも各版本の成立時期、紙質、墨跡など、諸版本に関する細部に至るまでの考証が行われている。以下に現存する諸版本の一覧を示しておく。

- ① 乾隆甲戌（19年，1754年）脂硯齋重評本（1-8，13-18，25-28の各回，合計16回分だけ）
- ② 乾隆己卯（24年，1759年）脂硯齋重評石頭記四閱評過本（1-20，31-40，61-70の各回。但し64・67両回は抄配，合計38回）
- ③ 乾隆庚辰（25年，1760年）脂硯齋重評石頭記四閱評過本（64・67両回を欠いて80回）
- ④ 乾隆甲辰（49年，1784年）夢覺主人序本（80回）
- ⑤ 乾隆己酉（54年，1789年）舒元煒序本（1-40回？）
- ⑥ 年代不明の残卷（23・24の両回）
- ⑦ 脂硯齋重評石頭記（文学古籍刊行社，影印本，80回，1955年4月版）
- ⑧ 乾隆辛亥（56年，1791年）程偉元，高鶚第一次木活本紅樓夢（120回）
- ⑨ 乾隆壬子（57年，1792年）程偉元，高鶚第二次木活本紅樓夢（120回）

國維乃是以「人生等於欲望等於苦痛」的人生觀為論述起點，強調若欲尋求解脫，必有待於「美術」（按：特指詩歌、戲曲、小說等文學作品），因為它能使人易忘物我之關係。吳孟昌「論王國維〈紅樓夢評論〉的「文學解脫論」」、『興大人文學報』第四十一期（台中：國立中興大學人文學報編輯委員會、2008年）、151-172頁。

⑩ 道光壬辰（12年，1832年）王希簾評刻本紅樓夢（120回）³



(3) 脂批学

脂批学は、曹雪芹の原稿に近い諸版本に含まれる脂硯齋の批評およびその人物に関する研究を指す。この批評は、通常の批評や注釈とは異なり、作者や登場人物に対する語り口調や、当事者にしか知り得ない情報を含むことが多い。そのため、脂硯齋は作品の中の人物のモデルである可能性が高い。また、曹雪芹と共同で作品を完成させた評語もあり、その批評は作品の一部と見なすことができる。テキスト自体の解読や作品の解析において不可欠な研究材料となっている。

(4) 探佚学

探佚学は、「脂本」と呼ばれる諸版本から第八十回までの内容を脂硯齋の批注を基にして『紅樓夢』の結末を探求する学問である。また、その内容は第八十一回以降に限らず、曹雪芹が自ら削除した内容もその批注から発見することができる。索隱派とは異なり、探佚学は「脂批」や他の批評内容を基に考察するものであり、科学的実証主義に基づいている。

以上、中国での『紅樓夢』研究の流れを紹介してきた。次節では、日本における『紅樓夢』研究の歴史を振り返る。

二、日本紅学概要

本節では、前掲した伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」、および孫玉明『日本紅學史稿』⁴を参照して論述を進める。

1. 日本紅学の確立時期(1794～1893)⁵

伊藤漱平の研究によれば、『紅樓夢』が日本に伝来した最初期の資料は寛政六年（1794年）に遡る。伊藤は次のように述べる。

『紅樓夢』が日本に渡来した時期について文献の上で調べてみると、意外にはやく、寛政六年（一七九四）、すなわち乾隆五十八年に当たる年の冬に俗に言う「南京船」によって長崎にもたらされていることが知られる。周知のごとく、江戸時代の初期

³ 金子二郎、「紅樓夢考（一）」、『大阪外国語大学学報』第6号（大阪：大阪外国語大学、1958年）、97-108頁。

⁴ 孫玉明、『日本紅學史稿』、北京：圖書館出版社、2006年。

⁵ 孫玉明『日本紅學史稿』では1793年からだと指摘されているが、伊藤漱平「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」（『伊藤漱平著作集』（第三卷）収録、P.178-179）では、寛政六年（1794年）との考察が行われている。さらに、伊藤の論文には、南京船に関する明確な史料が提示されていることから、本論文では伊藤の主張を採用することとした。

に徳川幕府はいわゆる「鎖國」を断行し、諸外國のなかでは中國當時はあたかも明清鼎革の時期であったが、わが國では多くの昔年の王朝名を借用して「唐」と呼びならわした⁶。

伊藤が「意外にはやく」と述べた理由として考えられるのは、この時期が「程甲本」の出版からわずか2年後であることが一因である。程甲本とは高鶚と程偉元が共同編修した『紅樓夢』初の活字印刷版であり、その出版後すぐに日本に伝来したことを考えると迅速なものであると言える。さらに注目すべきは、この記録における書名である。記録では『紅樓夢』と表記されていることから、この時伝来した版本は「程高本」のいずれかであると推察される⁷。

(1) 『紅樓夢』伝来後の利用状況

伝来当初、『紅樓夢』は口語教材として使用されていたが、正式な教材ではなく自習用であったことが分かる。以下にその利用状況を示す。

「唐話」と呼ばれる主に中國の南方方言を學で稽古通事から小通事、大通事へと一人前になるわけであるが、まず『三國演義』『水滸傳』など白話(口語)で書かれた長篇が教材として使われ、『紅樓夢』は進んで自習する際の教材であったとされる⁸。

『紅樓夢』は伝来した初期に、口語としての教材として使用されていた。しかし、上記を見れば分かる通り、同じく小説で白話の文体をしているにもかかわらず、『紅樓夢』は正式教材ではなく、自習用、つまり正式のものとして使用されていなかった。

(2) 日本における初邦訳

『紅樓夢』の初邦訳は、伝来から約百年後の1892年に、森槐南(1863-1911)がその一節を翻訳して発表した。同年、島崎藤村も「紅樓夢一節」を発表し、これが『紅樓夢』最初の邦訳となった。

2. 漢学轉換期(1894~1938)

1922年には幸田露伴(1876~1947)と平岡龍城(生卒年不詳)による『國訳紅樓夢』が出

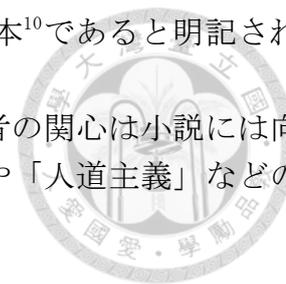
⁶ 伊藤漱平、「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」、178-179頁。

⁷ 現存する抄本系統、すなわち「脂本」系統の全てのテキストにおいて、書名は『脂硯齋重評石頭記』とされている。一方、『紅樓夢』という書名は程偉元と高鶚が改竄及び原文補填の際に、脂硯齋の評語内で言及された題名の候補から選び、変更したものである。元来、作者及び脂硯齋が定めた題名は『石頭記』である。詳しくは『脂硯齋重評石頭記』甲戌本凡例及び『紅樓夢』程乙本序を参照。

⁸ 伊藤漱平、「日本における『紅樓夢』の流行—幕末から現代までの書誌的素描—」、180頁。

版され、初の日本語版全訳本が誕生した⁹。使用される底本は有正本¹⁰であると明記されている。

大正期には『紅樓夢』の邦訳熱が高まったが、当時の日本漢学者の関心は小説には向いておらず、中国では辛亥革命や新文化運動の影響で「儒教批判」や「人道主義」などの主張が主流となっていたため、日本の『紅樓夢』研究は沈静化した。



3. 学術低迷期（1939～1955）

この時期、日本は第二次世界大戦に突入し、漢学や漢学教育に対する態度が大きく転換した。戦争の影響で日中両国の学術界は一時的に低迷期に入った。しかし、1954年に中国で起きた『紅樓夢』批判運動により、『紅樓夢』は中国において「資産主義の批判」や「マルクス主義の賛同」などの論述が行われ、当時の中国の政治需要に応じて再び注目されるようになった。松枝茂夫（1905-1995）も、戦争の影響で中断を余儀なくされたものの、11年をかけて『紅樓夢』120回の全訳を完成させた¹¹。

4. 日本漢学復興期（1956～1978）

この時期は『紅樓夢』研究の発展において重要な時期であり、昭和期には「紅迷」と称される研究者たちが活躍した。本段落では、その中でも特に大高巖と松枝茂夫の功績に焦点を当て、彼らがどのようにして日本における『紅樓夢』研究を推進したかについて見ていく。

昭和に入ってから又も「紅迷」が現われた。その人は大高巖（一九〇五—一九七一）と言ひ、大成本によって知った「紅樓夢」を愛読するあまり、東京美術學校で彫刻を學んだのち、卒業した昭和二年に大陸に渡った。大連を経て北京・上海で過ごし、七年に歸國したが、その間に「紅迷」振りも板につき、つぎつぎとこれを論じた文章を書いては、当時大連で出ていた『満蒙』（中日文化協機誌）などに発表した。大戦後も健在で、昭和三十七年には「紅樓夢研究」と題する書物を著わし、五十部限定で油印頒布した。あとにもさきにも、日本ではこのほかにはまだ『紅樓夢』研究の専著は出ていない。その歿後氏を偲んで『紅迷』という書名の遺稿集が出版された。大高氏が上海時代、當時の左翼文藝に心を抱き文献を蒐集しておられたことも、ただの「紅迷」でなかったことを證している。

⁹ 『國訳紅樓夢』は「脂本」系統の有正本を使用している。その詳細については『國訳紅樓夢』解説を参照。「脂本」は現在、最多八十回しか存在しないため、この訳本も当然八十回に限られる。この点に基づき、『國訳紅樓夢』を全訳本ではないとする研究も存在する。しかしながら、筆者は「脂本」と「程高本」は異なるものであると考えるため、『國訳紅樓夢』を全訳本と位置付ける。

¹⁰ 有正本は全八十回収録する「脂本」系統のテキストである。しかし、この版本の最大な問題点は、「脂本」系統でありながら、脂硯齋に関する署名等が全て削除されていることである。

¹¹ 松枝茂夫訳本は日本初の『紅樓夢』120回全訳本である。使用した底本は全80回有正戚序本、後40回程乙本となっている。

大高氏とは別に、昭和時代の『紅樓夢』研究を大いに推進されたのは、松枝茂夫氏である。東京帝國大學支那文學科の學生時代からこの小説を酷愛し、卒業後北京に二年ほど留學、歸國ののちは念願のその翻譯に打込まれ、岩波書店から「岩波文庫」の一種として昭和十五年に第一分を刊行、戦争激化のため一時中断したが、戦後の二十六年に至ってようやく全十四冊が完結を見た。先年また全面的な改訳に着手、十回分を収める第一冊が四十七年に刊行され、六十年七月、十四年振りに全十二冊の最終分冊が見事に完成を告げた¹²。

このように、大高巖と松枝茂夫は、それぞれ異なるアプローチで『紅樓夢』に対する深い情熱を示し、作品の研究と普及に大きく貢献した。大高巖は自らの経験を通じて中国の文芸と左翼思想に触れながら研究を進め、一方で松枝茂夫は翻訳という形で日本の読者に『紅樓夢』を届け、その後の改訳作業を通じて持続的な影響を与えた。昭和時代におけるこれらの努力は、日本における『紅樓夢』研究の基礎を築き、その後の学術的な進展に大きく寄与した。

5. 中国熱時代から現在

この時期は漢学復興期の熱を受け継ぎ、紅学研究も新時代を迎える。飯塚朗(1907～1989)の翻訳は日本で初めて全底本として「程本」を使用する全訳本である。この全訳本は1980年、集英社「世界文学全集」の一つとして刊行された。また、合山究(1942～)『『紅樓夢』新論』(汲古書院、1998年)と船越達志(1969～)の『紅樓夢成立の研究』(汲古書院、2005年)が代表的な成果となっている。最新の全訳本は井波陵一(1953～)による『新訳紅樓夢』(岩波書店、2013)である。この全訳本は前八十回庚辰本『脂硯齋重評石頭記』(中華書局香港分局1977年)、後四十回程甲本『紅樓夢』(書目文献出版社、1992年)を使用したと記載されている¹³。

三、脂硯齋の重要性に関する先行研究

1. 胡適

以下はまず、胡適による脂硯齋批語の重要性に関する研究内容を整理する。

(1) 残本『脂硯齋重評石頭記』の発見と評価

胡適は、20世紀初頭に『紅樓夢』の研究において極めて重要な発見を行った。それが、残存する『脂硯齋重評石頭記』である。胡適はこの発見に関して、初めはその価値を十分に認識していなかったが、後にその重要性に気づき、高い評価を与えた。

¹² 伊藤漱平、「日本における『紅樓夢』の流行一幕末から現代までの書誌的素描」、205-206頁。

¹³ 曹雪芹著・井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、(東京：岩波書店、2013年)、297頁。

去年我從海外歸來，便接著一封信，說有一部抄本《脂硯齋重評〈石頭記〉》願讓給我。我以為『重評』的《石頭記》大概是沒有價值的，所以當時竟沒有回信。不久，新月書店的廣告出來了，藏書的人把此書送到店裡來，轉交給我。我看了一遍，深信此本是海內最古的《石頭記》抄本，遂出了重價把此書買了¹⁴。

胡適はこの引用文で、彼自身が当初、この「重評」と名の付く『石頭記』を軽視していたことを率直に述べている。しかし、新月書店で実際にこの抄本を手にとってみたところ、この書物が国内で最も古い『石頭記』の抄本であると確信し、最終的には高額を払って購入したのである。

(2) 脂硯齋と曹雪芹の関係

胡適は、脂硯齋が曹雪芹と非常に親密な関係にあったことを示唆している。脂本の第一回には、「脂硯齋甲戌抄閱再評」と記されており、これは脂硯齋が曹雪芹の作品を再評価し、書き留めたことを示している。この記述は、両者の関係性を明らかにするための重要な証拠である。

脂硯齋是同雪芹很親近的，同雪芹弟兄都很相熟。我並且疑心他是雪芹同族的親屬¹⁵。

胡適は、脂硯齋が乾隆十九年（1754年）以前に『紅樓夢』を手にし、その内容に対して批評を行ったことを示している。さらに重要なのは、この記述が、曹雪芹が同年に生きていたことを証明している点である。脂硯齋が「抄閱再評」を行ったという事実は、彼が曹雪芹と密接な交流を持っていたことを指摘しており、彼らの関係性が単なる批評家と作家以上のものであった可能性を示唆している。

また、脂硯齋の批語には、曹雪芹が壬午除夕（一七六三年二月十二日）に亡くなったことを示す記述も含まれている。胡適は次のように述べている。

我從前根據敦誠《四松堂集》「挽曹雪芹」一首詩下注的「甲申」二字，考定雪芹死于乾隆甲申（一七六四），與此本所記，相差一年餘。雪芹死於壬午除夕，次日即是癸未，次年才是甲申。敦誠挽詩作於一年以後，故編在甲申年，怪不得詩中有「絮酒生芻上舊垆」的話了。現在應依脂本，定雪芹死於壬午除夕。再依敦誠挽詩「四十年華付杳冥」的話，假定他死時年四十五，他生時大概在康熙五十六年（一七一七）¹⁶。

ここで、胡適は曹雪芹の死の直前に関する貴重な証拠を示している。脂硯齋の記述によれば、曹雪芹は『紅樓夢』を完成させる前に涙尽き果てて亡くなったという。この記述は、

¹⁴ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』（上海：上海古籍出版社、2013年7月7日）、142頁。

¹⁵ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、146頁。

¹⁶ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、145頁。

曹雪芹が作品を未完のまま残した理由を理解する上で極めて重要である。



(3) 秦可卿の死に関する議論

脂本に記された秦可卿の死に関する批評は、従来の解釈に対して新たな視点を提供する。脂硯齋は、秦可卿の死が「淫喪天香樓」によるものであると批評している。この表現は、秦可卿の死因が単なる病死ではなく、不倫や不道德な行為によるものだった可能性を示唆している。

俞平伯在《〈紅樓夢〉辨》裡特立專章，討論可卿之死。(中卷，頁一五九—一七八) 但顧頡剛引《〈紅樓夢〉佚話》說有人見書中的焙茗，據他說，秦可卿與賈珍私通，被婢撞見，羞憤自縊死的。平伯深信此說，列舉了許多證據，並且指出秦的丫環瑞珠觸柱而死，可見撞見姦情的便是瑞珠。現在平伯的結論都被我的脂本證明了。我們雖不得見未刪天香樓的原文，但現在已知道

- (1) 秦可卿之死是「淫喪天香樓」。
- (2) 她的死與瑞珠有關係。
- (3) 天香樓一段原文占本回三分之一之多。
- (4) 此段是脂硯齋勸雪芹刪去的。
- (5) 原文正作「無不納罕，都有些疑心」，戚本始改作「傷心」¹⁷。

俞平伯は『紅樓夢弁』において、特に一章を設けて秦可卿の死について議論している(中卷、頁159-178)。一方、顧頡剛は『紅樓夢佚話』を引用し、焙茗という人物が秦可卿と賈珍が密通している場面を目撃し、これが原因で秦可卿が恥じて自殺したという話があると述べている。俞平伯はこの説を強く信じており、いくつかの証拠を挙げ、さらに秦可卿の侍女瑞珠が柱に激突して死んだことが、密通を目撃したのが瑞珠であったことを示していると指摘している。胡適は脂硯齋の記述を引用し、脂硯齋が秦可卿の死を「淫喪天香樓」と表現したことが、物語のテーマや登場人物の性格を再評価する鍵となることを指摘している。

(4) 『紅樓夢』の「凡例」について

脂本には『紅樓夢』の「凡例」や「旨義」が記されており、これは他の版本にはない重要な要素である。胡適は、脂本がこれらの記述を含むことで、作品の解釈において他の版本よりも優れた資料であることを示している。

我們讀這幾條凡例，可以指出幾個要點：①作者明明說此書是「自譬石頭所記之事」，

¹⁷ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、151-152 頁。

明明說「系石頭所記之往來」；②作者明明說「此書只是著意於閨中」，又說「作者本意原為記述當日閨友閨情，並非怨世罵時之書」¹⁸。

胡適は『紅樓夢』の凡例に基づき、作者が作品全体を通じて明示しているいくつかの重要な要点を指摘している。第一に、胡適は、作者が本書を「自譬石頭所記之事」、すなわち石頭自身が体験したことを記録したものとして描写していることに着目している。さらに、「系石頭所記之往來」との記述を挙げ、石頭の視点から出来事が記録されている点を強調する。これは作品の構造において石頭が重要な役割を果たしていることを示唆している。

第二に、胡適は、作者が「此書只是著意於閨中」と述べていることに注目し、この作品が主に女性たちの生活と感情に焦点を当てていることを強調する。また、作者は「並非怨世罵時之書」と明確に述べており、これは『紅樓夢』が社会批判を目的とした作品ではなく、当時の女性の友情や感情を描くことを本意としているとする胡適の解釈を裏付けている。

胡適の解釈によれば、これらの凡例の記述は、『紅樓夢』の構造やテーマを理解するための鍵となるものであり、作品の意図を読み解く上で重要な要素であるとしている。胡適は脂硯齋の記述を引用し、脂本に記された「凡例」と「旨義」が『紅樓夢』の全体的なテーマと構造を明確に説明していることを指摘している。特に「風月寶鑒」や「石頭記」という名称が、物語の根底にある哲学的・道徳的な要素、またはこの作品の見方を反映していることが示されている。このように、脂本の「凡例」は、作品全体の理解を深めるための重要な手がかりを提供している。

(5) 脂本と戚本の比較

胡適は、脂本と戚本を比較し、前者がより古い原本に基づいていると論証している。彼は、脂本が曹雪芹の原稿に最も近いものであり、曹雪芹自身の評注が含まれている可能性が高いと指摘している。

(1) 《紅樓夢》の最初底本是有評注的。

(2) 最初の評注至少有一部分是曹雪芹自己作的，其餘或是他的親信朋友如脂硯齋之流的。

何以說底本是有評注的呢？脂本抄於乾隆甲戌，那時作者尚生存，全書未完，已是「重評」的了，可以見甲戌以前的底本便有評注了。戚本的評注與脂本的一部分評注全同，可見兩本同出的底本都有評注¹⁹。

¹⁸ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、154 頁。

¹⁹ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、157 頁。

胡適は『紅樓夢』研究において、脂本が最も信頼性の高い資料であると強調する。彼は脂本について、曹雪芹自身が手を加えた可能性が高いとし、また戚本が後代に編集されたものであるため、脂本が原本の記述に忠実である点を指摘している。このことから、胡適は脂本を『紅樓夢』の成立過程と作品解釈における重要な史料として位置付けている。

(6) 脂本の文学的価値

胡適は、脂本の文体や表現が他の版本よりも優れていることを具体的な例を挙げて論証している。例えば、脂本の文体は登場人物の描写において特に優れており、情景描写も非常に豊かであると述べている。

我們現在可以承認脂本是《紅樓夢》的最古本，是一部最近於原稿的本子了。在文字上，脂本有無數地方遠勝於一切本子²⁰。

脂本の描写が他の版本よりも詳細であり、読者に対して登場人物や情景をより生き生きと伝える力があることがわかる。胡適は、脂本の文体が『紅樓夢』の理解において不可欠な要素であると結論付けている。

(7) 曹雪芹の未完作品としての『紅樓夢』

最後に、胡適は脂本の内容から、曹雪芹が『紅樓夢』を未完の状態に残した可能性が高いことを指摘している。胡適は次のように述べている。

我們可以知道雪芹在壬午以前，陸續作成的《紅樓夢》稿子決不止八十回，可惜這些殘稿都「迷失」了。脂硯齋大概曾見過這些殘稿，但別人見過此稿的大概不多了，雪芹死後遂完全散失了²¹。

この記述から、曹雪芹が『紅樓夢』を完成させることができなかつた理由が明らかになる。脂硯齋の批語によれば、曹雪芹は作品を未完のまま残したが、これが彼の病状や社会的なプレッシャーと関連している可能性がある。このように、胡適は脂本を通じて、曹雪芹の創作過程とその未完性を明らかにし、これが『紅樓夢』研究における新たな視点を提供するものであることを強調している。

2. 周汝昌

周汝昌によれば、『紅樓夢』における最も早期の脂硯齋批語は「甲戌抄閱再評本」（大塚久雄旧蔵）に見られ、現在は横浜市立大学附属図書館に所蔵されている。この批語本には、物語の解釈を深めるための詳細な批語が記されており、作品の理解を深化させるための重

²⁰ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、161頁。

²¹ 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、169-170頁。

要な資料である。

乾隆时候的《石头记》抄本，大都是题作“脂砚斋重评石头记”的。今于行文时常提“脂本”，并不单指任何一本，而是这些真本的统称²²。

また、周は「己卯本」「庚辰本」「戚蓼生序本」などの異なるバージョンにも、脂砚斎による独自の批語が残されていることを指摘している。これらの批語は、バージョンごとに微妙な違いがあり、それぞれが異なる解釈を提供するものとして重要な資料である。

脂砚斎の批語は、その記述方法においても独自性を持つ。周汝昌は、脂砚斎の批語が単なる注釈や解説を超え、作品の一部として機能している点を指摘している。たとえば、庚辰本に見られる「文中之筆者」という表現は、批語が作品の解釈に深い影響を与え、新たな視点を提供することを示している。

また、脂砚斎の批語は、異なるバージョンの間に微妙な違いが見られることがあり、これが『紅樓夢』の研究において重要な手がかりとなる。「戚蓼生序本」と「庚辰本」の批語を比較することで、物語解釈における新たな視点を得ることができる。

周汝昌は脂砚斎が『紅樓夢』の批評において果たした役割を、他の清初の名だたる批評家たち、たとえば金人瑞や毛宗崗、張竹坡などと比較しながら、その独自性と重要性を強調している。周は次のように述べる。

脂砚斎の批《红楼梦》，不用说，和清初金人瑞批《水浒》、毛宗岗批《三国》、张竹坡批《金瓶梅》、陈士斌等批《西游记》这一风气是有其直接关联的；不过，脂砚斎究竟与金、毛、张、陈一流人有所不同。金、毛等人，只是普通读者，就读者的“眼界”发表意见；而脂砚斎则不然，他和小说创作过程有极密切的关系²³。

以下、周汝昌が主張する8の要点について述べる。

(1) 脂砚斎の批評は、単なる外部からの評論にとどまらない

周汝昌は、脂砚斎が単なる読者や外部の批評家としてではなく、作品そのものに深く関与していることを指摘する。例えば、甲戌本の第一回では「脂砚斎甲戌抄閱再評，仍用《石頭記》」と記されており、これは脂砚斎の批評が『紅樓夢』の一部として曹雪芹によって認められていたことを示している。彼の批評は、作品全体の理解を助けるだけでなく、作品の完成度を高めるために重要な役割を果たしている。

(2) 脂砚斎は作品のタイトル決定に関与した

²² 周汝昌、『紅樓夢新證（増訂本）』全二冊、（北京：中華書局、2016年1月第1版、2016年5月第2次印刷）、下冊、702頁。

²³ 周汝昌、『紅樓夢新證（増訂本）』下冊、715頁。

脂硯齋が『紅樓夢』のタイトル変更や決定に直接関わっていたことは、周汝昌が指摘するもう一つの重要な点である。彼の批評によれば、作品のタイトルが『石頭記』から『紅樓夢』へと変更されたことは、脂硯齋が作品の命名においても決定的な影響を与えたことを示している。このような事例は、他の批評家には見られない、脂硯齋の特異な立場を物語っている。

(3) 脂硯齋は作品の内容修正に重要な役割を果たした

脂硯齋が作品の内容に対しても大きな影響を与えていたことは、第十三回の末尾において「秦可卿淫喪天香樓」の節を削除するよう指示したことが見られ、それによって確認することができる。周汝昌は、このような内容修正を行った脂硯齋、彼の役割を単なる批評家ではなく、作品の共著者としての地位にまで引き上げていると論じている。

(4) 脂硯齋は作品の凡例や総評を作成した

周汝昌は、脂硯齋が作品の凡例や章回の前後にある総評を作成したことを重要視している。彼の総評は、甲戌本、庚辰本、戚本の三つの版本に共通して見られるため、これが脂硯齋の手によるものであることはほぼ間違いない。これにより、脂硯齋の批評が単なる意見に留まらず、作品全体の理解を深めるための重要な一部となっていることが確認できる。

(5) 脂硯齋は作品の校訂や未完成部分の修正に関与した

脂硯齋は、作品の中身に対しても精力的に関与し、誤りの訂正や未完成部分の補完を行っていた。例えば、庚辰本の第七十五回には「缺中秋詩，俟雪芹」という記述があり、これが脂硯齋による修正の指示であることが明らかである。周汝昌は、これを脂硯齋の批評が作品の完成に果たした重要な役割の一例として挙げている。

(6) 脂硯齋は作品の残欠部分を把握し、作者に修正を促した

脂硯齋は、作品の中で不足している部分を把握し、作者に対してそれを修正するよう促していた。これにより、作品全体の整合性が保たれ、完成度が向上している。例えば、庚辰本の第十七回には「此回宜分二回方妥」という指摘があり、これが脂硯齋の関与によるものであることがわかる。

(7) 脂硯齋は難解な部分や隠された意味に注釈を加えた

脂硯齋は、作品中の難解な典故や隠喩について、詳細な注釈を加えることで、読者の理解を助ける役割を果たしている。彼の注釈は、作品の理解を深めるための重要な補助資料として機能しており、単なる読者の視点を越えたものである。

(8) 脂硯齋は作者と同じ立場から読者に語りかけた

最後に、脂硯齋は作者と共に読者に対して語りかけている点が重要である。彼は、自ら

を単なる読者や批評家ではなく、作品の共同創作者として位置づけ、読者に対して作品の深意を伝える役割を担っていた。この点は、周汝昌が特に強調するところであり、脂硯齋の批評の独自性と重要性を明確に示している。

脂硯齋の批語は、『紅樓夢』の解釈において不可欠な存在であり、その文学的価値は極めて高いと言える。脂硯齋の批語を通じて、物語の背景や登場人物の心理に対する深い理解が可能となり、研究者にとって重要な資料であることが確認できる。周汝昌と胡適の研究を通じて、脂硯齋批語が『紅樓夢』研究において果たす役割の大きさが再認識されることとなった。

3. 高明月の研究

高明月は、脂硯齋は『紅樓夢』における最も重要な評点者の一人であり、彼の評語は小説の創作主旨および芸術技巧について深い洞察とコメントを提供していると指摘している²⁴。脂硯齋の評点は、原稿の作成、増補、整理作業に関与した評者としての彼の役割を明らかにし、作品の史料価値と文学理論的価値を高めるものである。

脂硯齋の研究は大きく二つの側面に分けられる。一つは、脂硯齋の身元の検討である。これは、脂硯齋と畸笏叟が同一人物か否か、評者の身元、作者との関係を検討するもので、多くの研究者がこのテーマに取り組んでいる。例えば、胡適、俞平伯、周汝昌、呉世昌などの先駆的研究者たちは、彼らの著作において脂硯齋の人物像を詳述している。

第二の側面は、脂硯齋の批語に関する研究である。これには、脂硯齋の批語の創作論、情理論、人物論、読者論などが含まれ、特に小説技法論、叙事理論、詩学観などの探究が行われている。評者の身元を明確にすることは、これらの理論研究を深化させるための基礎となる。

また、高明月によれば、脂硯齋と曹雪芹は親密な交友関係にあり、これは脂硯齋の評語からも明らかであるという²⁵。脂硯齋は自らの経験を基に、作者と多くの出来事を共に経験し、創作の動機や主旨を深く理解していた。このため、脂硯齋の批評は作者の創作とほぼ同時進行で行われ、「一芹一脂」という文学史上の佳話を形成している。

例えば、甲戌本の第一回には、「能解者方有辛酸之泪，哭成此書」という眉批があり、これには作者の辛酸と涙が込められていることが示されている。脂硯齋は、作者の人生の苦悩や挫折、家族の不幸に対する感情を深く共感し、批評の中でそれを表現している。

²⁴ 高明月、「脂硯齋、畸笏叟及其他評者」、『阜阳师范学院学报（社会科学版）』2019年第3期、87-92頁。

²⁵ 高明月、「從脂評自述看脂硯齋與曹雪芹的交往」、『太原師範学院学报（社会科学版）』第18卷第2号（2019年）、32-36頁。

このように、脂硯齋の評語は、『紅樓夢』の創作主旨を理解する上で重要な資料となっており、脂硯齋自身の経験と曹雪芹との関係を通じて、作品の評価や解釈において重要な役割を果たしている。

4. 木齋の研究

木齋の「版本の進化から見る『紅樓夢』の作者とその執筆過程」²⁶は、『紅樓夢』の版本の変遷およびその背後にある作者の身元と執筆過程について深く考察したものである。木齋は、『紅樓夢』の初期写本がすべて「脂硯齋重評石頭記」と題されていたことを指摘し、その後の戚序本以降の「脂硯齋消滅運動」を経て、程甲本刻本が登場した際には、脂硯齋の署名が削除されたことを論じている。脂硯齋は『紅樓夢』の創作において極めて重要な役割を果たしており、初期の写本では脂硯齋の評点が随所に見られ、これが作品の解釈や評価において重要な手がかりとなっていた。彼の評点は単なる批評にとどまらず、作品の内容や構成に深く関与しており、その存在は『紅樓夢』の理解に不可欠なものであったと指摘されている。

脂硯齋の評点は、彼が単なる読者ではなく、共同作者あるいは編集者としての立場にあったことを示している。彼の評点は作品のテーマや登場人物の描写に対する洞察を提供し、読者に対して作品の深層を理解するためのガイドラインを示していた。例えば、脂硯齋の評点は、物語の進行やキャラクターの動機に関する重要な背景情報を提供することがあり、これにより物語の全体像を把握することが可能となっていた。しかしながら、戚序本以降の「脂硯齋消滅運動」により、脂硯齋の署名や評点は体系的に削除されることとなった。この運動の結果、脂硯齋の名前は『紅樓夢』の作者としての認識から消え去り、彼の重要な貢献は次第に忘れ去られることとなった。程甲本刻本が登場した際には、脂硯齋の署名はすでに削除されており、彼の存在はほとんど認識されなくなった。

胡適以降、曹雪芹が『紅樓夢』の単独の作者であるとする見解が次第に広まり、脂硯齋の役割はますます軽視されるようになった。胡適の研究は、曹雪芹を『紅樓夢』の自伝的作家として位置づけるものであり、これが後世の研究においても大きな影響を与えることとなった。しかし、脂硯齋の存在とその評点の重要性を再評価することなくしては、『紅樓夢』の真の姿を理解することは難しい。脂硯齋の評点は、作品のテーマや登場人物の内面に対する深い洞察を提供するものであり、彼の役割を無視することは作品の全体像を見誤ることにつながるのではないか。

木齋の研究でも、脂硯齋が『紅樓夢』の創作において果たした重要な役割を再確認し、彼の評点が作品理解に不可欠なものであることを強調している。脂硯齋の評点を通じて、

²⁶ 木齋、「從版本的演變解讀《紅樓夢》的作者及其寫作歷程」、『雲夢學刊』第43卷第1期（2022年1月）、40-47頁。

読者は作品の背後にある深層的な意味や作者の意図をより深く理解することが可能となる。したがって、脂硯齋の存在を再評価し、その貢献を正當に認識することは、『紅樓夢』研究において不可欠な課題である。

5. 脂硯齋反証学派

欧陽健は『還原脂硯齋：二十世紀紅学最大公案的全面清點』において、秦可卿の「淫喪天香樓」について章を設けて論じている。しかし、その論述には明確な論理的欠陥が見られる。特に、第十三回における「天香樓」に関連する記述に関する議論では、枝葉末節な問題に終始し、例えば天香樓が場所として事件が発生できるかどうかといった問題に拘泥しているだけで、論点の本質を外している。以下、これらの点について具体的に指摘しながら検討を行う。

まず、欧陽健は「淫喪天香樓」に関する検証において、「秦可卿が天香樓で「淫喪」したか否か」という観点から議論を進めている。彼は『紅樓夢』における三つの場面を引用して天香樓の描写を分析している。

检验甲戌本批语说得对不对，可以先从一个细节入手，看看秦可卿是否会“淫丧”于“天香楼”。“天香楼”在《红楼梦》全书中凡三见：

- 1、第十一回宁府庆寿辰，在会芳园里预备下小戏儿，凤姐看过秦氏，从里头绕进园子的便门，转过了一重山坡儿，已来到了天香楼后门，见宝玉和一群丫头、小子们在那里顽，然后款步提衣上了楼。
- 2、第十三回秦可卿死后，另设一坛于天香楼上，请九十九位全真道士，打四十九日解冤洗业醮。
- 3、第七十五回贾珍因居丧无聊，便以习射为由，请了各世家弟兄及诸富贵亲友来较射，在天香楼下箭道内立了鸽子。

可见，天香楼坐落在会芳园里，是个宽敞的公共场所，可容下多人看戏，甚至九十九位道士设坛打醮，宝玉可与丫头小子顽，诸亲友也可前来较射。它和秦可卿的住处，又隔着一道山坡。“淫丧天香楼”云云，虽未说清是“淫”于天香楼，还是“丧”于天香楼，但可以肯定的是，它既不适宜于男女幽会，更非悬梁自尽的地方²⁷。

欧陽健は、これらの描写を基に、天香樓は多くの人が集まる公共の場であり、秦可卿がここで「淫」もしくは「喪」するには不適切であると結論づけている。また、「天香樓は男女が密会する場所でもなく、首吊り自殺に適した場所でもない」とも述べている。しかし、こうした結論は幾つかの点で問題がある。例えば、梁（はり）が存在する建物であれば、広い空間であっても自殺や淫行が発生する可能性は十分にあり得る。さらに、「男女

²⁷ 欧陽健、『還原脂硯齋：二十世紀紅学最大公案的全面清點』、(哈尔滨：黑龙江教育出版社、2003年10月)、229頁。

幽会」という表現は賈珍の「扒灰」行為を軽視しており、秦可卿が賈珍に追い詰められて死に至ったという核心を捉えていない。「淫喪天香樓」とは、賈珍による秦可卿への不義行為により彼女が死に至ったことを意味している。これをただの「男女幽会」と表現するのは著しく不正確である。また、物語の削除された部分が明確ではない状況下で、「天香樓が事件の発生場所である可能性を排除する」という結論を提示するのは早計である。物語内の他の場面、例えば尼寺や山石の背後での事件が描かれることもあるように、断片的な描写に基づいて天香樓で事件が発生し得ないと断定するのは誤りである。

さらに、欧陽健は第七回に登場する焦大の発言を根拠に、脂硯齋の批語を次のように否定している。

脂硯齋说第十三回原来写有四五页“秦可卿淫丧天香楼”的文字，意思是“淫丧天香楼”的情节原稿都在一回中交代完毕。公公与媳妇的乱伦，除非是偶发事件，可以一回写清，但焦大之骂，早在第七回就写到了，他不可能未卜先知。从文本的实际情况看，更是完全不可能的²⁸。

この批語に対して、欧陽健は「第十三回で『淫喪天香樓』の事件が完結する」という脂硯齋の記述を認めながらも、第七回にすでに焦大が「扒灰」について言及しているため、事件が一回内で完結するのは不自然であると主張している。しかし、これは論理的に成り立っていない。焦大の発言は後に起こる事件の伏線として描かれており、物語が第十三回でその結末に至ることは十分に可能である。さらに、「乱倫の事件は一回で描かれるべきだ」という欧陽健の主張は、作者が物語を巧妙に構成し、伏線を張り巡らせている事実を無視している。焦大の短い台詞によって賈府の実情が明かされたように、脂硯齋が記した「四五頁で事件が描かれる」という指摘は、賈珍と秦可卿の関係を描写するのに十分である。

「難得他寫得出，是經過之人也」、「非經過者如何寫得出」、「此回將大家喪事詳細剔盡，如見其氣概，如聞其聲音，絲毫不錯，作者不負大家後裔」、「作書者曾吃此虧，批書者亦曾吃此虧」、「作者猶記矮舫前以合歡花釀酒乎？屈指二十年矣」、「誰曾經過？嘆嘆！——西堂故事」、「鳳姐點戲，脂硯執筆事，今知者寥寥矣，不怨乎？」、「此語余亦親聞者，非編有也」、「前批知者寥寥，不數年，芹溪、脂硯、杏齋諸子皆相繼別去，今丁亥夏，只剩朽物一枚，寧不痛殺」等等；後者如「獄神廟回有茜雪紅玉一大回文字，惜迷失無稿。嘆嘆」。再如第二十一回：「按此回之文固妙，然未見後三十回猶不見此之妙。此回『嬌嗔箴寶玉』『軟語救賈璉』，後文『薛寶釵借詞含諷諫，王熙鳳知命強英雄』。

²⁸ 欧陽健、『还原脂硯齋：二十世纪红学最大公案的全面清点』、230 頁。

今只從二婢說起，後則直指其主。然今日之襲人、之寶玉，亦他日之襲人、他日之寶玉也。今日之平兒、之賈璉，亦他日之平兒、他日之賈璉也。何今日之玉猶可箴，他日之玉已不可箴耶？今日之璉猶可救，他日之璉已不能救耶？箴與諫無異也，而襲人安在哉？寧不悲乎！救與強無別也，甚矣！但此日阿鳳英氣何如是也，他日之身微運蹇，亦何如是也？人世之變遷，倏忽如此！」、「釵、玉名雖二個，人卻一身，此幻筆也。・請看黛玉逝世後寶釵之文字，便知餘言不謬」、「後數十回若蘭在射圃所佩之麒麟，正此麒麟也。提綱伏於此回中，所謂草蛇灰線，在千里之外」等等。這一類批語雖然不多，但卻最為周汝昌先生及考證派紅學研究者看重，認為這就是所謂的「第一手材料」，也是「脂硯齋跟曹雪芹有著特殊的完全不同於一般人的密切關係」的主要證據，在他們看來，這些證據可以解決閱讀《紅樓夢》的重要問題。

脂硯齋還有一些主題揭示、諧音解讀、結構藝術評價、人物性格分析等方面的批語，但最常見的就是以上這三種類型。(中略)

至於第三類批語，不僅在整個批語中數量非常有限，且資訊模糊，經過紅學家這麼多年的研究都難以確定脂硯齋到底是曹雪芹的什麼人，甚至連脂硯齋批語的年代都無法確定，用這樣的批語來構建一種學科體系，其難度不亞於緣木求魚。更重要的，這樣的「學科體系」即使建立起來，價值何在？也許除了為某些研究者坐實他們秉持的自傳說之外，並沒有其他任何的學術方面的意義²⁹。

王俊徳は、脂硯齋批語の「第一手資料」としての価値について、紅学の考証派学者による評価に批判的な視点を示している。具体的には、脂硯齋批語に見られる「難得他寫得出，是經過之人也」「鳳姐點戲，脂硯執筆事」などの発言が、脂硯齋が曹雪芹と特別な関係を持っていた証拠とされている点についての懐疑を示している。このような批語が、「紅樓夢」の解釈における根本的な問題を解決できると考証派学者たち、特に周汝昌らは主張するが、これには根拠が乏しいとする立場である。

脂硯齋の批語には、物語のテーマ提示や登場人物の性格分析、諧音による解釈といった批評も含まれているものの、こうした批語は情報が極めて曖昧であり、脂硯齋が本当に曹雪芹とどのような関係にあったかは明確ではない。また、批語の成立年代すら特定できないものもあり、そのような曖昧な資料に基づいて学問体系を構築しようとする事は「緣木求魚」(木に登って魚を求むるがごとし)と批判されている。さらに、仮にそのような学問体系を構築したとしても、それが学術的に意味を持つかには疑問が残る。むしろ、そのような体系は、自伝説に固執する一部の研究者が自身の立場を補強するために役立つ以外には、大きな価値は見出せないと王俊徳は指摘している。

しかし筆者は、脂硯齋の批語の重要性は、『紅樓夢』が曹雪芹の自伝であるか否か、あるいは脂硯齋の正体に関する他の研究領域の結果によって影響を受けるものではないと強

²⁹ 王俊徳、『紅學二百年管窺：推翻脂硯齋神話 × 曹雪芹作者爭議 × 版本學無意義，論評點派、索隱派與考證派的起源與推廣』、(台北：崧燁文化事業有限公司，2023年9月、POD版)、203-205頁。

調したい。これらの研究領域は、確かに『紅樓夢』に関連する歴史的な研究において重要な探究課題ではあるが、それは脂硯齋が『紅樓夢』に与えた影響力には何ら関わらない。なぜなら、批語の内容とテキストを比較すれば、その重要性は自明だからである。もし誰かがこれに疑問を抱くならば、脂硯齋が「秦可卿淫喪天香樓」を曹雪芹に命じて削除させた事実を、また脂硯齋が「情榜」の存在とその内容を知っていたという事実を、どのように説明するのだろうか。これらの証拠は紛れもなく揺るぎないものであり、この問題こそが、脂硯齋批語を否定する学派が合理的な説明を提示できなければ、永遠にその批判が成り立たない致命的な論点である。脂硯齋批語の否定派の代表である欧陽健の『還原脂硯齋：二十世紀紅学最大公案の全面清点』や、脂硯齋批語否定派の最新研究である王俊徳の『紅学二百年管窺：推翻脂硯齋神話 x 曹雪芹作者爭議 x 版本学無意義、論評点派、索隱派と考証派の起源と推進』といった著作は、いずれも「自伝説」や「考証学」といった論点を中心に展開されている。これは文献や証拠の不足、また脂硯齋の正体の謎が紅学における未解決の問題の一つであること、さらに曹雪芹の自伝説に多くの矛盾が含まれているためであり、こうした問題に関しては多くの議論の余地があることが背景にあると考えられる。筆者も脂硯齋の正体に関する確定的な証拠が不足していることを認め、また曹雪芹の自伝説には時間的な矛盾があり、成立し得ないと考える。しかしながら、この問題は、脂硯齋が共同創作者でなければ書き得ない批語を記したという事実を揺るがすものではなく、ゆえに脂硯齋批語否定派の学者が批語と本文の直接的な関係に言及しない理由も理解できる。なぜなら、批語と本文との関係を見れば、彼らが議論の余地を見出すことは不可能だからである。

脂硯齋の批語は、著者と親密であり、作品内容の改訂権を持ち、作品全体を把握しており、書中人物を非常に高い精度で理解している者でなければ書き得ないものである。したがって、脂硯齋の批語は本文と同等に重要なものであり、彼が誰であるかにかかわらず、その意義は変わらない。脂硯齋批語に対する批判が他の問題にのみ集中するのは、第一に、本文と批語の理解が浅薄であるか、または第二に、脂硯齋批語の重要性を知りつつも意図的に無視し、あるいは軽視しているにすぎない。

四、日本語版『紅樓夢』の版本使用状況

日本における『紅樓夢』の研究には、多くの全訳本が存在し、漢学研究の一環としても多岐にわたる研究が進められてきた。しかし、『紅樓夢』は他の文学作品とは異なり、その研究分野においては「版本」問題と「題名」問題に関して多くの研究と考証が行われている。本稿では、日本における『紅樓夢』の翻訳問題について論じ、特に使用される版本と翻訳の相違点に焦点を当てる。

『紅樓夢』の版本には、「甲戌本」、「己卯本」、「庚辰本」、「甲辰本」、「有正本」、「程甲本」、「程乙本」が存在する。これらのうち、「甲戌本」、「己卯本」、「庚辰本」、「甲辰本」、「有正本」は「脂硯齋評本」の系統に属し、原作者とされる曹雪芹の原稿に最も近いとさ

れている。また、「脂硯齋は原作の創作に関与していた」との見解もあり、この系統は原作に最も忠実であるとされる。一方、「程甲本」と「程乙本」は高鶚によって後四十回が續書されたものである。この点に関して、多くの学者は後四十回が續書されたものであり、前八十回は曹雪芹の原作を用いていると論じている。しかし、「程本」と「脂硯齋評本」の前八十回には多くの違いがあり、その違いによって作品の核心思想が大きく異なる部分も存在する。この点について詳細に論じる研究は少なく、版本問題を論じる際に「程本」と「脂硯齋評本」の前八十回の違いを無視して展開する論点も散見される。

日本語『紅樓夢』全訳版は現在5種類存在する。それぞれの翻訳版の底本と特徴を以下に示しておく。

1. 國訳紅樓夢

底本:「有正本」

特徴:八十回までしか存在せず、脂硯齋批が大幅に削られている。完全な作品とは言えないが、単一の版本を使用している。「解題」にて「原本紅樓夢」を底本に使用したと言明している。「原本紅樓夢」とは「國初抄本原本紅樓夢」であり、この版本には脂硯齋批語が含まれているが、多くが欠落し、署名と日付などが削られたり、文字の修正が加えられている痕跡がある。

2. 松枝茂夫訳本

底本:前八十回「有正本」、後四十回「程乙本」

特徴:1940年～1951年に松枝茂夫によって翻訳された。複数の版本を混用している。前八十回は『國訳紅樓夢』と同様に「有正本」を使用し、後四十回は「程乙本」を使用している。

3. 伊藤漱平訳本

底本:前八十回「原本紅樓夢」、後四十回「程乙本」

特徴:「兪伯校訂『八十同校本』」を参考に訳出。前八十回は庚辰本を底本に用い、後四十回は程甲本を使用した。

4. 飯塚朗訳本

底本:主に「程乙本」を使用し、程甲本や他の120回訳本も参考。

特徴:高鶚の改変版を完全に採用した全訳本。

5. 井波陵一訳『新訳紅樓夢』

底本:前八十回「庚辰本」、後四十回「程甲本」

特徴:他の全訳本も参考にしている。最も新しい全訳本であり、同様上述の翻訳本を参考にしている。「底本、参考文献」の部分で明記されている。

6. 井波陵一の版本使用実態とその問題点

井波の『新訳紅樓夢』において、複数の版本を使用する理由は、「作者」や「原作再現度」に関する問題に「定論」が存在しないためであると述べられている。しかし、版本の違いによって本文に生じる内容の相違を考慮する必要がある、これらの版本を混用することで作品に前後矛盾が生じる可能性がある。まず、『新訳紅樓夢』第一巻の解説において、井波が述べている『紅樓夢』の版本問題に関する論述を以下に引用する。

『紅樓夢』は全一百二十回のうち、前八十回がほぼ曹雪芹の手に成る。『石頭記』の名を冠した八十回本は、遅くとも一七五四（乾隆十九）年ごろから作者周辺の人々によって写本の形で伝えられていたらしい。一七九一（乾隆五十六）年、程偉元と高鶚がはじめて一百二十回の本活字本「紅樓夢」を出版し、以後それに倣った各種の版本が現れて広く読まれるようになった。なかには禁書による取り締りを避けて「金玉縁」と題されたものもある。なお旧説では高鶚を後四十回の補作者とみなしており、本書の表記それを踏襲したが、必ずしも定論とはなっていない。後四十回に雪芹の構想がどのくらい反映されているかについては、まったく無関係とする説から、基本的に活かされているとする説まで、様々に分かれている³⁰。

井波が複数の版本を使用して翻訳を作成する理由は、「作者」や「原作再現度」に関する問題に「定論」がないためであると述べている。しかし、これらの問題について多くの研究者が多方面に研究成果を発表しているとはいえ、版本の違いによって本文に生じる作品自体の内容の相違をも考慮する必要がある。つまり、版本によって作品内容に違いがある場合、これらの版本を別の作品として見做すべきではないだろうか。さらに、原作再現に関して多くの説が存在しているとはいえ、斯界では後四十回が別人による続書であることは基本定説となっているのではないか。

五、問題意識

本稿では、日本における『紅樓夢』研究において、脂硯齋批語の断章取義的な使用現象について考察する。先に述べたように、脂硯齋の批語は『紅樓夢』というテキストの解釈において不可欠な存在である。胡適は脂硯齋の批語に基づき、新紅学の基本概念を創出し、この学派に科学的実証精神を導入した。これにより、『紅樓夢』研究は、単なる憶測に依存する感想文から、実際の文献と証拠に基づく実証的学問へと転換したのである。

多くのテキスト内容は脂硯齋の批語を通じて解釈される必要がある、また、多くの欠落したテキスト内容は脂硯齋の批語から手がかりを得る必要がある。したがって、一般の読者および学術研究者にとって、脂硯齋批語の全面的な解釈と理解は不可欠である。しかし、これまでのところ、日本における『紅樓夢』の訳本において、すべての脂硯齋批語が翻訳

³⁰ 曹雪芹作、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、283頁。

されているものは一つも存在しない。記者は自身の判断に基づき、批語を選別して翻訳しているため、これらの批語は一般の読者や中国語を読解できない学者に完全には提供されていない。この欠如と無視がテキストの誤読や作品の不完全な理解を引き起こす恐れがある。

本稿では、日本における紅学研究の代表的な学者として、伊藤漱平、船越達治、そして合山究らの研究を取り上げ、彼らによる脂硯齋に対する誤読および断章取義的な現象を詳細に検討する。前述の通り、脂硯齋批語が完全には翻訳されていない問題は、日本の紅学研究による論述内容に直接的な影響を与えている。学者が脂硯齋批語の断片を引用する際、その断片を日本語に翻訳することがあるが、筆者は、批語全文が翻訳されていない状況下では、日本の読者は研究者が脂硯齋の意図を全面的かつ正確に理解することができないのではないかと考える。

伊藤漱平「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」では脂硯齋を金聖嘆と同列に扱い、両者が作品に与える決定的な違いを無視している。また、テキストの解釈において、宝玉の「情不情」の評価を正確に理解せず、関連するテキストを議論する際には完全に無視しており、その結果、テキスト内容および脂硯齋批語の誤読を招いている。

船越達治は、『『紅樓夢』成立の研究』の冒頭で脂硯齋による『紅樓夢』の名称変遷に関する批語を引用しているが、その後の全書で『紅樓夢』が5つのミニ小説の合成であると論じている。この論点は、初めから脂硯齋の批語と矛盾しており、船越は批語を引用し、結論が異なる場合でも、自身の論点と脂硯齋の論点が矛盾している理由を説明していない。

合山究はその『『紅樓夢』——性同一性障碍者のユートピア小説』において、脂硯齋の批語を何度も引用しているが、その内容は断片的であり、脂硯齋が「書中人物を理解していない」と主張している。これは自身の論点を正当化するためのものであり、脂硯齋の論点を誤りと見なしている。脂硯齋は作品の成立過程に密接に関連し、作品の変更に対して決定的な権限と証拠を持っているため、合山の主張は極めて自信に満ちているものの、証拠に欠けている。また、合山の書名には「障碍者」という用語が使用されており、彼の論点が偏っており、歪んでいることが示唆される。「障碍者」という誤解を招くような用語をやめて、「性別不一致 (gender incongruence)」の人々に対して基本的な尊重を示すべきではないだろうか。

以上が、筆者の問題意識の概要である。本研究の最終的な目的は、脂硯齋の批語を日本において完全に導入し、一般の読者がこの作品の重要な内容にアクセスできるようにすることである。そして、脂硯齋の批語をより全面的に解釈することにより、断章取義による曲解と誤読を改善し、時代を超えた哲学的価値と思想を持つ文学作品が日本に正しく伝えられ、この作品に興味を持つ多くの日本の読者がその本来の姿を理解できるようにすることを目指している。

六、研究内容と研究方法

1. 研究内容

本稿は、日本における紅学研究において脂硯齋批語がどのように誤読されてきたかを説明することを目的とする。特に、伊藤漱平、船越達治、合山究の三名の研究者による誤読の実態と、それが『紅樓夢』の理解および評価に及ぼした影響を詳細に検討する。以下に、各章の構成を示す。

第一章では、伊藤漱平が『脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書』において行った脂硯齋批語の解釈を精査し、その誤読の実態を明らかにする。特に、石兄と玉兄の関係性に関する誤解が、どのようにして『紅樓夢』の根幹思想を歪曲したのかを考察する。なかでも、伊藤が脂硯齋批語の一部を断片的に引用し、それを誤った解釈の根拠としている点を分析する。具体的には、石兄と玉兄の混同により宝玉の象徴性が歪められている問題を取り上げ、これが作品全体のメッセージにどのように影響しているかを検討する。また、伊藤の誤読が日本紅学研究に及ぼした影響を考察する。脂硯齋批語の正確な解釈が行われなかったことにより、『紅樓夢』全体の理解がどのように損なわれているかを明らかにし、その学術的意味について論じる。

第二章では、船越達治が『紅樓夢』を5つのミニ小説の合成であると主張する際に、彼がどのように脂硯齋批語を断片的に引用し、それを自身の理論に組み込んでいるかを精査する。本章の目的は、彼の研究方法における問題点を明確にし、脂硯齋批語がいかに誤解され、それが『紅樓夢』全体の解釈を歪めているかを分析することにある。具体的には、船越が脂硯齋批語の文脈を無視して断片的に引用することが、『紅樓夢』の全体的な理解にどのような影響を与えているかを検討する。彼の方法論が、作品のテーマや登場人物の描写に対してどのような誤解を生じさせたのか、批判的に論じる。また、船越による批語の断片的な引用が、日本における紅学研究にどのような誤解をもたらし、その結果として研究の正確性がどのように損なわれたかを考察する。さらに、脂硯齋批語の正確な理解がなされないことが、作品の評価や読者の理解にどのような影響を与えているかについても議論する。

第三章では、合山究が脂硯齋批語を断章取義し、自身の理論に都合よく利用している実態を分析する。特に、脂批の一部を抽出し、それを作品全体の解釈に当てはめる際に生じる問題点を明確にし、その学術的な妥当性を検証する。具体的には、合山が脂硯齋批語を偏頗な視点で解釈し、それが作品の理解にどのような影響を及ぼしているかを考察する。特に、彼の研究における特定の視点に偏った解釈がいかんして『紅樓夢』の全体像を歪曲しているかを考察する。また、合山の偏頗な解釈が日本の紅学研究にどのような影響を与えたかを検討する。脂硯齋批語の正確な理解が行われていないことによる学術的な課題を明らかにし、また合山の研究が『紅樓夢』の受容と解釈に及ぼした影響についても分析する。

2. 研究方法

本研究は、以下の方法論に基づいて、日本における『紅樓夢』研究における脂硯齋批語の誤読現象を分析する。テキスト比較分析、歴史的な文脈の考察、影響分析、理論フレーム

ワークの適用を通じて、誤読の原因とその学術的影響を明らかにすることを旨とする。

(1) テキスト比較分析

脂硯齋批語の原文と、伊藤漱平、船越達治、合山究の三名の研究者による解釈を詳細に比較することで、誤読の具体的な箇所とその原因を明らかにする。特に、彼らがどのように批語を断片的に引用し、その文脈を無視して解釈しているかを分析することで、誤読のパターンを浮き彫りにする。

(2) 歴史的文脈の考察

各研究者の学術的背景や研究史を考察し、彼らがなぜ特定の解釈に至ったのかを明らかにするために、歴史的な文脈を探る。特に、彼らがどのような学術的影響を受け、どのような理論的枠組みのもとで脂硯齋批語を解釈したのかを検討する。

(3) 影響分析

テキスト比較分析と歴史的な文脈の考察を通じて、誤読が日本の紅学研究全体に与えた影響を評価する。誤読が作品のテーマ、キャラクターの描写、物語のメッセージに与えた影響を具体的に検討し、それがどのようにして研究の正確性を損なったのかを分析する。

(4) 理論フレームワークの適用

文献学や解釈学の理論を用いて、誤読の原因とその影響を理論的に位置づける。これにより、脂硯齋批語の正確で一貫した解釈を促進し、誤読の是正に向けた理論的基盤を提供することを旨とする。

第一章 脂硯齋評語をめぐる誤読

一、「石兄」と「玉兄」関係の混同

ここではまず、伊藤漱平「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」から一部を引用して考察する。



そこで「改作」の主はだれかという問題になるが、後に述べるような、この作品に対して曹の取った纂修者としての姿勢を考え合わせるとき、彼が自らなしたこととは考えにくい。一方、「石頭記」の「本名」を愛でてこれに戻した脂硯は寶玉と頑石の関係をどのように扱っているか。脂に在っては、寶玉のことを「玉兄」と呼び、頑石のことを空空道人に倣って「石兄」と呼び、一應の區別はしているものの、時にその區別をしない例も見られる。例えば「甲戌」本第八回回目の後の句は「賈寶玉大醉絳芸軒」であるが、同回の朱筆眉批には、「今加「大醉」二字于石兄……石兄眞大醉也」とあり、ここでは寶玉郎頑石として扱っている。作者一石頭寶玉の關係の消息をはからずも脂硯は洩らしたものかも知れない。こう見てくると、問題の「改作」は脂硯の仕業のようにも思われるが、あるいはまた鈔者の仕業であって、それも「庚辰」本等の原底本のこの部分には葉分約四百字の缺葉があったため、轉鈔の際、このような無造作かつ不器用な前後のつなぎ方をしたものかも知れない³¹。

上引において、伊藤は脂批を熟読し、脂批が石と宝玉を別の存在として扱っていることを認識している。その上で、「賈寶玉大醉絳芸軒」における評語「今加「大醉」二字于石兄……石兄眞大醉也」に基づき、脂硯齋が石と宝玉を同一存在であることを暗示したとの証拠として提示し論じた。しかし、筆者はこれが誤読である可能性があると考える。以下に、伊藤が提示した部分の中国語原文と、脂批の完全な前後文を参照しながら、伊藤の論述を検証する。

そこでまた晴雯に向かって言いました。「今日わたしがあちらのお屋敷で朝御飯をいただいた際に、湯葉の包子が出たんだ。あんたが好きだったことを思い出したので、珍さんの若奥さんに、取っておいて夜に食べるから人に届けさせて欲しい、とお願いしたんだけど、もう食べた？」〔奶母之倚勢亦是常情，奶母之昏憤亦是常情。然特于此處細寫一回，與後文襲卿之酥酪遥遥一對，足見晴卿不及襲卿遠矣。余謂晴有林風，襲乃釵副，真真不假。〕「その件はおっしゃらないで！届けられた時すぐに、わたくしのだなんて分かりましたが、あいにく御飯をいただいたばかりだったので、置きっぱなしにしておいたんです。そこへ後から李ばあやがやって来て目を見ると、「宝玉さまはたぶん召し上がらないだろう。持って帰ってうちの孫に食べ

³¹ 伊藤漱平「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」、『伊藤漱平著作集 第一巻』（東京：汲古書院、2005年）、129頁。

させてやろうかね」と言うのと、人に持って帰らせてしまいました」。続いて茜雪がお茶を捧げ持って来ます。宝玉は、「黛玉ちゃん、お茶をどうぞ」と勧めます。皆は笑いながら言いました。「「黛玉ちゃん」[三字是接上文口氣而來，非衆人之稱。醉態逼真。]はとっくに行ってしまったのに、まだお勧めするなんて！」[寫顰兒去，如此章法從何設想？奇筆奇文。]宝玉はちょっと口をつけたところで、ふと今朝のお茶のことを思い出し、[偏是醉人搜尋得出細事，亦是真情。]そこで茜雪に尋ねました。今朝、楓露茶[與“千紅一窟”遙映。]を淹れた時、あのお茶は三、四回出してはじめて本格的な味わいがするんだって言っただろ？なのにどうしていままたこれを淹れたの？」[所謂閒茶是也，與前浪酒一般起落。]「もとより取っておいたのですが、李ばあやが来られた際に飲みたいとおっしゃるものですから、淹れてさしあげました」。[又是李嬾，事有湊巧，如此類是。]宝玉はそれを聞くと、手に持っていた湯呑み茶碗をいきなり[是醉後，故用二字，非有心動氣也。]床に投げつけます。[按警幻情榜，寶玉係“情不情”。凡世間之無知無識，彼俱有一痴情去体贴。今加“大醉”二字于石兄，是因問包子、問茶、順手擲杯、問茜雪、攢李嬾，乃一部中未有第二次事也。襲人數語，無言而止，石兄真大醉也。余亦云實實大醉也。難辭醉鬧，非醉蟠紈綺輩可比！]ガチャーンと音がして、湯呑み茶碗は粉々に砕けてしまい、茜雪の裙子一面にお茶が飛び散ります。宝玉は飛び上がって茜雪に詰め寄りしました。あいつはあんたたちのどの一門のばあさまだというの？こんなにも至れり尽くせりにしてやるなんて！わたしが小さい時に何日かあいつのお乳を飲んだというだけじゃないか。[真醉了。]いまではおばあさまよりももっと偉そうにしている始末。もうお乳を飲む必要もなくなったんだし、いつまでもおばあさま扱いしてどうする！追い出してしまえば、皆がせいせいするさ」。[真真大醉了。]そう言うと、ただちにおばあさまに注進に及んで、自分の乳母を追い出してもらおうとします³²。(下線は引用者)

まず、伊藤もその論考で言及した通り、脂批は石について言及する際には「石兄」と、宝玉について言及する際には「玉兄」と称している。この法則が崩れることはまずないため、石と宝玉とが別々の存在である証拠にもなる。とすれば、「賈寶玉大醉絳芸軒」の段落でのみ呼び方を変えるのは考えにくい。では、脂批が呼び間違いをしていない、そして本当に宝玉ではなく石が酔っていることを前提として解釈する場合と、伊藤の提示した可能性を比較して考えてみる。

伊藤の説で考えると、ここでの宝玉は茶を飲んでおり、さらにこの時に酒を飲んで、怒って茶碗を割ったことになる。つまり、脂批で言う「石兄大醉」はまさに酔って怒っている宝玉を指すことになる。しかし、そのように解釈すると、脂批の他の評語と辻褃が合わなくなる。例えば、「大醉」に関する評語の全文は次の通りである。

³² 曹雪芹作、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、164-166頁。

按警幻情榜，寶玉係“情不情”。凡世間之無知無識，彼俱有一痴情去体贴。今加“大醉”二字于石兄，是因問包子、問茶、順手擲杯、問茜雪、攢李嬾，乃一部中未有第二次事也。襲人數語，無言而止，石兄真大醉也。余亦云實實大醉也。難辭醉鬧，非醉蟠紈綺輩可比³³！

ここでの宝玉に対する「情不情」という脂批の評語は、「この世の情を持たぬものに対しても慈しみ愛する」という意味を持つ。ここで「情を持たぬもの」とは木や草、そして器など感情を持たないものを指す。また、前の脂批「是醉後，故用二字，非有心動氣也」とは、宝玉が酒を飲んでいるが、怒っているわけではないと述べている。この一連の行動には別の原因があると暗示されており、宝玉は「この世の情を持たぬものに対しても慈しみ愛する」人間であり、世間の知性なきものに対しても優しさを持って接するということが強調されている。

脂批が石について言及する際には「石兄」、宝玉について言及する際には「玉兄」と称している。この呼称の法則が崩れることはなく、石と宝玉は別々の存在である。この「賈寶玉大醉絳芸軒」の段落においても、呼び方を変えることは考えにくいため、脂批の「石兄真大醉也」という記述は、実際に宝玉ではなく石兄が酔っていることを前提として解釈するのが自然である。伊藤漱平が指摘したように、宝玉の行動は内面的な葛藤や抑圧された感情を表しているが、それを怒りの感情として捉えることは誤りである。宝玉は酔ったふりをし、普段言えない不満や苦痛を表現するための手段としてこの場面を利用している。

この場面で、宝玉は社会的な規範に縛られており、乳母に対して直接的な不満を表すことができない。しかし、乳母が自分の物を勝手に持ち出すことに対して内心で不満を感じている。この抑圧された感情が酒を飲むことで表面化したのが、実際には怒りを伴っていない。むしろ、宝玉は冷静に計算された行動を取っており、酔ったふりをしてその感情を表に出している。さらに、この「賈寶玉大醉絳芸軒」の場面では、宝玉は酒の力を借り、普段は言えないことを言い放つことで、内に秘めた不満と葛藤を解消しようとしている。しかし、実際には冷静さを保っており、彼の行動は感情的な反応ではなく、計画的であることが示されている。

脂硯齋の「石兄真大醉也」という批評は、物語の記録者としての石頭が物語を誤解している可能性を示唆している。この批評は、読者に対して場面の真意を理解し、単に表面的な理解に留まることなく、キャラクターの内面的な葛藤や感情を正確に見抜くよう促している。宝玉の行動は原文では「順手」であり、翻訳では「いきなり」と訳されているが、「順手」は「ついでに」の意味があり、感情が含まれていない描写になっている。茶碗を

³³ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、胡適紀念館出版（台北：松民彩色印刷有限公司、1984年）、125頁。

投げる行動は、無意識的で感情的であるように見えるが、作者はこの動作の描写から、宝玉の計画性と目的性を示唆している。

総じて、「石兄真大醉也」という脂硯齋の批評は、読者に対する警鐘であり、物語の深層にあるキャラクターの真実を見逃さないよう促している。これは、石兄と宝玉が別個の存在であることを明確に示しており、読者が物語を正しく理解するために必要な指針である。

二、「情不情」

『紅樓夢』における「情」の概念は、作品全体を通じて極めて重要なテーマである。以下、先行研究を整理しつつその議論を考えていく。

1. 陳維昭の研究

陳維昭 (2022)³⁴は、『紅樓夢』の原題である『金陵十二釵』が曹雪芹の「情」の核心を表現していると指摘している。脂硯齋や畸笏叟はこの書名を否定したが、曹雪芹自身は『金陵十二釵』という書名を好んで使用していたことが確認されている。この書名は「閨閣昭伝」の創作意図を強調し、女性群像の描写に焦点を当てている。さらに、陳は『金陵十二釵』という書名が大観園の女性たちの物語であり、これは作品の一部である「警幻情榜」と密接に関連していると述べている。警幻情榜は『紅樓夢』の登場人物たちの「情」の属性を示すものであり、曹雪芹はこの情榜を通じて各キャラクターの運命を描写している。このように、「情榜」と『金陵十二釵』の呼応関係を強調することは、『紅樓夢』の成書過程を理解する上で重要であるとされている。脂硯齋の批評においても「情」は主要なテーマとして取り上げられ、例えば宝玉の「情不情」や黛玉の「情情」など、登場人物の感情や行動が詳細に描かれている。脂硯齋は特に、女性キャラクターの複雑な感情とその悲劇的な運命に注目しており、これにより『紅樓夢』の「情」の深層が浮き彫りにされている。

2. 田佳瀧の研究

田佳瀧 (2015)³⁵は、『紅樓夢』における賈宝玉の「情不情」という概念を新たに探求し、その複雑な心理と感情の二重性を解明している。彼女は、「情不情」が単に情から不情へと変化する過程ではなく、情と不情が交錯しあう矛盾した関係であると指摘している。

田佳瀧はまず、賈宝玉が「情不情」として描かれる背景を脂硯齋の批評に基づいて解説している。脂硯齋は、賈宝玉が「凡世間無知無識，彼俱有一痴情去体贴」と評し、その感情がいかにかに広範であることを示しているが、田佳瀧はこれを一面的な解釈と捉えている。彼

³⁴ 陳維昭、「《金陵十二釵》與曹雪芹及其他」、『紅樓夢學刊』二〇二二年第一輯、63-78頁。

³⁵ 田佳瀧、「賈寶玉之為“情不情”新探」、『甘肅廣播電視大學學報』第25卷第2期(2015年)、25-28頁。

女は、宝玉が一部の人々や物に対して情を注ぐ一方で、他の面では不情を示すという二重性を持つと論じている。

また、田佳瀨は賈宝玉の感情が「情至」という極致に達し、最終的には「不情」に至る過程についても言及している。彼女は、『紅樓夢』全体が感情の起点から終点までの物語であり、賈宝玉の感情の変遷がその中心テーマであると指摘している。この過程において、賈宝玉が自己の存在を消し去ろうとする試みや、理想の女性世界に安住しようとする姿勢が描かれており、これは彼の感情の深さと矛盾を示している。

さらに、田佳瀨は「情不情」の概念が賈宝玉の人格形成においてどのように機能したかを詳しく述べている。彼女は、賈宝玉が理想と現実の間で揺れ動き、その結果として自己の消滅を願うという複雑な心理を描き出している。この視点から、田佳瀨は賈宝玉の「情不情」が単なる感情の変化ではなく、深い内面的葛藤とその解決を求める過程であると結論付けている。

このように、田佳瀨の研究は、『紅樓夢』における賈宝玉の「情不情」という複雑な感情とその内面の葛藤を解明し、作品全体の感情描写に対する新たな視点を提供している。

3. 孫遜の研究

孫遜 (2014)³⁶は、『紅樓夢』における「情情」と「情不情」の概念を倫理文明と生態文明の視点から解釈している。彼の研究は、曹雪芹がこの2つの概念を通じて、人物間の関係だけでなく、人と自然との関係をも描写した点に注目している。

孫遜によれば、「情情」とは、林黛玉が自身の感情を宝玉に対してのみ注ぐ一途な姿勢を指し、一方、「情不情」とは、賈宝玉が感情を持たない対象にも深い情を持つことを示している。例えば、宝玉が落花を葬る場面や、黛玉が花を葬る場面は、自然に対する深い感情と尊重を示しており、これが「情不情」の具体的な表現であるとされる。

また、孫遜は、曹雪芹がこのような感情描写を通じて、中国古代文学における倫理文明思想と生態文明意識を継承し発展させたと論じている。彼は、儒家思想や道家思想の影響を受けた曹雪芹が、『紅樓夢』を通じて、人間と自然の調和と共生の重要性を強調していると述べている。

孫遜の研究は、『紅樓夢』における「情情」と「情不情」の概念を倫理文明と生態文明の視点から再解釈し、これが作品全体の深いテーマとして機能していることを示している。

³⁶ 孫遜、「“情情”與“情不情”：《紅樓夢》倫理文明和生態文明的現代闡釋」、《紅樓夢學刊》二〇一四年第三輯、1-15頁。

また、彼の研究は、曹雪芹が感情描写を通じて、現代にも通じる普遍的な価値観を提示していることを明らかにしている。

このように、孫遜の研究は、『紅樓夢』における感情描写が単なる人物間の関係描写にとどまらず、人と自然との調和を描く重要な要素であることを示しており、これにより作品の多層的なテーマが浮き彫りにされている。

以上の先行研究を通じて、『紅樓夢』における「情」の概念がどのように多角的に解釈され、作品全体のテーマや構造の理解に重要な役割を果たしているかが明らかになった。陳維昭の研究は、『紅樓夢』の原題『金陵十二釵』と「警幻情榜」の関係を強調し、詹丹は女性群像の感情描写の重要性を示している。田佳漣は賈宝玉の「情不情」の複雑な内面の葛藤を解明し、孫遜は「情情」と「情不情」を倫理文明と生態文明の視点から再解釈している。

4. 脂硯齋批語の位置

『紅樓夢』はその深遠な感情描写と複雑な人間関係の絡み合いにより、文学史上不朽の名作として評価されている。この作品における「情」の概念は、物語全体を貫く重要なテーマであり、登場人物たちの行動や運命を深く左右している。特に、賈宝玉の「情不情」は、彼のキャラクターを理解するための重要な手がかりの一つとして、多くの研究者によって注目されている。しかし、この「情不情」の概念は、脂硯齋の批語にのみ存在する独特な要素であり、そのため、脂硯齋の批語は『紅樓夢』を解析する上で欠かせない資料となっている。脂硯齋は、曹雪芹の親友であり、彼の作品に対する深い理解と洞察を持っていた。脂硯齋の批語は、作品の細部にわたるコメントや解釈を提供し、登場人物たちの行動や感情の背後にある意味を明らかにしている。特に、「情不情」という概念は脂硯齋の批語にのみ見られるものであり、これを通じて賈宝玉の複雑な内面をより深く理解することができる。

本稿では、脂硯齋の批語における「情榜」や「情不情」、「情情」などの要素の重要性と必要性を認識し、これらの要素を無視して宝玉を論じることの問題点を解析する。具体的には、賈宝玉の感情の変遷とその物語への影響を詳細に分析し、「情」がどのようにして物語全体の駆動力となっているかを明らかにする。また、脂硯齋の批語を考慮しない解析では、賈宝玉の複雑な内面の葛藤や感情の深層に十分に迫ることができないことを示し、脂硯齋の批語を参照することの重要性を強調する。

三、脂硯齋に対する誤評価

次に、脂批に対する伊藤漱平の解釈に違和感を覚えた部分について例を挙げて論じていく。伊藤は、脂硯齋が金聖嘆を「参考にしている」、もしくは『紅樓夢』が『水滸伝』を

参考にしていると指摘している。以下、伊藤が提示した論点を検討する。

曹雪芹が初稿の「風月寶鑑」を基に百回(?)から成る「石頭記」を書き上げたのは、乾隆十九年甲戌以前の数年間のことであろう。作品の結末に置かれた賈家の“抄没”(家産沒收一族處罪)等の悲惨なプロットは、読者をして作者の“影射”(モデルを暗示)せんとした史實をたやすく察知せしめた。そのため原稿が作者の周囲で廻覧されていた段階で、果たしてこの作品を広く世に問うことができるかどうかを懸念する聲が聞かれた。脂硯齋はこの作品を後世に伝えるために、雪芹に向かって金聖嘆が「水滸傳」を“腰斬”に處したためしに倣い、作品七十回本に仕立て直すことを勧めた。雪芹はこの忠告を聴き入れ、書き改めたものが七十回本「紅樓夢」なのである³⁷。

このように、伊藤は脂硯齋、金聖嘆と曹雪芹を比較し、『紅樓夢』の成立および題名の定め方に『水滸傳』を参考していると述べている。しかし、これらの推測は伊藤の仮説に過ぎず、脂硯齋の評語や『紅樓夢』の作品中にこのような言及があるわけではない。したがって、この比較や推測は妥当ではないと考える。また、伊藤は次のように述べている。

さて「石頭記」なる題名は、石上に記された物語ないしは石にまつわる物語の意のほか、次のように解されぬこともない。即ち、「水滸傳」が水の滸り、梁山泊に集った好漢たちの物語であるのに対し、「石頭記」は石の頭に生起した佳人たちの物語なのである。この題名がこのような意味をも孕んでいることは、当初命名の際には意識に上らなかったかも知れぬ。しかし、この作品が「五次」の改稿の結果「水滸」の「天罡星」三十六人に當る「十二釵」正・副副三十六人の備った『十二釵』稿として成立したとき、作者である霽がおそらく「水滸」を意識していたであろうと同様に、この作品は金聖嘆ばりの批評を加えようとする脂硯にとって、そのような題名として意識されなかったはずはなかろう。(禁書の「水滸」に對置さるべきものだとは、さすがに「凡例」のなかでは言っていないけれども。)「石頭記」の「本名」が再び採用された理由の一つもそこに在るのではなかろうか³⁸。

伊藤は、『紅樓夢』の題名『石頭記』について、『水滸傳』との類似性を指摘している。つまり伊藤は『石頭記』という題名は、「石上に記された物語」や「石にまつわる物語」として解釈されるが、これに加えて、『水滸傳』が水の滸(ほとり)、すなわち梁山泊に集った好漢たちの物語であるのに対し、『石頭記』は「石の頭(ほとり)」に生起した佳人たちの物語として理解することもできる。このような解釈は、当初の命名時には意識されて

³⁷ 伊藤漱平、『『紅樓夢』成立史憶説』、『伊藤漱平著作集 第二巻』(東京:汲古書院、2008年)、93頁。

³⁸ 伊藤漱平、「脂硯齋と脂硯齋評本に関する覚書」、『伊藤漱平著作集 第一巻』(東京:汲古書院、2005年)、132頁。

いなかったかもしれないが、曹霑が「五次」の改稿を経て『紅樓夢』を「十二釵」の稿として成立させた際には、『水滸伝』を意識していた可能性があると考えている。

さらに伊藤は、金聖嘆の批評手法を模倣しようとする脂硯齋にとって、『石頭記』という題名がこのような意味を持っていたことは意識されていたはずであり、このことが『石頭記』という「本名」が再び採用された理由の一つである可能性があるとして述べている。

伊藤の研究は、『石頭記』の題名に込められた意図や背景を『水滸伝』との関連性から解釈することを試みており、特に「十二」という数字の使用において、『水滸伝』との呼応があるという点においては支持できる。『紅樓夢』における「十二釵」という設定が『水滸伝』の「三十六天罡」と呼応しているという指摘は妥当であり、両者の間に意図的な関連性がある可能性は高い。

しかし、脂硯齋の批評手法が金聖嘆のそれと本質的に同じであるとする伊藤の主張には大きな矛盾が存在する。脂硯齋の評語は、単なる批評を超えて原作の補完資料としての役割を果たしており、作者である曹霑との密接な関係性が推測される。そのため、脂硯齋の評語を金聖嘆の批評と同一視することは適切でないと考える。

また、脂硯齋が曹雪芹と密接な関係にあった可能性が高いことから、彼の役割は単なる批評家にとどまらず、共同創作者または指導者としての役割を果たしていたと考えられる。この点において、脂硯齋の評語は『紅樓夢』の解釈において極めて重要な資料となるが、金聖嘆の批評とは性質が異なる。

伊藤が指摘するように、『紅樓夢』における「十二釵」という設定は、『水滸伝』の「三十六天罡」と呼応している可能性がある。しかし、この数字の使用については、より広い文化的背景を考慮する必要がある。中国文学において、「十二」という数字はしばしば特別な意味を持ち、古典文学や神話、民間伝承において頻繁に使用されている。(例えば：「牛僧孺金釵十二行」など)したがって、『紅樓夢』における「十二釵」という設定も、単に『水滸伝』の影響を受けたものではなく、より広範な文化的・文学的伝統に基づくものである可能性が高い。

伊藤漱平の研究は、『紅樓夢』と『水滸伝』の間にある可能性のある関連性を探求する上で興味深い視点を提供している。しかし、脂硯齋の役割や彼が金聖嘆の影響を受けたという見解については、さらなる検証が必要である。脂硯齋の評語は、『紅樓夢』の解釈において極めて重要な役割を果たしているが、その性質は金聖嘆の批評とは異なり、両者を同一視することは適切ではない。今後の研究においては、脂硯齋の役割をより正確に評価するために、さらなる資料の検討が求められるであろう。

このように、伊藤の仮説は推論の域を出ないものであり、現時点では仮説に過ぎない。そのため、脂硯齋と金聖嘆の比較は慎重に行う必要があり、両者の違いを明確に理解することが重要である。

四、結び

脂硯齋と曹雪芹の関係性、および『紅樓夢』における脂硯齋の役割は、作品の成立過程やその文学的価値を理解する上で極めて重要である。本稿では、脂硯齋が『紅樓夢』において果たした独自の役割を考察し、伊藤漱平による脂硯齋と金聖嘆の比較について批判的に検討する。脂硯齋は、作品の創作意図や芸術的技法に深い洞察を示し、評点を通して『紅樓夢』の解釈と評価を大いに助ける重要な存在である。彼の評点は単なる批評を超えて、作品を補完する資料としての役割を果たし、作品の理解に不可欠な手がかりを提供している。たとえば、甲戌本の第一回には「能解者方有辛酸之泪，哭成此書」という眉批があり、これは作者の苦悩や涙が作品に反映されていることを示唆している。脂硯齋は曹雪芹の人生の苦難や家族の不幸に深い共感を抱き、それを批評の中で表現している。

伊藤漱平は、脂硯齋が金聖嘆の批評手法を模倣し、『紅樓夢』の成立や題名の選定に『水滸伝』を参考にしたと論じているが、この見解は推測に過ぎず、作品内で具体的な言及が見られないため妥当ではない。脂硯齋の評語は、作品内容を補完し解釈を助けることを目的としており、その手法や意図は金聖嘆とは異なる。脂硯齋の評語は、曹雪芹との密接な関係が推測されることから、彼の役割は単なる批評家を超え、共同創作者や指導者としての役割を担っていた可能性がある。脂硯齋の評点は、物語のテーマや登場人物の動機に関する洞察を提供し、読者が物語の深層を理解するためのガイドラインを示している。例えば、物語の進行やキャラクターの動機に関する重要な背景情報を提供し、読者が作品の全体像を把握する助けとなっている。

そのため、脂硯齋と金聖嘆の比較は慎重に行う必要がある。脂硯齋の評点は、『紅樓夢』の解釈において不可欠な資料であり、彼自身の経験と曹雪芹との関係が作品の評価や解釈に影響を与えていることは明白である。『紅樓夢』と『水滸伝』の間に見られる関連性も、単なる数字や題名の類似性を超え、両作品が共有する文化的背景や文学的伝統にまで踏み込んで考察する必要がある。こうして、『紅樓夢』の成立過程やその文学的価値をより深く理解することが可能になる。

第二章 「列女伝」説の検討

本章は、船越達志『『紅樓夢』成立の研究』³⁹の内容をめぐる考察であり、特に金陵十二釵の人物形象と女性描写に焦点を当てている。船越の仮説を検証し、『紅樓夢』における金陵十二釵の描写が如何にして形成され、その過程でどのような変遷があったのかを明らかにすることを目的とする。これにより、『紅樓夢』成立過程に関する新たな視点を提供する。

一、船越達志の『金陵十二釵』列女伝説

本節では、まず船越が金陵十二釵を列女伝とする説を整理する。

1. 金陵十二釵の概要

船越の説によると、まず、金陵十二釵とは、物語の中で特に重要な役割を果たす十二人の女性キャラクターの総称である。これらのキャラクターは、賈府の貴族生活を象徴する存在であり、それぞれが異なる個性と運命を持つ。具体的には、賈宝玉と関連がある林黛玉、賈元春、賈探春、賈迎春、賈惜春、史湘雲、妙玉、王熙鳳、薛宝釵、李纨、秦可卿、巧姐などが含まれる。彼女たちの物語は、賈府の栄枯盛衰と密接に結びついており、それぞれの人生が象徴的に描かれている。

金陵十二釵の人物像は、一見すると非常に多様であり、個々のキャラクターが独自の特徴を持つ。しかし、詳細に分析すると、これらのキャラクターには共通するテーマやモチーフが存在していることがわかる。それは「美貌」と「才能」、そして「悲劇的な運命」である。これらの要素は、各キャラクターの描写に一貫して見られる。例えば、林黛玉は、その美貌と才能、そして繊細な感受性で知られるが、その運命は非常に悲劇的である。彼女の病弱な体質や、賈宝玉との愛情の行方が常に不安定であることが、彼女の物語に深い悲劇性を与えている。薛宝釵も同様に、美貌と才能に恵まれているが、彼女の運命もまた困難であり、特に賈宝玉との結婚において多くの葛藤と困難が描かれている。

2. 女性描写の視点

船越は、金陵十二釵の女性描写が、元々のミニ小説「金陵十二釵」に基づくものであるが、現行の『紅樓夢』においては、その描写がさらに深化され、複雑化していると指摘する。具体的には、美貌と才能に加えて、女性の苦悩や内面的な葛藤が詳細に描かれている。このような描写の変遷は、『紅樓夢』の成立過程における重要な手がかりを提供する。例えば、林黛玉や薛宝釵の物語は、それぞれ独立した恋愛譚として存在していた可能性がある。これらの物語が統合される過程で、キャラクターの描写やストーリー展開に矛盾や重複が生じることは自然なことであり、現行の『紅樓夢』に見られる矛盾点や不一致は、こ

³⁹ 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、(東京：汲古書院、2005年)。

の統合過程の結果であると考えられる。

3. 別個の小説としての金陵十二釵

船越の仮説によれば、『紅樓夢』の主要登場人物である金陵十二釵の各キャラクターは、それぞれが独立した物語の中心的存在として描かれていた可能性がある。この仮説は、現行の物語構造が最初から一貫して描かれていたものではなく、複数の独立した物語が後に融合されていったとするものである。例えば、林黛玉や薛宝釵に関するエピソードは、現在は一つの恋愛劇として統一されているが、元来はそれぞれの人物が異なる物語の主人公として、個別に恋愛や悲劇を描く物語が存在していたと考えられる。

特に林黛玉の物語は、単独で悲劇的な恋愛譚を形成していた可能性があり、彼女の孤独や宿命に対する悲哀がより色濃く表現されていたと想定される。また、薛宝釵に関しても、彼女が表現する冷静さや現実的な側面を際立たせた物語が存在し、彼女が別の主人公として恋愛や家庭内での葛藤を描く独立した物語があったと推測される。こうした仮説は、金陵十二釵という登場人物が一つの作品内で統合されたのではなく、複数の独立した物語の主人公が集結し、編纂の過程で重層的な物語構造が形成されたと考える視点に基づくものである。

4. (大) 金陵十二の存在

船越は、現行本に近い形の「(大) 金陵十二」の存在を提唱する。この仮説は、現行の『紅樓夢』における女性描写の変遷を理解する上で重要である。すなわち、作者は各ミニ小説を集成した後、女性描写を前面に押し出した「金陵十二釵」の書名を再び与えたとする。この仮説を裏付ける証拠として、現行の『紅樓夢』における女性キャラクターの描写が挙げられる。具体的には、各キャラクターが美貌と才能だけでなく、深い内面的な苦悩や葛藤を抱えている点である。これらの描写は、単なる美貌の描写から、より複雑で深い人間性の表現へと進化している。例えば、史湘雲のキャラクター描写においても、美貌と才能が強調される一方で、彼女の内面的な葛藤や人生の困難が詳細に描かれている。湘雲の物語には、結婚に対する不安や家庭内での役割に対する葛藤が描かれており、これが彼女のキャラクターに深みを与えている。このように、金陵十二釵のキャラクターは、単なる美貌の象徴ではなく、より深い人間性と複雑な感情を持つ存在として描かれている。

また、王熙鳳の描写においても、彼女の美貌と才能が強調される一方で、その権力欲や内面的な葛藤が描かれている。彼女の物語には、権力闘争や家庭内での葛藤が詳細に描かれており、これが彼女のキャラクターに複雑性を与えている。

二、船越達志の列女伝説をめぐる検討

1. 香菱の重要性への軽視

筆者は、船越の前記の主張に対して再考する必要がある。船越は十二金釵の個性や遭

遇を美貌や才能、悲劇的な運命といった単純な要素に分化しているが、これは過度な簡略化であり、それぞれのキャラクターが持つ複雑な人間性や社会的背景を無視していると考えられる。また、船越の論述は、正冊と副冊の区別を単純に「優劣」と「重要度」の違いと捉えているが、筆者はこれに異議を唱える。正冊と副冊の区別は、当時の社会的な地位や身分の差異によるものであり、作品においての重要性の観点から見ても、副冊のキャラクターも決して正冊のキャラクターより出番が少ない訳ではない。これらの女性たちが直面する現実的な問題は、彼女たちの個性や運命に深く影響を与えている。さらに、筆者は脂硯齋の批語を通じて、この問題を解析する。脂硯齋の批語は、『紅樓夢』の理解において重要な視点を提供しており、船越の仮説がこの批語を十分に考慮していない点も問題である。そこで、ここでは船越の仮説を批判的に検討し、脂硯齋の批語を含む多角的な視点から『紅樓夢』のテキストを再評価してみる。

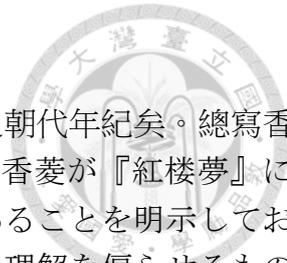
まず、船越が「金陵十二釵」に対する総まとめの議論を見ておく。

本節で考察した十人の女性にはすべて、美しい容貌と称賛に値する形象が設定されている。そしてその反面に、そういった美しく称賛すべき女性たちが現実社会に生きていく際の苦悩が設定されている。王熙鳳は容貌が美しく、大家族賈家の家事を立派に切り盛りする有能な嫁である。しかし反面、それが為に姑邢夫人の不興をかい、嫁姑問題に苦悩する。賈探春は美しく有能な女性であり、それが為に賈母たちから高く評価される。しかし反面、暗愚な母親はその探春の立場を利用し優遇を期待する。曲がったことを嫌う探春は、この母親の存在に常に苦悩する。史湘雲は可愛らしく快活であり、文才のある女性である。しかし反面、実の父母に死なれ、普段はおじの家で辛い日々を送っている。妙玉は美しく教養豊かな超俗的な尼である。しかし反面、その排他的な性格が人に嫌われている。李紈は紡績などの女性のたしなみを身につけ、夫の死後も再婚せず立派に息子を養育しているという、「列女伝」等で典型的な寡婦である。しかし反面、亡き夫を偲ぶ寂しさの中にいる。賈迎春は美しく温厚な女性である。しかし反面、その温厚さにつけこんでくるしたたかな使用人らになめられ、彼女たちを全く管理できずにいる。賈惜春は美しく芸術の才能があり、潔癖な性格の女性である。しかし反面、出身が風紀の乱れた寧国府という場である為に、潔癖な性格の惜春は苦しんでいる。賈元春は貴妃という最高の身分に位置する女性である。しかし反面、宮中から出ることがままならず肉親にもめったに会うことができないという悲しみの中にいる。林黛玉と薛寶釵の二人にも美しい容貌と称賛に値する面が設定されている（本節ではこの二人に関する苦悩をまとめなかったが、その点については後述する）。またこれらの女性の他にも、「紅樓夢」中の重要な女性の多くに、称賛に値する形象と、その反面の苦悩が設定されている。例えば香菱という女性は、美しい容貌をもっているが、幼くして人さらいにさらわれ、薛蟠という軽薄な男の妾にされてしまう。そして薛蟠の正妻夏金柱に目の敵にされ、いやがらせをうける。また、賈宝玉のお気に入りの女、晴雯もやは

り美しい容貌と優れた裁縫の技術を持った女性であるが、その抜群の容貌のために宝玉の母親王夫人から男を惑わすいかがわしい女性と誤解され、賈家を追い出され、無念のうちに世を去る。これらもやはり、称賛に値する美貌、才能とその反面の苦悩という、本節でまとめた女性たちの人物設定のパターンに一致する。美しく称賛に値する側面を持ちながら、そういった女性が苦悩をかかえて生活するというのが、『紅樓夢』における女性像のパターンとなっているのだ。

第二章第一節において、「金陵十二釵（金陵の十二美人）」の書名は元来、才能ある美しい女性たちを描く事を主題としたミニ小説の書名だったのではないかと考えを提示した。本節で考察した十人の女性に見られた、美しい容貌と称賛に値する形象という設定は、元来のミニ小説「金陵十二釵」に基づくものなのではないかと筆者は考える。そしてその反面に設定されている彼女たちの苦悩は、各ミニ小説が集大成していく過程で新たに設定されたものと考えられる。元来のミニ小説「金陵十二釵」は、本節の各女性の「一」の部分でまとめた各女性たちの美貌と称賛に値する側面を描いたような、列女伝風の小説であったのであろう。こういった小説では、ただ女性の美貌と才能を描けばよいのであるから、彼女たちが生活の中に身をおいて描写される必要はない。しかし、各小説が集大成すると、ストーリーも複雑になり、その女性たちも実生活の中に身を置いて描かれる必要がでてくる。作者はこの時、彼女たちの形象に、才能ある女性が現実生活で生きていく苦悩を設定するようになったのではないか。本節の各女性の「二」の部分でまとめたような、各女性たちが現実社会に生きていく際の苦悩という設定は、作者の非常に高度な創作上の技術であると同時にリアリティーを伴っている。リアリティーは近代小説の特性である。「紅樓夢」はこの時、リアリティーという近代小説の要素を高めたのである。このリアリティーの追求こそが各ミニ小説を集大成していく際の作者の動機だったのではないかと思われる。

なお、林黛玉と薛宝釵の二人に関して、本節ではその苦悩をまとめなかったが、それは以下の理由による。黛玉は、二親に死なれ外祖母の家である賈家榮国邸に寄宿している。こういった孤独な環境を背景に、最愛の賈宝玉の心が肩用できず常に気をもんでいる。そして八十回内においては描かれていないが、彼女は結局宝玉と結ばれない。これが黛玉最大の苦悩である。また宝釵も、ひそかに宝玉に心をよせるが、宝玉の最愛の女性は始終黛玉のみであり、最後まで彼の愛情を得られない。これが宝釵最大の苦悩である。この黛玉、宝釵の苦悩はともに宝玉を間に挟んだ「恋愛譚」の主題と深く結びついている。今ここで二人の苦悩を詳細に考察することは、「恋愛譚」という主題の領域に入り込んでしまうことであり、それは「情僧録」の考察になってしまうと筆者は考える。恐らくこの二人の形象は、各小説が集大成する際、「情僧録」中の登場人物と結びついていったのであろう（「恋愛譚」の考察は第三章参照）。故に本節では、二人の称賛に値する形象をまとめるのみにとどめた



脂硯齋の批評に基づくと、香菱は「自是羲皇上人，便可作是書之朝代年紀矣。總寫香菱根基，原與正十二釵無異」⁴¹として位置付けられている。これは、香菱が『紅樓夢』における「金陵十二釵」の正冊と同様の重要性を持つキャラクターであることを明示しており、彼女を「その他」として扱うのは、作品の主題や登場人物に対する理解を偏らせるものである。脂硯齋がここで強調しているのは、香菱が単に物語の中で「悲劇的な運命」を背負うキャラクターにとどまらず、その根本的な意義において「正十二釵」と同等の位置付けを与えられている点である。

船越による「正十二釵」に関する議論は、正面と反面をもって人物の美貌と才能を評価し、香菱を「その他」と位置付けているが、それは脂硯齋批評についての理解が欠如しているからであると考えられる。端的に言えば、香菱を「その他」とすることは、その重要性を軽視することに他ならない。以下、筆者は船越の分析を再検討し、脂硯齋批語や原文に基づき、香菱を「金陵十二釵」の一員として再評価することで、彼女の物語全体における独自性と重要性を強調したい。

2. 王熙鳳に対する誤読

(1) テキスト分析

緻密に描かれた物語の中で、筆者は「金陵十二釵」やその他のキャラクターを単純に「称賛されるべき人物」として区別することは適切ではないと考える。紅樓夢に登場するすべての人物が、その時代背景の中で何らかの苦悩を抱えて生きており、曹雪芹はそのすべての側面を余すところなく描き出している。各キャラクターが持つ苦悩や葛藤は、それぞれが置かれた状況や選択の結果として生じているものであり、それこそが『紅樓夢』の人物描写を立体的かつ深遠なものにしている。船越が「金陵十二釵」を列女伝として捉える際、こうした多面的な作品解釈を欠いている点に、一定の限界があると考えざるを得ない。したがって、『紅樓夢』の真価を理解するためには、登場人物たちの行動や心理に対する多面的な分析が不可欠であり、王熙鳳の評価においても同様の視点が求められるのである。

王熙鳳が病に倒れ、家事来配が出来なくなった時には、主人公買宝玉の母王夫人が、

王夫人便覺失了膀臂。

王夫人は片腕を失ったように感じました。(第五十五回)

⁴⁰ 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、218-221 頁。

⁴¹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、10 頁。

と感じるほど、彼女の家事采配能力は頼りにされているのである⁴²。

「王夫人は片腕を失ったように感じました」⁴³という描写も、船越の指摘とは異なる解釈が可能である。表面的には、王熙鳳が家事を取り仕切ることにより、王夫人が彼女を頼りにしていたことが示されているように見える。しかし、この描写は王夫人自身の性格と本音を浮き彫りにしており、実際には彼女が自らの役割を果たすことを避け、王熙鳳に全ての責任を押し付けることで、自身の負担を軽減しようとしていたことを示している。この背景を考慮すると、王熙鳳が家事采配を一手に引き受けていたことは、必ずしも能力に基づくものでなく、むしろ周囲からの期待や責任を押し付けられていた結果である可能性が高い。

加えて、王夫人が「片腕を失ったように感じ」たと述べた際、彼女が実際に感じたのは、王熙鳳の健康状態が悪化することへの心配ではなく、自身の負担が増えることへの懸念であった。これは、王夫人が実際には家事管理を避けるために王熙鳳を利用していたことを示唆しており、王熙鳳の能力に対する評価ではない。

さらに、王熙鳳が過度な負担から健康を損ない、最終的に妊娠中に流産してしまった事実にも注目すべきである。

ところがなんと熙鳳は生まれつき気血が不足しているところへ、小さい時から養生に努めず、日ごろも負けず嫌いだったため、ますます気力を消耗してしまい、それゆえ流産とはいえ、すっかり弱り果て、一月後には不正出血の症状まで加わる始末です。本人は口に出そうとしますが、皆は彼女のげっそりやつれた顔を見て、体調が思わしくないことを悟ります。王夫人はちゃんと薬を飲んで養生するよう命じ、彼女に余計な心配をさせないようにします。彼女自身も大病を患って人から笑われるのが気がかりで、暇を見つけては養生に努めますが、あいにくすぐには元に戻りません。薬を服用し養生を続けて八、九か月も経ってから、ようやく少しずつ回復し、出血もだんだん止まるようになりますが、これは後の話です⁴⁴。

封建社会において、女性にとって最も重要とされたのは、男子を産むことで家族内の地位を固めることであった。この視点から見ると、家事采配能力は二次的なものであり、王熙鳳が家事を一手に引き受けた結果、健康を害し、最終的には流産に至るという事態は、彼女の行動が賢明であったとは言えない。このような結果を招いた彼女の行動は、過度な自己顕示欲によるものであり、その結果、彼女自身の人生に大きな影響を与えている。

以上の点を総合すると、王熙鳳の家事采配能力に関する船越の評価には再考の余地があ

⁴² 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、171頁。

⁴³ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、1283頁。

⁴⁴ 曹雪芹作、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第四冊』、loc. No. 6199/9655（東京：岩波書店、2013年、Kindle版）、（「ところがなんと... これは後の話です。」）

る。彼女の行動には自己顕示欲が強く反映されており、実際の手腕や結果を見る限り、その能力は過大評価されるべきではないと考える。曹雪芹が描こうとしたのは、単なる有能な家事采配者としての王熙鳳ではなく、その背後にある人間関係の複雑さと個人の葛藤であったことが、『紅樓夢』の描写からも理解できる。この点を踏まえ、王熙鳳の多面的な性格とそれによる苦悩をより深く理解することが求められる。

(2) 先行研究における王熙鳳への評価

a) 李朝陽

李朝陽の論文「小聰明無大智慧—王熙鳳管理才能駁論」⁴⁵においては、王熙鳳の管理能力に対する従来の肯定的評価に対し、厳しい批判が展開されている。

まず、王熙鳳が管理者として成功しているとされる点は、実際には短期間のものであり、表面的な成果に過ぎない。彼女の改革は主に下層の使用人に対する抑圧的な手法に依存しており、寧国府の根本的な問題、特に上層階級の奢侈や浪費を是正することができなかった。このような表面的な改革は、結局のところ寧国府の腐敗を深め、家族の崩壊を加速させた。

さらに、王熙鳳の管理方法には、彼女の個人的な性格の問題が大きく影響している。彼女は非常に厳格で、罰を与えることに重点を置き、下層の使用人に対する寛容さや報奨の精神を欠いていた。その結果、使用人たちは彼女に対して不満を抱き、最終的には家族全体が内部分裂を起こす原因となった。また、彼女の冷酷さと嫉妬心は、賈璉との関係においても明らかであり、これが家族内の人間関係を混乱させる一因となった。

李朝陽はまた、王熙鳳が賈府の財産を私利私欲のために濫用し、訴訟を抱え込むことで賄賂を得るなど、腐敗した行動を繰り返していたことを指摘する。これにより、彼女は賈府の内部分裂を引き起こし、結果として家族全体が没落する原因を作ったとされている。結論として、王熙鳳は賢明な管理者とは言えず、むしろ彼女の小聰明が大きな災いを招いたと考えられる。李朝陽は彼女を「凡鳥」と評し、彼女の行動が賈府の崩壊を招いた主要な要因であると厳しく批判している。彼の論文は、王熙鳳の管理能力に対する従来の肯定的評価に対して、一貫して否定的な視点を提供している。

b) 周啓志

周啓志の論文「奸雄乱世之術—王熙鳳管理術之批判」⁴⁶では、王熙鳳の管理術に対する厳しい批判が展開されている。この論文における王熙鳳の評価をまとめると以下のようになる。

王熙鳳は、『紅樓夢』において協理寧国府を任されたが、これは彼女の管理能力や徳が

⁴⁵ 李朝陽、「小聰明無大智慧—王熙鳳管理才能駁論」、『名作欣賞』2023年第11期、5-9頁。

⁴⁶ 周啓志、「奸雄乱世之術—王熙鳳管理術之批判」、『明清小説研究』1996年第3期、193-199頁。

認められた結果ではない。むしろ、彼女の辛辣な手腕や王家と賈家の特別な姻親関係、そして彼女の豊富な財力が主な要因であったとされる。つまり、彼女がこの地位に就いたのは、彼女の資質や能力ではなく、外的要因や背景が大きな役割を果たしたと指摘されている。

周啓志は、王熙鳳の管理術を封建家族奴隷制に基づくものであり、現代の管理モデルとは全く異なるものと位置づける。彼女の管理方法は、主に厳罰による統制に依存しており、報酬や激励といった要素が欠如しているため、持続可能な効果をもたらすものではない。彼女が寧国府で行った「改革」は、実際には一時的な成果に過ぎず、府内の根本的な問題を解決するものではなかったとされる。

さらに、王熙鳳の行動はしばしば個人的な利益追求に終始しており、彼女の管理術は賈府全体にとってむしろ有害であったと批判されている。例えば、彼女は公私混同し、家族の利益よりも自己の利益を優先する姿勢を露わにしていた。彼女が管理者としての地位を利用して行った賄賂や不正行為は、賈府の崩壊を早める結果となった。

総じて、周啓志は王熙鳳を「乱世の奸雄」と評し、彼女の管理術は封建時代の腐敗と密接に結びついたものであり、現代の管理者が学ぶべき手本とは程遠いと結論づけている。彼女の行動や管理術は短期的な利益を追求するものであり、長期的な視野や倫理観が欠如していたと評価されている。

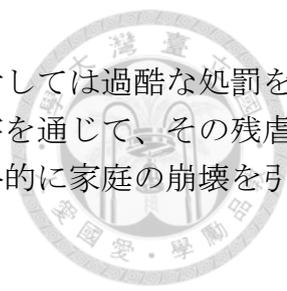
c) 顧紹炯

顧紹炯の論文「評固寵擅權、以權謀私的王熙鳳」⁴⁷において、王熙鳳は『紅樓夢』の典型的なキャラクターとして詳細に評価されている。顧は彼女を強く批判し、その性格や行動を詳細に分析している。以下はその評価をまとめたものである。

王熙鳳は、封建社会において権力と財産を追求する強烈な欲望を持つ人物として描かれている。彼女は王家の財力と賈政の正室である王夫人との特別な関係を利用し、賈府での権力を確立した。しかし、その過程で彼女は数々の罪を犯し、腐敗した行動をとった。特に、彼女は賈母の信頼と寵愛を得るために、巧妙に贈賄とお世辞を使い、賈母の心を完全に掌握した。

王熙鳳はまた、賈府の内部での権力を利用して私腹を肥やし、特に高利貸しや月例金の横領、さらには訴訟の包攬などの不正行為に手を染めていた。彼女はこれらの行為を通じて、短期間で巨額の財産を蓄積し、その結果、賈府の財政は破綻の道を進むことになった。

⁴⁷ 顧紹炯、「評固寵擅權、以權謀私的王熙鳳」、『貴州文史叢刊』1998年第6期、59-67頁。



さらに、王熙鳳の性格は暴力的で陰険であり、特に下層の者に対しては過酷な処罰を行い、彼女の権力を維持していた。また、彼女は尤二姐に対する迫害を通じて、その残虐さを露呈しており、彼女の行動は賈府内の人間関係を悪化させ、最終的に家庭の崩壊を引き起こした。

顧紹炯は、王熙鳳の管理術を「過時」であり「落後」と評し、彼女の浪費的な生活態度が賈府の経済的衰退を加速させたと結論づけている。彼女は賈府の財政状況を全く考慮せず、むしろ贅沢と浪費を続けた結果、賈府は完全に没落するに至った。顧は王熙鳳を「封建末世の罪悪の花」として、彼女の行動が賈府だけでなく、彼女自身の破滅をもたらしたと評価している。

3. 「悪女」説をめぐる検討

船越は王熙鳳について次のように述べる。

王熙鳳の形象に関しては、第二章第一節および第二節において、「風月宝鑑」に基づく悪女的形象と、その他の形象とに分かれることを指摘した。「金陵十二釵」に関する考察を目的とする本章においては、「風月宝鑑」に基づく悪女的形象、すなわち賈瑞や尤二姐を死に追い込むような強烈な形象は考察の対象とせず、それ以外の形象に注目する⁴⁸。

「風月宝鑑」に基づく悪女的形象を対象外とした際、王熙鳳の形象としてまず指摘しうるのは、大家族における有能な嫁という形象である。彼女には類い稀なる家事采配の能力が設定されている⁴⁹。（下線は引用者）

つまり、第十一回「慶壽辰寧府排家宴、見熙鳳賈瑞起淫心」と第十二回「王熙鳳毒設相思局、賈天祥正照風月鑒」の内容を王熙鳳が悪女である描写として論じられている。しかし、その評価は脂硯齋批評の欠如によるものではないだろうか。以下、まず第十一回「慶壽辰寧府排家宴、見熙鳳賈瑞起淫心」と第十二回「王熙鳳毒設相思局、賈天祥正照風月鑒」の内容を振り返って、そして脂硯齋の批評を順次見ていきたい。

『紅樓夢』は、その複雑なキャラクター描写と巧妙に編み込まれた人間関係を通じて、欲望とその帰結を描き出す物語である。第十一回「慶壽辰寧府排家宴 見熙鳳賈瑞起淫心」と第十二回「王熙鳳毒設相思局 賈天祥正照風月鑒」では、特に王熙鳳と賈瑞の関係が物語の中心に据えられており、これが両者の性格と物語のテーマを深く掘り下げる役割を果たしている。ここでは、上記の回における王熙鳳と賈瑞の関係を整理し、その背景にある

⁴⁸ 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、170頁。

⁴⁹ 同上。

物語の主題を明らかにする。

(1) 第十一回の概要

第十一回「慶壽辰寧府排家宴 見熙鳳賈瑞起淫心」は、賈敬の寿辰を祝う宴の描写から始まる。この宴は、寧国府の繁栄と豪華さを象徴する一方で、登場人物たちの人間関係を浮き彫りにする舞台ともなっている。賈珍は、この宴を取り仕切る責任を負い、息子の賈蓉に父賈敬への贈り物を届けさせる役割を担わせる。宴席には賈一門の多くの人物が集まり、特に邢夫人、王夫人、王熙鳳（鳳姐）、宝玉といった主要人物が登場する。

この宴の中で、最も重要な出来事は、賈瑞が王熙鳳に対して強い欲望を抱くに至る場面である。賈瑞は、偶然に王熙鳳と出会い、その美貌と機知に惹かれる。

賈瑞は、王熙鳳に対して「有縁」であると錯覚し、彼女に接近しようとする。彼は、彼女の笑顔や親しげな態度を好意と勘違いし、さらに彼女に対する欲望を募らせる。しかし、王熙鳳は賈瑞の意図を見抜き、表向きは穏やかな態度を保ちながらも、内心では彼の行動を警戒している。彼女は、自身の知恵と策略を駆使して、賈瑞をあしらいながらも、彼を罠にかけける準備を整えていく。

この回において、王熙鳳の巧みな振る舞いが際立つ。彼女は、賈瑞に対して直接的な拒絶や敵意を示すことなく、巧みに彼を誘導する。一方、賈瑞は彼女の本心に気付くことなく、ますます彼女に惹かれていく。この時点で、賈瑞は既に自らの破滅への道を歩み始めているが、彼自身はそのことに全く気付いていない。

第十一回は、賈瑞が王熙鳳に対して抱く欲望が物語の中心に据えられており、彼の愚かさや盲目的な情熱が強調されている。この回の結末に向けて、賈瑞の欲望がますます明確になり、それが彼の破滅を予感させる伏線として機能している。

(2) 第十二回の概要

第十二回「王熙鳳毒設相思局 賈天祥正照風月鑒」では、前回で描かれた賈瑞の欲望が、彼自身の破滅へと至る過程が詳細に描かれる。この回では、王熙鳳が賈瑞に対して巧みな罠を仕掛け、彼を徹底的に戒めようとする姿が浮き彫りにされる。

物語の冒頭、賈瑞は再び王熙鳳に会おうと試みるが、彼女は意図的に彼を避け続ける。しかし、賈瑞はそのような彼女の態度を意に介さず、むしろ彼女への執着を深めていく。彼は何度も榮府を訪れ、王熙鳳に接近しようとするが、その度に失敗する。この一連の出来事は、賈瑞がいかに愚かであり、自己の欲望に囚われているかを表す。

ある日、賈瑞はようやく王熙鳳と再会することに成功する。彼は、彼女に対して再び自らの思いを告白し、彼女に好意を示す。王熙鳳は、賈瑞の欲望を利用して、彼を罠にかけける計画を立てる。すなわち、夜遅くに彼女の家で会おうと約束し、彼に偽りの希望を持たせる。賈瑞はその言葉を信じ込み、指定された場所で彼女を待ち続けるが、彼の期待する展開は訪れない。

王熙鳳は、彼女を待っている賈瑞を放置し、彼を寒さと孤独に苦しめる計画を実行に移

す。賈瑞は一晩中寒さに耐えながら彼女を待ち続けるが、彼女が現れないばかりでなく、彼の愚かさや盲目的な欲望が浮き彫りにされる。この場面において、王熙鳳の策謀の巧妙さが一層明確に描かれ、賈瑞の悲惨な運命が徐々に明らかにされる。

さらに、物語は「風月宝鑑」という特別な鏡を通じて、賈瑞の精神的な破滅を描き出す。この鏡は、表と裏の両面に異なるものを映し出す特性を持ち、賈瑞の欲望を象徴する道具として登場する。賈瑞は、この鏡を手に入れ、そこに映る幻想に囚われる。鏡の正面には王熙鳳の美しい姿が映し出され、彼はその姿に見惚れる。しかし、鏡の裏には骸骨が映し出され、彼の破滅が暗示されている。

賈瑞は、鏡に映る王熙鳳の姿に執着し、何度もその姿を見続ける。彼は現実と幻想の境界を見失い、鏡の中の幻想に溺れていく。最終的には、彼の身体は消耗しきり、彼の命は尽きてしまう。賈瑞の破滅は、王熙鳳の策略によって促されたものであるが、それ以上に彼自身の欲望と愚かさの原因であることが明確に描かれている。

この回は、賈瑞の欲望が彼自身の破滅を招いたことを強調している。彼の愚行と欲望が、彼を破滅へと導いた原因であり、王熙鳳はその愚かさを巧みに利用したに過ぎない。物語全体を通じて、欲望が人間をどれほど愚かにし、破滅へと導くかが描かれ、この教訓的なメッセージが強調されている。

第十一回と第十二回を通じて描かれる王熙鳳と賈瑞の関係は、欲望とその帰結というテーマを中心に展開されている。賈瑞は、王熙鳳に対する欲望に囚われ、その結果、自らの命を失うに至る。王熙鳳は、賈瑞の愚かさを見抜き、彼を戒めるために巧妙な策を講じるが、最終的に賈瑞の破滅は彼自身の行動によるものである。この物語は、欲望がいかにして人を破滅に導くかという教訓を示しており、登場人物たちの行動を通じて、読者に対して深い洞察を提供するものである。

物語の進行において、王熙鳳と賈瑞の関係が果たす役割は、単なる個人的な衝突を超え、物語全体のテーマに深く関わるものである。王熙鳳の策謀と賈瑞の欲望は、物語の中で繰り広げられる多くの人間ドラマの中でも、特に際立った例であり、これによって『紅樓夢』の持つ深い教訓が一層強調されている。

(3) 脂硯齋「庚辰」批語の総括分析

【庚辰眉批：勿作正面看為幸】⁵⁰

王熙鳳が賈瑞に対して「象你這樣的人能有幾個呢」と述べる場面において、脂硯齋は「勿作正面看為幸」と批評している。この一見賞賛ともとれる批語であるが、実際は皮肉や策略に満ちており、字面通りに解釈すべきではないことを示唆している。読者がこのような言葉の背後に潜む意図を鋭敏に読み取る必要があることを強調している。

【庚辰眉批：可為偷情一戒】⁵¹

⁵⁰ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、256 頁。

⁵¹ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、257 頁。

賈瑞が極寒の中で一夜を過ごし、凍死寸前の状態に陥る場面において、脂硯齋は「可為偷情一戒」と批評している。この批語は、賈瑞の愚かな行動が彼に多大な苦痛をもたらすことを強調し、その行動がいかにも不毛であることを示している。読者に対し、不倫や情欲に溺れることの危険性と、それが引き起こす苦痛についての警告を発している。

【庚辰雙行夾批：禍福無門，唯人自招】⁵²

賈瑞が自身の欲望と愚行により、自ら破滅を招く場面において、脂硯齋は「禍福無門，唯人自招」と批評している。この批語は、幸運も不運も自己の行動の結果であることを強調し、賈瑞が自らの行動によって破滅を招いたことを指摘している。因果応報の原理がここで強調されており、読者が自身の行動に対する責任を認識するよう促されている。

【庚辰側批：四字是尋死之根】⁵³

賈瑞が一度の屈辱と苦しみを味わったにもかかわらず、王熙鳳への執着を断ち切ることができずに再び彼女に会おうとする場面において、脂硯齋は「四字是尋死之根」と批評している。この批語は、賈瑞が自ら破滅を招く根本的な原因を見出し、それに固執し続けていることを示唆している。彼の執着が最終的に彼を死に至らしめる要因となることを強調している。

【庚辰側批：可謂因人而使】⁵⁴

王熙鳳が賈瑞を再び罠に誘い込む場面において、脂硯齋は「可謂因人而使」と評している。この批語は、王熙鳳が賈瑞の性格や行動を巧みに利用し、彼を罠にかける手腕を称賛している。賈瑞の弱さと愚かさが、彼の破滅を加速させるために利用されていることを示唆している。

【庚辰側批：四字是作者明阿鳳身份，勿得輕輕看過】⁵⁵

王熙鳳が賈瑞を罠にかける際、自身の地位と権力を巧妙に利用する場面において、脂硯齋は「四字是作者明阿鳳身份，勿得輕輕看過」と批評している。この批語は、王熙鳳の権力と策略が物語の進行において非常に重要な役割を果たしていることを示しており、読者が彼女の行動や立場を軽視せずに深く洞察する必要があることを強調している。

【庚辰雙行夾批：伏得妙！】⁵⁶

王熙鳳が賈瑞を再び罠に誘い込むために新たな計画を立てる場面において、脂硯齋は「伏得妙！」と批評している。この批語は、王熙鳳の策略が巧妙であり、物語の展開にお

⁵² 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、258 頁。

⁵³ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、258 頁。

⁵⁴ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、259 頁。

⁵⁵ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、259 頁。

⁵⁶ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、259 頁。

いて見事に伏線が張られていることを称賛している。特に、王熙鳳が賈瑞の性格や行動を予測し、それを巧みに利用している点が高く評価されている。

【庚辰側批：緊一句】⁵⁷

賈瑞が王熙鳳の罠に引き込まれる際、その瞬間に脂硯齋は「緊一句」と批評している。この批語は、物語の緊張感が一段と高まる場面において、王熙鳳の言葉や行動が賈瑞を巧みに追い込んでいく様子を的確に捉えている。脂硯齋は、王熙鳳の巧妙な言葉遣いが、賈瑞を罠にかけるための一瞬を鋭く捉えたことを評価している。

【庚辰雙行夾批：不差】⁵⁸

賈瑞が王熙鳳の誘いに深く引き込まれていく場面で、脂硯齋は「不差」と批評している。この批語は、賈瑞の愚行が計画通りに進んでいくことを的確に指摘している。王熙鳳の策略が賈瑞を確実に罠へと導いていく過程が、まさに予想通りに展開していることを強調している。

【庚辰側批：好題目】⁵⁹

賈蕃が賈瑞に対して、王熙鳳が故無く調戲されたと告げる場面において、脂硯齋は「好題目」と批評している。この批語は、この出来事が物語全体において重要なテーマであることを示唆している。王熙鳳の策略と賈瑞の愚かさが絡み合うことで、物語がさらに複雑で興味深いものとなっていることを強調している。

【庚辰眉批：調戲還要有故？一笑！】⁶⁰

同じ場面において、脂硯齋は「調戲還要有故？一笑！」という皮肉交じりの批評をしている。この批語は、賈瑞が無分別に行動し、その結果が彼の破滅を招いたことを皮肉っている。賈瑞の愚かさが彼自身を破滅に導いたことが、いかに自明であるかを示している。

【庚辰側批：好大題目】⁶¹

さらにそれに続く場面で、脂硯齋は「好大題目」と評している。この批語は、この出来事が物語全体において重要な意義を持つものであり、賈瑞の行動が物語の進行において大きな転換点となっていることを示唆している。王熙鳳の策略が物語に新たな緊張をもたらし、物語全体のテーマを深化させる役割を果たしていることが強調されている。

【庚辰側批：也知寫不得。一嘆！】⁶²

⁵⁷ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、259 頁。

⁵⁸ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、259 頁。

⁵⁹ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、260 頁。

⁶⁰ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、260 頁。

⁶¹ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、260 頁。

⁶² 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、260 頁。

賈瑞が賭博で借金の証文を書かされる場面において、脂硯齋は「也知寫不得。一嘆！」と評している。この批語は、賈瑞が証文を書くことが彼にとって不本意であることを理解しつつも、彼がその状況から逃れられない無力さを嘆いていることを示している。賈瑞は、自身の行動がもたらす結果を知りつつも、避けることができない運命に直面している状況が浮き彫りにされている。

【庚辰側批：余料必有新奇解恨文字收場，方是《石頭記》筆力】⁶³

賈瑞が糞尿を浴びせられるという屈辱的な状況に陥る場面において、脂硯齋は「余料必有新奇解恨文字收場，方是《石頭記》筆力」と評している。この批語は、物語が予想外の形で展開し、賈瑞の屈辱が物語全体のテーマや登場人物の行動原理と深く結びついた形で解消されることを期待している。また、こうした意外性と緻密な構成が『石頭記』の特徴的な筆致であることを強調している。

【庚辰側批：欲根未斷】⁶⁴

賈瑞が糞尿を浴びせられた屈辱にもかかわらず、王熙鳳への執着を捨てきれず、なおも彼女に会おうとする場面において、脂硯齋は「欲根未斷」と評している。この批語は、賈瑞が一度は痛い目に遭いながらも、まだ完全に欲望を断ち切ることができていないことを指摘している。彼の執着と欲望が、最終的には破滅に導く要因であることを示唆している。

【庚辰眉批：此刻還不回頭，真自尋死路矣】⁶⁵

賈瑞が一度の屈辱と苦しみを味わったにもかかわらず、依然として王熙鳳への執着を捨てられず、再び彼女に会おうとする場面において、脂硯齋は「此刻還不回頭，真自尋死路矣」と批評している。この批語は、賈瑞が明らかに破滅へと向かう道を選び続けていることを嘆いている。彼が引き返すことなく破滅の道を突き進む様子が愚行として描かれている。

【庚辰雙行夾批：然便有二兩獨參湯，賈瑞固亦不能微好，又豈能望好，但鳳姐之毒何如是？終是瑞之自失也】⁶⁶

賈瑞が重病に倒れ、独参湯が処方されるも、その効果が期待できない状況において、脂硯齋は「然便有二兩獨參湯，賈瑞固亦不能微好，又豈能望好，但鳳姐之毒何如是？終是瑞之自失也」と批評している。この批語は、賈瑞の病状が既に回復の見込みがないことを示唆しており、たとえ独参湯が手に入ったとしても、彼が回復することはないだろうとされている。同時に、王熙鳳の策略が彼を破滅に導いたものの、最終的な原因は賈瑞自身の愚

⁶³ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、262 頁。

⁶⁴ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、262 頁。

⁶⁵ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、262 頁。

⁶⁶ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、262 頁。

かさにあることを強調している。

【庚辰雙行夾批：凡看書人從此細心體貼，方許你看，否則此書哭矣】⁶⁷

賈瑞が「風月宝鑑」を手に取り、その表裏を覗き込む場面において、脂硯齋は「凡看書人從此細心體貼，方許你看，否則此書哭矣」と批評している。この批語は、読者に対して『紅樓夢』という作品を深く理解し、注意深く読むことの重要性を強調している。物語を表面的に楽しむだけでなく、その背後に隠された深い意図や象徴を理解することが求められていることが示唆されている。

【庚辰雙行夾批：此書表裡皆有喻也】⁶⁸

賈瑞が「風月宝鑑」を手にし、その表裏を覗き込む場面において、脂硯齋は「此書表裡皆有喻也」と批評している。この批語は、「風月宝鑑」という鏡が物語の象徴であり、鏡の表裏が異なる意味を持つように、『紅樓夢』の物語も表面的なストーリーと深層に隠されたメッセージの両方を持っていることを示している。物語の裏に潜む象徴や教訓を理解することが重要であることが強調されている。

【庚辰雙行夾批：言此書原系空虛幻設】⁶⁹

賈瑞が「風月宝鑑」の由来について説明を受ける場面において、脂硯齋は「言此書原系空虛幻設」と批評している。この批語は、『紅樓夢』という物語全体が虚構の世界に基づいて構築されていることを示している。物語は現実世界の出来事を直接描写したものではなく、幻想的な設定や象徴的な出来事を通じて、現実の人間性や社会の真理を探求する意図があることを強調している。

【庚辰側批：誰人識得此句！】⁷⁰

賈瑞が「風月宝鑑」の使用方法について、「千萬不可照正面，只照他的背面，要緊，要緊！」と道士から警告される場面において、脂硯齋は「誰人識得此句！」と批評している。この批語は、この警告が非常に重要な意味を持つものであることを示唆しているが、その深い意味を理解するのは容易ではないことを指摘している。読者にとって、この警告の真意を理解することが物語の理解において重要であることを強調している。

【庚辰雙行夾批：觀者記之，不要看這書正面，方是會看】⁷¹

同じ場面において、脂硯齋は「觀者記之，不要看這書正面，方是會看」と続けて批評している。この批語は、物語を表面的に捉えるのではなく、その裏側に隠された真意を理解

⁶⁷ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、264 頁。

⁶⁸ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、264 頁。

⁶⁹ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、264 頁。

⁷⁰ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、264 頁。

⁷¹ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、264 頁。

することの重要性を示している。『紅樓夢』という作品の本質を理解するためには、物語の表層にとどまらず、その背後にある深層の意味を探ることが求められていることが示唆されている。

【庚辰雙行夾批：所謂「好知青冢骷髏骨，就是紅樓掩面人」是也。作者好苦心思】⁷²

賈瑞が「風月宝鑑」を手にし、その裏側に映し出された骷髏（骸骨）を見た場面において、脂硯齋は「所謂「好知青冢骷髏骨，就是紅樓掩面人」是也。作者好苦心思」と批評している。この批語は、表面的に美しく見えるものが実際には死や腐敗を象徴することを示しており、賈瑞の運命が最終的に死に至るものであることを象徴的に示している。また、作者が物語に込めた深い象徴性を評価している。

【庚辰雙行夾批：所謂醉生夢死也】⁷³

賈瑞が「風月宝鑑」の正面を覗き込み、そこに王熙鳳の姿が映し出されると、彼がその幻想の中で彼女と交わる場面において、脂硯齋は「所謂醉生夢死也」と評している。この批語は、賈瑞が幻想と欲望に溺れ、現実を見失っている状態を「醉生夢死」として描写しており、彼の破滅が不可避であることを示唆している。

【庚辰雙行夾批：此書不免腐儒一謗】⁷⁴

賈瑞が「風月宝鑑」によって破滅し、代儒が鏡を焼却しようとする場面において、脂硯齋は「此書不免腐儒一謗」と評している。この批語は、『紅樓夢』が持つ斬新な内容が保守的な学者たち（腐儒）から批判を受ける可能性があることを示しており、物語の革新性とそれに対する社会の反応を示唆している。

【庚辰雙行夾批：觀者記之】⁷⁵

賈瑞が「風月宝鑑」によって破滅する場面において、脂硯齋は「觀者記之」と評している。この批語は、この場面が物語全体の中で重要な教訓や象徴を含んでいることを示唆し、読者がこの教訓を深く記憶に留めるべきであることを促している。

以上、脂硯齋批語を検討してきたが、そこから王熙鳳に対する評価が単純に「悪女」として固定されるべきではないことが明らかとなる。特に、「風月宝鑑」に描かれたエピソードにおいては、賈瑞の愚行とその結果としての自業自得が中心に描かれており、主題として「戒淫」が強調されているものの、王熙鳳を「悪女」と断定するには慎重さが求められる。

⁷² 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、265 頁。

⁷³ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、265 頁。

⁷⁴ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、266 頁。

⁷⁵ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、266 頁。

脂硯齋は、「風月宝鑑」のエピソードを通じて、賈瑞の執着と愚行がどのようにして彼自身を破滅に導くかを描き出しており、王熙鳳の行動も単なる悪意に基づくものではなく、教訓や警告の意図が込められていることを示唆している。これにより、王熙鳳が他のエピソードにおいて描かれる人物像とも一致していることから、「風月宝鑑」と「金陵十二釵」が異なるミニ小説であり、各キャラクターの性格が分断されているとする解釈は成立しない。

脂硯齋の批語は、『紅樓夢』がまとまりをもった作品であり、各エピソードが一貫したテーマと筆力を持って描かれていることを強調している。これらの批語から読み取れるのは、物語全体における王熙鳳の評価が、単に「悪女」という単一のレッテルを貼る以上に複雑であり、彼女の行動や性格は、物語の全体的な文脈において理解されるべきであるということである。したがって、王熙鳳を「悪女」として解釈することや、作品内部における矛盾を見出すことは、脂硯齋の批評意図や『紅樓夢』の統一された文学構造を見誤ることに繋がると言えよう。

4. 風月寶鑒について

風月寶鑒はその名の通り、人の内面を映し出す鏡である。この作品の題名候補の一つであるからこそ、この本もまた風月寶鑒同様、本を読む人の本質を写す。

そばで賈瑞に付き添っていた人々は、彼がまず鏡を手を持って映し、落っこした後、なおも目を開けて拾い上げ、とうとう最後には鏡を落として動かなくなる様子を目にします。近寄って見ると、すでに事切れており、体の下には大きな精のかたまりがひんやりぐっしょり染みとなって広がっています。そこで慌てて死装束を着せ（遺体安置用の）ベッドを運んで来ます。代儒夫婦は大声を上げて泣きじゃくり、道士を大いに罵って言いました。「なんたる妖鏡じゃ！【庚辰雙行夾批：此書不免腐儒一謗。】 さっさとぶちこわさねば、【庚辰雙行夾批：凡野史俱可毀，獨此書不可毀。】 世に害をなすことおびたしいぞ」。

「誰が正面を見ろと言いました！あなたたちが勝手に仮を真と思い込んだだけのこと。どうしてわざわざわたしを焼こうとするのです？」【庚辰雙行夾批：觀者記之。】 泣いているところへ、例の足の利かない道士が表から駆け込んで来て怒鳴りました。

「風月宝鑑をこわそうとしているのは誰だ？わしが助けに来たぞ！」そう言うと、まっすぐ中堂まで入って来て鏡をその手に奪い取るや、飄然と立ち去ります⁷⁶。

作者および脂硯齋は、作中および批評の中で様々な内容を詳細に記述し、解説を行って

⁷⁶ テキストは曹雪芹作、井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、221 頁に、批語は『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、266 頁にそれぞれ拠った。

いる。その上で、これらの内容を読まず、あるいは悪意を持って曲解する者がいるとすれば、その行為はその人自身の悪意を露呈させるに過ぎないと言える。その場合、焼き捨てるべきは、その人が書いた書物であり、鏡である風月鑑ではないであろう。



5. ミニ小説であることへの反論

まず、以下の引用文を見ておこう。

大家族における嫁姑問題に悩む一人の嫁の弱々しい姿が描かれている。先の強烈な悪女の変容した姿と考えるには無理がありはしないか。(中略)もし「紅樓夢」の雛型の旧稿「風月宝鑑」の名残がそれらの一節に残っているのならば、当然そこにあられる人物の性格が前後と統一が計られてしかるべきである。しかし、「紅樓夢」の成立過程とは全く別個の「風月宝鑑」の物語が「紅樓夢」の成立過程にある書(以下便宜上この書を「(原)紅樓夢」と称する)の中に部分的に挿入されたのだと考えれば、無理なくこの矛盾が理解できる⁷⁷。

船越は、『紅樓夢』の人物性格の矛盾を論じ、その矛盾は異なる作品が合併された結果であるとする説を提唱している。特に、王熙鳳の性格については、彼女が尤二姐を死に追い込む際に見せた冷酷な「悪女」としての側面と、第七十一回において姑からの辱めを受け、涙を流す弱々しい嫁としての側面が対照的に描かれている点に注目している。船越は、この性格の分裂を一貫した人物像として解釈することに困難があると指摘する。

船越はこの矛盾を、「風月宝鑑」という独立した作品が『紅樓夢』に部分的に挿入された結果として説明している。彼は、秦可卿と秦鐘姉弟の一節や、尤二姐・尤三姐姉妹の一節が本来「風月宝鑑」の一部であり、『紅樓夢』の成立過程とは異なる作品であったとする見解を提示する。すなわち、賈宝玉や王熙鳳の性格の矛盾は、「風月宝鑑」内で描かれた彼らの形象と、『紅樓夢』全体における形象が異なるために生じたものであると主張するのである。

また、船越は『紅樓夢』の成立過程において、「風月宝鑑」が『紅樓夢』の一部として挿入されたと考えることによって、登場人物の年齢の矛盾や因縁譚、文章の風格の違いといった問題についても説明できると述べている。このように、『紅樓夢』の中で見られる様々な矛盾は、異なる作者による別個の作品が合併された結果である、とする説を船越は支持している。

以上のように、船越は、『紅樓夢』における人物性格の矛盾や文体の違いが、「風月宝鑑」という別の作品が『紅樓夢』に取り込まれたことによるものであり、これによって物語内の一貫性が失われたと結論づけている。

船越は『紅樓夢』を複数のミニ小説から成る作品として位置づけ、第十一回および第十

⁷⁷ 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、50-51頁。

二回を「風月宝鑑」に属する独立したミニ小説と捉えている。しかし、この解釈に対して疑義がある。というのも、船越がその論拠とする下記の脂硯齋の凡例を再検討することで、実際には『紅樓夢』全体が一貫したテーマと筆力をもって描かれていることが明らかになるからである。

《紅樓夢》旨意 一一是書題名極多，一曰《紅樓夢》，是總其全部之名也。又曰《風月寶鑒》，是戒妄動風月之情。又曰《石頭記》，是自譬石頭所記之事也。此三名則書中曾已點睛矣。如寶玉做夢，夢中有曲，名曰《紅樓夢》十二支，此則《紅樓夢》之點睛。又如賈瑞病，跛道人持一鏡來，上面即鑿風月寶鑒四字，此則《風月寶鑒》之點睛。又如道人親見石上大書一篇故事，則系石頭所記之往來，此則《石頭記》之點睛處。然此書又名曰《金陵十二釵》，審其名，則必系金陵十二女子也。然通部細搜檢去，上中下女子豈止十二人哉？若云其中自有十二個，則又未嘗指明白系某某，極至「紅樓夢」一回中，亦曾翻出金陵十二釵之簿籍，又有十二支曲可考⁷⁸。（下線は筆者によるもの）

凡例は、『紅樓夢』という作品が多層的な構造を持ち、それぞれの題名が物語の異なる側面を象徴していることを示している。まず、脂硯齋は『紅樓夢』という題名が作品全体を総括する名称であり、このタイトルが物語全体の中核を成していることを強調する。『紅樓夢』という名称は、単なるタイトルにとどまらず、作中の象徴的な場面、すなわち「点睛」としての役割を果たしている。

次に、『風月宝鑑』についての言及がある。これは、賈瑞のエピソードに関連する重要なテーマとして位置づけられており、「戒妄動風月之情」（風月の情を妄りに動かすことを戒める）を象徴するものとして、『紅樓夢』の中で特定の場面において示されている。賈瑞が病に伏した際、跛足の道士が持参した鏡に「風月宝鑑」と刻まれていたことが、このタイトルの「点睛」を成しているのである。

さらに、『石頭記』という題名も挙げられている。これは、物語の起源や根本に関わるテーマを象徴しており、道人が石に刻まれた物語を目にする場面が『石頭記』の「点睛」として示されている。この場面は、物語全体の始まりや構造を暗示していると解釈される。

このように、脂硯齋が指摘するこれらの題名は、複数の独立した小説が合併されたものではなく、すべて『紅樓夢』という一つの作品において、それぞれが特定の意味を象徴するものとして存在している。ここで述べられている各題名は、物語の異なるテーマや側面を反映しているが、それらは同一の作品内での表現であり、分割されるべきではない。

最後に、脂硯齋は『金陵十二釵』という名称についても言及している。この名称は「上中下女子豈止十二人哉？」という問題を孕んでいることを指摘し、「金陵十二釵」が指す対象は正冊の十二人に限らず、物語全体に登場する多くの女性キャラクターを含んでいる

⁷⁸ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、2-3 頁。

ことを示している。つまり、この指摘は「金陵十二釵」を独立したミニ小説とする船越の主張を否定するものであり、『紅樓夢』全体が統一された一つの作品であることを証明することになる。

総じて、『紅樓夢』はいかに多層的かつ象徴的な構造を持っており、それぞれのタイトルは物語の異なる側面を示しているか、ということが明らかとなる。また、これらの題名は一貫したテーマと筆力をもって描かれており、複数の独立した作品が合併されたものではなく、単一の作品内での象徴的な表現として理解されるべきものである。

そのように言われて、空空道人はしばらく考え込み、もう一度じっくり『石頭記』【甲戌側批：本名。】を読み返します【甲戌側批：這空空道人也太小心了，想亦世之一腐儒耳。】なるほどその中では、よこしまな者を非難し悪辣な者に筆誅を加えてはいるものの、【甲戌側批：亦斷不可少。】世の中をけなし罵る意図などありませんし、【甲戌側批：要緊句。】君は仁、臣は良、父は慈、子は孝といった、およそ人倫道德に関係する所では、すべて功績や徳行を褒め讃えること限りなく、まことに他の書物など比べものにならないほどです。その主旨は情を語ることですが、それとて実際にあった事柄を書き留めたまでのことで、ありもしないことをでっち上げ、【甲戌側批：要緊句。】逢引ごっこ一本槍で押し通すものとは比較になりません。世の中の有様に少しも口出ししていないことから、【甲戌側批：要緊句。】一部始終を写し取って帰り、傑作として世に広めます。これより空空道人は空によって色を見、色から情を生じ、情を伝えて色に入り、色から空を悟ることとなり、そこで名を情僧と変え、『石頭記』を改めて『情僧録』と名づけました。東魯の孔梅溪は『風月宝鑑』という題をつけました。【甲戌眉批：雪芹舊有《風月寶鑒》之書，乃其弟棠村序也。今棠村已逝，余睹新懷舊，故仍因之。】のちに曹雪芹が悼紅軒にて読むこと十年、手を加えること五たび、目録を編纂し、各回ごとに区分して、『金陵十二釵』と命名したのです。【甲戌眉批：若云雪芹披閱增刪，然後開卷至此，這一篇楔子又係誰撰？足見作者之筆狡猾之甚。後文如此処者不少。這正是作者用畫家烟雲模糊處，觀者萬不可被作者瞞蔽了去，方是巨眼。】あわせて絶句を一首詠みました。

満紙荒唐言	満紙荒唐の言
一把辛酸淚	一把辛酸の涙
都云作者痴	都な云う作者は痴なりと
誰解其中味	誰か其の中の味を解さん

書かれたことはすべてでたらめ

絞る涙はどこまで苦い

みな言う作者は痴れ者と

読み解く人も無いままに【甲戌雙行夾批：此是第一首標題詩。甲戌眉批：能解者方

有辛酸之泪，哭成此書。壬午除夕，書未成，芹爲泪盡而逝。余常哭芹，泪亦待盡。每思覓青埂峰再問石兄，奈不遇癡頭和尚何！悵悵！今而後惟願造化主再出一芹一脂，是書何幸，余二人亦大快遂心於九泉矣。甲午八日泪筆。】⁷⁹

至脂硯齋甲戌抄閱再評，仍用《石頭記》。出則既明，且看石上是何故事。按那石上書云：【甲戌側批：以下系石上所記之文。】⁸⁰

この段落は、『紅樓夢』の成書過程を描写している部分であり、その内容は極めて重要である。まず、「空空道人」という人物が登場し、彼が『石頭記』という書物入手し、その内容を慎重に再検討したことが記述されている。この書物には、奸佞を非難し悪を罰する言葉が含まれているが、それは決して時世を批判するものではなく、むしろ「君仁臣良、父慈子孝」といった倫理的価値観を称賛するものであった。この点で、他の書物とは異なる高い評価を受けることとなった。

空空道人は、書物が時事問題に関与していないことを確認し、その上で書物全体を抄録して世に伝えることを決意する。この過程で、彼は「因空見色、由色生情、伝情入色、自色悟空」という過程を経て、書物の名前を「情僧録」に改名した。その後、この書物に対して呉玉峰は「紅樓夢」という題名を付け、東魯の孔梅溪は「風月宝鑒」という題名を与えた。

また、曹雪芹はこの書物を十年間にわたって読み込み、五回にわたる増訂を行い、章回を整理し『金陵十二釵』と題した。この過程で、彼の手によって物語の構成が整えられたことが示されている。

最後に、書物には「滿紙荒唐言、一把辛酸泪！都云作者痴、誰解其中味？」という詩が添えられ、これは物語の主題詩として位置づけられている。この詩は、一見する荒唐無稽な物語に見えるが、その中には深い意味が込められており、それを理解する者だけがその辛酸を感じ取ることができると述べている。

この段落全体を通して、『紅樓夢』がどのようにして成立し、その過程でどのような改名が行われたかが詳細に記述されている。この成書過程は、物語の全体像を理解する上で極めて重要な要素である。

最終部分に記述されている「至脂硯齋甲戌抄閱再評，仍用《石頭記》」は、極めて重要な内容を含んでいる。ここでは、複数の人物が書物に異なる題名を付けた後、最終的に脂硯齋が甲戌年において再び書物を抄閱し、その上で再評価を行った結果として、『石頭記』という題名が再び用いられることに決まったことが記されている。この記述は、脂硯齋が最終的な決定権を持つ人物であり、その決定が作品の本文内に正当性をもって記されてい

⁷⁹ テキストは曹雪芹作、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、7-8 頁に、批語は『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9-10 頁にそれぞれ拠った。

⁸⁰ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9-10 頁。この段落は甲戌本にあり、庚辰本を参照する『新訳紅樓夢』では訳されていない。

ることを示している。

この決定により、作品における題名の議論が収束し、『石頭記』という題名が最終的な形で選ばれたことが明確に示されている。この過程において、脂硯齋による評価と選択が重視され、その結果が作品全体の本質や意図を最も的確に反映していると思なされる。このようにして、最終的な題名の選定に至った経緯が、本作品の成立過程における重要な要素として位置づけられているのである。

ここでは、脂硯齋による批評を詳しく見よう。

【甲戌側批：本名。】⁸¹

この文は、脂硯齋による『石頭記』に関する批評の一部であり、特にこの書物の題名が「本名」であることを強調する意図を持つ。この「本名」という表現は、複数の題名が検討される中で、最終的に『石頭記』が最も適切であると脂硯齋が判断したことを示している。「本名」の概念は、単なる題名にとどまらず、作品全体の核心を象徴する重要な名称であると解釈されるべきである。脂硯齋は、他の題名に比べて『石頭記』が作品の本質を最も的確に反映していると考え、この題名が持つ意義を特に重視している。この批語を通じて、『石頭記』という名称が作品の本来の姿を最も正確に反映し、その意図やテーマを明瞭に伝えるために選ばれた「本名」であることが確認される。このように、「本名。」は、作品の題名に対する脂硯齋の評価を明確に伝えるものである。

【甲戌側批：這空空道人也太小心了，想亦世之一腐儒耳。】⁸²

この文は、脂硯齋が空空道人という人物に対して下した批評であり、彼の過度に慎重な態度が作品の深い理解を妨げているとの指摘がなされている。「腐儒」という語は、儒教的教養を有する一方で、時代に適応できない頑迷な学者を指す蔑称である。この批語は、空空道人が作品の内容をあまりにも表面的に捉え、慎重すぎる態度がかえって作品の真意を見失わせていることを暗示している。脂硯齋は、このような保守的な知識人が現実世界にも存在し、彼らの姿勢に対して批判的な視線を持っていることが明らかにされている。この批語を通じて、脂硯齋は作品の理解において表面的な慎重さではなく、より深い洞察力を求めていることが分かる。

【甲戌側批：亦斷不可少。】⁸³

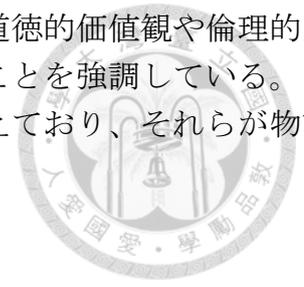
この文は、脂硯齋が『石頭記』において、特定の要素が欠かせないものであることを強調している。この批語が付された部分には、特に奸佞を非難し、悪を罰する表現があり、これが作品にとって不可欠であると評価されている。「斷不可少」という表現は、その要素が絶対に欠かせないものであり、作品の本質や意図を伝えるために必要不可欠であるこ

⁸¹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

⁸² 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

⁸³ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

とを意味する。脂硯齋は、この批語を通じて、作品中で描かれる道徳的価値観や倫理的主張が物語の構成上、またその意図を伝える上で非常に重要であることを強調している。この批語は、作品における特定の内容や要素に対して高い評価を与えており、それらが物語全体の中で不可欠な役割を果たしていることを示している。



【甲戌側批：要緊句。】⁸⁴（「亦非傷時罵世之旨。」に対して）

この文は、前文にある「亦非傷時罵世之旨。」という部分に対する注釈として付されており、この一文が作品全体の意図を理解する上で非常に重要であることを強調している。すなわちこれは、「また時世を批判したり罵倒したりする趣旨ではない」という意味を持っており、『石頭記』が時世に対する批判を目的としているのではなく、より深いテーマや目的を有することを示唆している。脂硯齋は、この作品が単なる時事風刺や世俗批判を超えたものであることを読者に理解させようとしており、この一文を特に重要視している。この批語は、作品の本質を捉えるために必要な理解を導くものであり、脂硯齋が作品の意図をどのように評価していたかを如実に示している。

【甲戌側批：要緊句。】⁸⁵（「又非假擬妄稱。」に対して）

この文は、「又非假擬妄稱。」という部分に対する注釈として付されており、作品の核心に触れる重要な内容であることを強調している。「又非假擬妄稱。」は、「また、これは虚偽の作り話や妄言ではない」という意味であるが、物語が虚構や空想に基づくものではなく、現実に根ざした真実性を持っていることを明示している。脂硯齋は、この表現に「要緊句」という批語を付すことで、作品の誠実さや真実性を読者に強く意識させ、この部分を特に重要視していることがわかる。この批語は、脂硯齋が作品の内容に対して深い信頼を寄せており、それを読者にも理解させようとしている意図を明確に示している。物語全体の信頼性とその背後にある意図を強調することにより、この批語は作品の意図を深く理解するための重要な手がかりとなっている。

【甲戌側批：要緊句。】⁸⁶（「因毫不干涉時世。」に対して）

この文は、「因毫不干涉時世。」という部分に対する注釈として付されており、作品の理解において極めて重要であることを強調している。「因毫不干涉時世。」は、「全く時世に干渉しないため」という意味であるが、『石頭記』が時世に対する直接的な関与や批判を避け、その独自の世界観や物語を展開することに焦点を当てていると考えられる。脂硯齋は、この作品が時事的な問題から距離を置き、普遍的なテーマを描いている点に価値を見出し、この要素を特に重要視している。この批語は、作品が現実の社会や時代背景に縛られることなく、独自の意図やテーマを追求していることを読者に理解させるために、脂硯

⁸⁴ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

⁸⁵ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

⁸⁶ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

齋が特に注目している部分であることを示している。

【甲戌眉批：雪芹舊有《風月寶鑒》之書，乃其弟棠村序也。今棠村已逝，余睹新懷舊，故仍因之。】⁸⁷

この文は、作品の題名に関する歴史的背景を提供しており、『風月宝鑒』と題された本作品はかつて曹雪芹が所有していることを明らかにしている。また、この題名は曹雪芹の弟である棠村が序文を書いた時期に使用されていたことも説明している。重要なのは、この批語が『風月宝鑒』という題名がかつてこの作品に使用されていた事実を示していることであり、別の書物に同名の作品が存在したという意味ではない。この批語は、作品の題名変更の過程における重要な一環として位置づけられる。

【甲戌眉批：若云雪芹披閱增刪，然後開卷至此，這一篇楔子又係誰撰？足見作者之筆狡猾之甚。後文如此處者不少。這正是作者用畫家烟雲模糊處，觀者萬不可被作者瞞蔽了去，方是巨眼。】⁸⁸

この文は、曹雪芹の執筆手法に対する鋭い批評であり、作品全体に対する洞察を示すものである。この批語は、曹雪芹が『石頭記』を増訂し再編集したことを述べつつも、序文（楔子）に関して疑問を呈している。もし曹雪芹が作品を改訂したとすれば、この序文は一体誰が書いたのか、という疑問である。これは曹雪芹の執筆手法に対する批判とも取れるが、脂硯齋がその巧妙な手法を見抜いていることも示している。「足見作者之筆狡猾之甚」という表現は、曹雪芹が非常に巧妙な筆致で物語を構築していることを指摘しており、「後文如此處者不少」と続けることで、他の部分にも同様の巧妙な仕掛けが存在することを示唆している。この批語は、読者に対して表面的な部分に惑わされず、物語の深層を見抜くことを促し、深い洞察力を持つ必要性を強調している。

【甲戌雙行夾批：此是第一首標題詩。甲戌眉批：能解者方有辛酸之泪，哭成此書。壬午除夕，書未成，芹爲泪盡而逝。余常哭芹，泪亦待盡。每思覓青埂峰再問石兄，奈不遇癩頭和尚何！悵悵！今而後惟願造化主再出一芹一脂，是書何幸，余二人亦大快遂心於九泉矣。甲午八日泪筆。】⁸⁹

この文は、『紅樓夢』の成立過程に関する脂硯齋の深い感慨を記録している。まず、「此是第一首標題詩」として、この詩が物語全体を象徴する重要な要素であることを示している。次に、脂硯齋は「能解者方有辛酸之泪，哭成此書」という表現で、この詩の真意を理解する者が曹雪芹の辛酸を共感し、その涙が作品を完成させたと考えている。「壬午除夕，書未成，芹爲泪盡而逝」と述べることで、曹雪芹が涙の枯れるまで執筆し続けたが、完成を見ることなく逝去したことへの無念が表現されている。また、脂硯齋自身も曹雪芹の死

⁸⁷ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、9頁。

⁸⁸ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、10頁。

⁸⁹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、10頁。

を嘆き続け、「余常哭芹，泪亦待盡」と述べ、曹雪芹の死後も涙を流し続けている様子が描かれている。「每思覓青埂峰再問石兄，奈不遇癩頭和尚何！」では、再び石兄に問いかけたいもののそれが叶わない嘆きが込められており、作品の完成への強い執念と曹雪芹との精神的つながりが強調されている。最後に「今而後惟願造化主再出一芹一脂，是書何幸，余二人亦大快遂心於九泉矣」と締めくくられている。脂硯齋は曹雪芹のような才能が再び現れ、この書物にその価値を見出すことがあれば、二人はあの世でも満足するだろうと述べている。この「甲午八日泪筆」という署名は、脂硯齋が涙を流しながら筆を取ったことを示しており、その深い感情が如実に現れている。この批語は、脂硯齋が『紅樓夢』に対して抱いていた深い愛情と、曹雪芹との精神的な結びつきを強く表現しており、未完の作品に対する無念と、その再生を願う切実な思いを伝えている。

【甲戌側批：以下系石上所記之文。】⁹⁰

この文は、これ以降の文章が「石頭」自身によって記録されたものであることを明示する批語である。この批語により、読者は物語が「石頭」の視点から描かれたものであり、その記録者としての「石頭」の存在が物語の重要な構成要素であることを理解するよう促されることになる。つまり、この記述は物語全体の構造において、「石頭」が語り手としての役割を果たすことを示唆している。脂硯齋はこの批語を用いて、物語の展開における語り手の視点やその重要性を強調し、読者に対して物語の全体像をより深く理解させることを意図している。この批語は、作品の構造的な理解を深める上で極めて重要な役割を果たしていると考えられる。

6. 『石頭記』という題名の確定性

脂硯齋がこの作品に言及する際、常に『石頭記』という題名を用いている点は特筆すべきである。以下、凡例と第一回における本書成立に関する解説文を考察する。

此書開卷第一回也，作者自云：因曾歷過一番夢幻之後，故將真事隱去，而借通靈之說，撰此《石頭記》一書也。故曰「甄士隱夢幻識通靈」⁹¹。

これは冒頭第一回です。作者みずから次のように言っています。「かつて一幕の夢幻の世界を通り抜けたことにより、真事を隠し、「通靈」の説を借りて、この『石頭記』を著した」。それゆえ甄士隱云々というのです⁹²。

⁹⁰ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、10頁。

⁹¹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、3頁。

⁹² 曹雪芹著、井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、1頁。使用する原文と翻訳本は文意が異なるため、両方を引用する。

余料必有新奇解恨文字收場、方是《石頭記》筆力⁹³。

まず、凡例において、本書のタイトルは『石頭記』であることが強調されている。これは、作者がこの本を「石が記す」物語として読者に提示することを意図していると同時に、読者に対する注意喚起の役割を果たしていると解釈できる。また、第十二回においても、脂硯齋は賈瑞の物語を「『石頭記』筆力」と評しており、これにより作品が一貫した筆力によって描かれていることが示されている。

さらに、特筆すべきは、「風月宝鑑」を題材とする章においても、脂硯齋が『石頭記』であることを強調している点である。これにより、作品内に複数のミニ小説が存在する可能性は極めて低いと考えるのが妥当である。このように、脂硯齋は各エピソードやテーマが単独で存在するのではなく、統一された物語として一貫性を持っていることを強調していると理解できる。

7. 晴雯に対する評価と脂硯齋の批評との乖離

ここでは、『『紅樓夢』成立の研究』の第四章第二節「『紅樓夢』女性描写における二つの世界—晴雯の死の問題を中心に—」の内容において、晴雯に対する解釈と脂硯齋の批評との乖離について検討する。

船越は次のように述べる。

晴雯は賈宝玉のために我が身を犠牲にして、失神寸前になるまで働く。主人思いの献身的な形象と言えよう。こういった晴雯の形象からみれば、晴雯が賈宝玉のお気に入りであるという設定は無理なく理解できる。晴雯の死に際する賈宝玉の悲しみには、賈宝玉の目には晴雯が常に肯定的な存在として映っていたことが示されている。

しかし作者は一方、賈宝玉の目には映らない所で、晴雯にこういった献身的な形象とは別の側面をも設定している。第二十四回には次のような場面がある。賈宝玉が自分の部屋の侍女である林紅玉をはじめて目にするという場面である。

(中略)

ここには、多くの侍女たちをおさえつけている侍女の中心人物が晴雯であり、しかも晴雯たちはその他の侍女たちに陰で恨まれているという設定が語られている。そして第二十七回には、実際に晴雯が高圧的な態度で林紅玉に対する場面も描かれている。こういった晴雯の一面は必ずしも称賛に値する形象であるとは言えまい。注目すべきは、先にも述べたごとくこういった陰湿とも言える侍女たちの間の確執を、賈宝玉は全く知らないという設定になっていることだ。作者は賈宝玉の全く認知しえない空間において、晴の必ずしも称賛に値しない側面を設定しているのである。

⁹³ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、262頁。

(中略)

つまり賈宝玉の目には、晴雯の良い面しか映っておらず、彼女の称賛には値しない一面は全く映っていないのである。言葉を換えて言うなら、作者は、称賛に値する晴雯の形象を宝玉の視点とともに描くと同時に、賈宝玉の視点の外側において、必ずしも称賛には値しない晴雯の側面をも設定しているのだ。人物描写における作者のこうした描き分けは、晴雯のみに関するものではない。他の女性の描写にもこの手法は用いられているのである⁹⁴。

船越は、この問題を考察するために『紅樓夢』全体に目を向ける必要があると論じている。彼は、まず晴雯の描写に注目する。船越によれば、第五十二回において、晴雯は病に冒されながらも夜を徹して賈宝玉の羽織を繕う場面が描かれている。賈宝玉は、賈母から受け取った高級な羽織を誤って焼き焦がしてしまうが、その焦げ跡が修復できる技術を持っているのはたった晴雯一人であった。

晴雯が賈宝玉のために自身を犠牲にし、失神寸前まで働く姿を強調する。船越は、このような晴雯の献身的な行為から、彼女が賈宝玉にとって特別な存在であると理解することが自然であると述べている。そして、晴雯の死に際して賈宝玉が深く悲しむ場面は、彼の目には晴雯が常に肯定的な存在として映っていたことを示していると分析する。

しかし、船越は、作者が賈宝玉の視点では見えないところで、晴雯に献身的な側面とは裏腹な一面を設定していることを指摘する。彼は、第二十四回で賈宝玉が林紅玉を初めて目にする場面や、第二十六回における林紅玉と佳恵が怡紅院に対する不満を語る場面を例に挙げて、晴雯が他の侍女たちを抑圧し、陰で恨まれる存在として描かれていることを論じている。

さらに船越は、晴雯が黛玉を無礼に追い返す場面や、墜児に対して厳しく折檻を加える場面を引用し、これらが必ずしも称賛に値する行為ではないことを示唆している。彼は、賈宝玉が晴雯のこのような一面を目にしていなかった点を強調し、晴雯の良い面しか賈宝玉には見えていないという作者の描写手法を分析している。

船越は、こうした描写手法が晴雯に限らず、他の女性登場人物にも用いられていることを指摘し、作者が人物の多面性を巧みに描き分けている点に注目している。

ここで注目すべきは、船越が晴雯の「良い面」と「悪い面」を論じる際の単調さである。羽織を繕う場面において、確かに作者は晴雯の忠誠心を描写している。しかし、墜児に対する折檻や林紅玉に対する高圧的な態度を「悪い面」として捉え、さらにこれを「陰湿な確執」と評して宝玉が全く知らなかったと断定するのは、早計に過ぎると言えるだろう。まず、晴雯が墜児や林紅玉に対して行った行動は、いわば中間管理者としての職務の一環である。林紅玉は本来の役割以外の仕事をこなしており、墜児は窃盗という明らかな過ち

⁹⁴ 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、228-232頁。

を犯している。これらの行為は管理が求められるものであり、晴雯の態度を単に「悪い面」として片づけることは適切でないと考えられる。

次に脂硯齋が晴雯に対する批評を見ていく。第七十七回「俏丫鬢抱屈天風流 美優伶斬情歸水月」では、王夫人が家内の秩序と風紀を維持するために行った「大觀園抄検」について詳細に描写されている。

まず、王夫人は鳳姐の病状が改善したことを確認し、家内の管理を再開するが、その過程で、必要な薬材である上等な人参が不足していることに気づく。この一連の描写は、王夫人が家内の物資管理に対して苛立ちを覚えている様子を示しており、家庭内の混乱を象徴するものである。結局、薛宝釵の助言を受け、新たに人参を購入することとなるが、これは家内の資源管理の不備を暗示している。

次に、司棋と晴雯の追放が描かれる。司棋は迎春の侍女でありながら、その不品行が問題視され、家を追われる。一方、晴雯もまた、王夫人の不興を買い、病気のまま追放される。これに対し、宝玉は深い悲しみを覚え、密かに晴雯を訪ねる場面が描写されている。晴雯は自らの冤罪に対する不満を宝玉に吐露し、宝玉もまたその無力感に涙を流す。この場面は、王夫人の厳格な姿勢と、それが個々の登場人物に与える影響を強調している。

さらに、芳官、蕊官、藕官が王夫人の手配によって出家することになる。彼女たちは元々大觀園の住人であったが、家内の秩序を維持するために、王夫人の命令で出家を余儀なくされる。このエピソードは、家族の秩序を守るために王夫人が厳しい手段を取る様子を示しており、その結果として生じる住人たちの運命が描かれている。

この回では、脂硯齋は以下のように晴雯を評価する。

只此一句便是晴雯正傳。可知晴雯為聰明風流所害也。一篇為晴雯寫傳，是哭晴雯也。非哭晴雯，乃哭風流也⁹⁵。

脂硯齋のこの批語において、「只此一句便是晴雯正傳」とは、「卻倒還不忘舊」という一文が晴雯の本質を的確に表現していることを指摘している。この「不忘舊」という表現は、晴雯が過去の恩義や情を忘れない人物であり、その性格が彼女の核心的な特徴であることを示している。この特質は、彼女が生きた時代や環境において特に重要視されるものであり、晴雯が他者との関係においても、その過去を大切にする姿勢が強調されている。

さらに、「可知晴雯為聰明風流所害也」と続けて述べられているが、これは晴雯がその聡明さと美しさゆえに不遇な運命をたどったことを示している。脂硯齋は、晴雯が持つ「聰明風流」という特質が、彼女の悲劇的な運命を引き起こす要因であると見ており、これは『紅樓夢』における女性たちが直面する社会的な制約や困難を象徴するものと解釈できる。

⁹⁵ 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、1881頁。

「一篇為晴雯寫傳，是哭晴雯也」という表現は、この章全体が晴雯の運命を描くものであり、それ自体が彼女の悲劇を嘆くものであることを意味している。さらに、「非哭晴雯，乃哭風流也」と結ばれているように、脂硯齋は晴雯個人の悲劇を超えて、彼女のような聡明で美しい者たちの運命そのものを嘆いている。この「風流」という概念は、単に美しさや優雅さを指すだけでなく、特異な才能や性格を持つがゆえに社会的に受け入れられず、最終的に悲劇的な運命を迎える者たちを象徴していると考えられる。

総じて、この批語は晴雯の性格とその運命を深く洞察し、彼女が象徴する「風流」の持つ悲哀を描いている。脂硯齋は、晴雯の個人的な物語を通じて、広く社会における「風流」を持つ者たちの宿命を示唆しており、これが『紅樓夢』全体におけるテーマの一つであることを強調している。

(1) 「風流」の意味

ここでは、「風流」について考えたい。下記は作中第一回にある風流をめぐる言及である。

那道人道：「趁此何不你我也去下世度脱幾個，豈不是一場功德？」那僧道：「正合吾意，你且同我到警幻仙子宮中，將蠢物交割清楚，待這一干風流孽鬼下世已完，你我再去。如今雖已有一半落塵，然猶未全集」⁹⁶。（下線は筆者によるもの、以下同様）

「まさにわが意を得たりです。あなたもひとまずわたしとともに警幻仙姑の御殿に赴いて、愚かものをきちんと引き渡し、恋の罪作りたちが下界へ降りるのが完了した後に、お互い出向くといたしましょう。現在のところ、半分は降り立ったものの、まだ全員が揃ったわけではありませんから」⁹⁷。

「待這一干風流孽鬼下世已完，你我再去。」という部分において、「風流孽鬼」として描かれる賈宝玉と彼の周囲の女性たちの運命は、この「幻」の中で繰り広げられる一連の物語の中心にあることが強調されている。ここで言及されている「下世」とは、現世における生まれ変わりを指し、賈宝玉と女性たちがそれぞれの運命を全うするまで、僧侶と道士が見守るという構図が描かれている。

次に、第二回ではさらに賈宝玉と彼の周囲の女性たちに対する説明をしている。

天地が人を生み出すに当たって、大仁と大悪の両種を除けば、他の者はすべて似たり寄ったりだ。大仁とは運〔幸運〕に依じて生まれた者、大悪とは劫〔厄運〕に依じて生まれた者で、運が生ずれば世は治まり、劫が生ずれば世は危うくなる。堯、

⁹⁶ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、11-12 頁。

⁹⁷ 曹雪芹著、井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、10 頁。原文「風流孽鬼」と用語も意味も大差あるため、両方引用する。また論じる際は原文準拠。

舜、禹、湯王、文王、武王、周公、召公、孔子、孟子、董仲舒、韓愈、周敦頤、二程、張載、朱子は、すべて運に依じて生まれた方々だ。蚩尤、共工、桀、紂、始皇帝、王莽、曹操、桓温、安祿山、秦檜などは、すべて劫に依じて生まれた者たちだ。大仁は天下を安らかに治め、大悪は天下を混乱に陥れる。すがすがしくすぐれているのが天地の正気であり、仁者が具えるものだ。むごたらしくひねくれているのが天地の邪気であり、悪者が具えるものだ。ただいまは国運隆々たる時、太平無為の世に当たるから、すがすがしくすぐれた気具备了た方々が、上は朝廷から下は山野に及ぶまで、どこにでもいらっしゃる。残りのすぐれた気はとりとめもなく漂って、ついに甘い滴となり、なごやかな風となって、あまねく四海を潤している。むごたらしくひねくれた邪気は光り輝く青空の下にあふれ広がることはできず、そこで凝結して深い窪みや大きな谷を満たしているのだが、たまたま風に流され雲に砕かれて、いささか反応して動き、ほんのひとすじでも誤って漏れ出した場合、それがすがすがしくすぐれた気に出くわすと、正は邪を容れず、邪は正を妬むことから、両者相譲らない。風や雨、稲妻や雷鳴のように、地上で出会うと、自分の方から消え去ることもできず、そうかと言って道を譲ることもできず、必ずやぶつかり合い沸き立って後によりやく尽きはてるのだ。それゆえその気が人に具わった場合も、必ず余すところなく発散して尽きることになる。たまたまこの二つの気具备了て生まれた男女だと、上に在っては仁人君子になれず、下に在っても大凶大悪にはなれない。これを万人の中に置くと、そのすがすがしくすぐれた気は万人の上に在るが、その常人とはかけ離れた、よこしまでひねくれた様子は万人の下に在る。もし王侯や金持ちの家生まれたなら情の虜となるだろうし、学問を誇る質素な家に生まれたなら俗世を超越した人物になるだろう。たとえ身分の低い貧乏な家に生まれ落ちたとしても、決して兵卒や雑役となって、凡人の言いなりになることなどできず、きつと天下に名だたる役者となるだろう。前代の許由、陶潜、阮籍、嵇康、劉伶、王・謝の二族、顧虎頭、陳の後主、唐の明皇、宋の徽宗、劉庭芝、温飛卿、米南宮、石曼卿、柳耆卿、秦少游、近世の倪雲林、唐伯虎、祝枝山、さらに李龜年、黄幡綽、敬新磨、卓文君、紅朮、薛濤、崔鶯、朝雲といった人々は、すべて立場を変えれば同じなのだ⁹⁸。

天地生人，除大仁大惡兩種，餘者皆無大異。若大仁者，則應運而生，大惡者，則應劫而生。運生世治，劫生世危。堯，舜，禹，湯，文，武，周，召，孔，孟，董，韓，周，程，張，朱，皆應運而生者。蚩尤，共工，桀，紂，始皇，王莽，曹操，桓温，安祿山，秦檜等，皆應劫而生者。大仁者，修治天下；大惡者，撓亂天下。清明靈秀，天地之正氣，仁者之所秉也；殘忍乖僻，天地之邪氣，惡者之所秉也。今當運隆祚永之朝，太平無為之世，清明靈秀之氣所秉者，上至朝廷，下及草野，比比皆是。所餘

⁹⁸ 曹雪芹著、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、34-35頁。

之秀氣，漫無所歸，遂爲甘露，爲和風，洽然溉及四海。彼殘忍乖僻之邪氣，不能蕩溢于光天化日之中，遂凝結充塞于深溝大壑之內，偶因風蕩，或被雲催，略有搖動感發之意，一絲半縷誤而泄出者，偶值靈秀之氣適過，正不容邪，邪復妒正，兩不相下，亦如風水雷電，地中既遇，既不能消，又不能讓，必至搏擊掀發後始盡。故其氣亦必賦人，發泄一盡始散。使男女偶乘此氣而生者，在上則不能成仁人君子，下亦不能爲大凶大惡。置之于萬萬人中，其聰俊靈秀之氣，則在萬萬人之上，其乖僻邪謬不近人情之態，又在萬萬人之下。若生于公侯富貴之家，則爲情痴情種，若生于詩書清貧之族，則爲逸士高人，縱再偶生于薄祚寒門，斷不能爲走卒健僕，甘遭庸人驅制駕馭，必爲奇優名倡。如前代之許由、陶潛、阮籍、嵇康、劉伶、王謝二族、顧虎頭、陳後主、唐明皇、宋徽宗、劉庭芝、溫飛卿、米南宮、石曼卿、柳耆卿、秦少游，近日之倪雲林、唐伯虎、祝枝山，再如李龜年、黃幡綽、敬新磨、卓文君、紅拂、薛濤、崔鶯、朝雲之流。此皆易地相同之人也⁹⁹。

この段落では、天地の生成する人間の類型について論じられており、「大仁」と「大悪」という二つの極端な人間像が対照的に提示されている。「大仁者」は、運の到来に応じて生まれ、治世においては天下を修治する役割を担う存在として描かれる。一方、「大悪者」は、劫の到来に応じて生まれ、乱世において天下を攪乱する存在とされる。

堯、舜、孔子、孟子などの歴史上の聖賢が「大仁者」の例として挙げられており、彼らは天地の「清明靈秀」なる正気を帯び、治世において卓越した治政を行った人物として称揚されている。それに対し、蚩尤、桀、秦始皇、曹操などの人物は「大悪者」として例示され、彼らは天地の「殘忍乖僻」なる邪気を帯び、乱世において天下を攪乱する役割を果たしたとされている。

また、現代においても、清明で純粋な正気を帯びる者たちが依然として存在し、その影響は上は朝廷から下は草野に至るまで広く及んでいると論じられている。一方で、殘忍で乖僻な邪気は、通常は日の下では力を発揮できず、深い溝や谷に凝結するが、偶然にもその邪気が漏れ出した場合、その影響を受けた人物は、才能が優れていながらも人情に背く性格を帯びることになる。

このようにして生まれた人物は、公侯や富貴の家に生まれれば「情痴情種」となり、詩書や清貧の家に生まれれば「逸士高人」となるとされている。歴史上の逸士や文人、そして名優や芸妓などがその例として挙げられており、これらの人物は、時代や場所を超えて共通する特質を持つと論じられている。

この一連の議論は、天地の正気と邪気が人間の性格や運命に及ぼす影響を考察し、それが具体的にどのような歴史的役割や社会的地位に結びつくかを示している。また、これにより『紅樓夢』の登場人物、とりわけ賈宝玉とその周囲の人物たちが、この天地の気の影響を受けた存在として描かれ、その運命が物語全体の中でどのように展開されるかを示唆

⁹⁹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、11-12 頁。

している。



(2) 先行研究

a) 卜喜逢¹⁰⁰

卜喜逢は、『紅樓夢』における「正邪両賦論」を、曹雪芹が歴史人物に基づいて構築した理論として解説している。この理論は、北宋の張載による「気本体論」を哲学的基盤とし、正と邪の両極端な気が人間に賦与されることで、人間の性格や行動が決定づけられると論じている。この考え方により、曹雪芹は登場人物を分類し、さらにその「情」を哲学的な次元へと昇華させている。

卜は、この「正邪両賦論」が物語の哲学的解釈を可能にすると同時に、強力な小説の叙述機能を持つことを指摘する。曹雪芹は儒教的な価値観に対する独自の歴史観をもって、「正」と「邪」の分類を行い、その評価基準を再構築した。特に、卜は、曹雪芹がこの理論を通じて、従来の「事功」中心の評価を超えて、個々の人物の「理」、すなわち本質的な部分に焦点を当てたことを強調している。

曹雪芹が描いた「正邪両賦論」によれば、正気と邪気の両方が混在する人物、すなわち「正邪両賦中人」は、社会の主流価値観には合致しないが、その独自性と本質において際立った存在となる。この視点から、賈宝玉もまた「正邪両賦中人」として描かれ、彼の行動や価値観は「情」に強く結びついていることが説明される。

b) 高樹偉¹⁰¹

高は、賈雨村が述べた「正邪両賦論」を程朱理学に基づいた理論として位置づけている。この理論は、朱熹とその後学によって確立された「道統」に由来し、具体的には、朱熹やその弟子たちの著述、特に黄榦と陳淳の『北溪字義』や『聖賢道統伝授総叙説』に基づいていると指摘している。

高は、「正邪両賦論」において、天地の清明で正しい気と、残忍で邪な気が人に賦与されることが、その人の性格や運命を決定づけると述べている。清明で正しい気を受けた人は、仁者として天下を治める役割を果たし、邪な気を受けた人は、悪者として天下を乱す役割を担うとされる。また、正邪二気が混在する人々、すなわち「正邪両賦中人」は、一般の価値観には合致しないが、その独自性と本質において際立った存在として描かれている。曹雪芹は、この理論を通じて、賈宝玉やその周囲の人物たちを描き、彼らの行動や価値観が「情」と密接に結びついていることを強調している。

c) 黄太平¹⁰²

¹⁰⁰ 卜喜逢、「《紅樓夢》中的正邪両賦論與情之關係析讀」、『文史知識』2023年第6期、120-125頁。

¹⁰¹ 高樹偉、「《紅樓夢》“述古翻新”管窺—黛玉不喜義山詩、正邪両賦及意淫新論」、『紅樓夢學刊』2020年第二輯、112-130頁。

¹⁰² 黄太平、「“詩意空間點”與“正邪両賦説”：《紅樓夢》整本書閱讀首先必須要解決的兩個問題」、『語文月刊』2019年第7期、54-57頁。

黄太平は、論文において「正邪両賦論」を次のように論述している。すなわち、黄は正邪両賦論を、曹雪芹が『紅樓夢』の人物描写において伝統的な小説の手法とは異なる新しい方法として位置づけている。この理論は、天地の正気と邪気が人間に賦与され、その人の善悪を決定するという考え方に基づいている。黄は、曹雪芹がこの理論を通じて、登場人物たちに善悪が同時に存在し、純粋な悪人はいないことを描写していると説明している。

具体的には、黄は王熙鳳のキャラクターを例に挙げて、この理論の適用を説明している。彼女はしばしば「悪之花」として描かれるが、曹雪芹は彼女を完全に否定しているわけではない。その才智を称賛しつつも、彼女がその才を正しい方向に用いなかったことを惜しんでいると述べている。さらに、黄は、王熙鳳の辛辣でありながら同情すべき側面に焦点を当て、彼女の行動が必ずしも悪意からではなく、時に環境や状況に影響されたものであることを示している。

黄は、曹雪芹が正邪両賦論を用いて、『紅樓夢』の登場人物たちを多面的に描写し、彼らの行動や価値観をより深く理解するための枠組みを提供していると結論づけている。つまり、この理論は『紅樓夢』における人物の善悪を超えた複雑な人間性の描写を可能にし、物語の読解に新たな視点をもたらすものである。

(3)まとめ

晴雯のキャラクターは、『紅樓夢』における正邪両賦論の理論に基づいて多面的に描写されている。その聡明さと美しさは、物語の中で彼女の「正」と「邪」の二面性を強調し、彼女の悲劇的な運命を象徴するものとして機能している。曹雪芹は、晴雯が持つ「聰明風流」という特質を、彼女の最大の魅力であると同時に、その不遇を招く要因として描いている。これにより、晴雯は賈宝玉の視点からは無垢で献身的な存在として見られつつも、実際には他の侍女たちとの間で対立を抱え、陰で恨まれる存在としても描かれている。

このような晴雯の描写は、正邪両賦論における「正気」と「邪気」の混在が人物の複雑な性格と運命を形成するという理論の具現化である。つまり、晴雯のキャラクターは、単純な善悪の二元論では捉えきれない複雑な人間性を示すものであり、彼女の運命は、曹雪芹が描き出す「風流」なる者たちの悲哀を象徴するものとして読者に強く印象づけられる。

したがって、晴雯の物語を通じて、『紅樓夢』における正邪両賦論は、登場人物の内面的な葛藤とその運命の不可避性を浮き彫りにし、物語全体のテーマに深い哲学的次元を与えていると結論づけられる。

三、結び

本章では、船越による『紅樓夢』の分析に基づき、従来のミニ小説論や列女伝といった解釈がいかんしてテキストを単純化し、さらには登場人物の性格や物語の場面を断片的に理解する結果を招いているかについて検討した。特に、これらの解釈はテキストの多層的な意味を見落とし、物語の全体的な構造やテーマ性を理解することが困難となる。また、それに伴う人物描写の一面的な理解が、物語全体の深みを削ぐ結果となっていることが明

らかになった。

まず、ミニ小説論においては、『紅樓夢』が一連の短編小説の集積であるとの主張がなされるが、この見方は、物語全体を有機的な一つの作品として捉えることを妨げる。短編的な場面ごとの分析に偏重することで、登場人物の成長や変化といった長編小説特有の要素が見過ごされる危険がある。このため、人物の内面的な変化やそれに伴う感情の複雑な動きが見逃され、簡略化されたキャラクター分析に終始することになる。

次に、列女伝という観点からの解釈は、女性登場人物を典型的な美德の体現者として描く傾向が強く、それによって彼女たちの多面的な性格や動機が単純化される。この解釈方法は、女性登場人物をステレオタイプに当てはめることにより、彼女たちの行動や決断が持つ深い意味を読み解くことを困難にする。結果として、物語における彼女たちの役割が矮小化され、物語全体のテーマやメッセージを正確に理解することが妨げられることになる。

これらの従来解釈の問題点は、テキストの詳細な分析と脂硯齋の批語を通じて明らかにされる。脂硯齋の批語は、『紅樓夢』の登場人物や場面に対する深い洞察を示しており、それらは一面的な解釈を超えて物語の複雑さを浮き彫りにする役割を果たしている。例えば、脂硯齋は登場人物の行動や対話の背後にある心理的な動機や社会的な文脈を指摘し、それによって単なる道徳的な判断や表面的な分析を超えた解釈を可能にする。

また、脂硯齋の批語は、物語の場面が持つ象徴的な意味やその背後にある文化的な背景を解き明かす手助けをしている。彼の批語を参照することで、物語が持つ多層的な意味やその背後に潜む社会的・歴史的な文脈を理解する手がかりが得られるのである。このことにより、物語の場面が単なるエピソードの集積ではなく、一貫したテーマや思想を持つ一つの作品としてのまとまりを持っていることが確認される。

以上を踏まえると、従来のミニ小説論や列女伝といった解釈は、『紅樓夢』という作品の複雑さと深みを十分に捉えることができていないと言える。むしろ、それらの解釈はテキストを一面的に読み解く結果となり、物語の多層的な意味や登場人物の豊かな内面性を見落とすことになっている。一方で、脂硯齋の批語を参照しながらテキストを精読することによって、これらの従来解釈に潜む矛盾点が浮き彫りにされ、『紅樓夢』という作品が持つ真の価値を理解する手助けとなるのである。

ゆえに、今後の『紅樓夢』研究においては、テキストの詳細な分析と脂硯齋の批語をより重視し、物語全体を一貫した作品として捉える視点を持つことが重要である。このようなアプローチが、物語の全体像をより深く理解し、登場人物の複雑な性格描写や物語の多層的なテーマを正確に把握するための鍵となるだろう。

第三章 「性同一性障害者」説と用語をめぐる検討

本章では、合山究の『『紅樓夢』 性同一性障害者のユートピア小説』に関する内容について検討する。具体的な議論に入る前に、まず「性同一性障害者」という用語の使用について検討しておきたい。

一、性別不一致

The conceptualisation of transgender identity as a mental disorder has contributed to precarious legal status, human rights violations, and barriers to appropriate health care among transgender people. The proposed reconceptualisation of categories related to transgender identity in WHO's forthcoming International Classification of Diseases (ICD)-11 removes categories related to transgender identity from the classification of mental disorders, in part based on the idea that these conditions do not satisfy the definitional requirements of mental disorders. We aimed to determine whether distress and impairment, considered essential characteristics of mental disorders, could be explained by experiences of social rejection and violence rather than being inherent features of transgender identity, and to examine the applicability of other elements of the proposed ICD-11 diagnostic guidelines¹⁰³.

上記段落は、トランスジェンダー・アイデンティティを精神障害と捉えることが、トランスジェンダーの人々に対して不安定な法的地位、人権侵害、そして適切な医療へのアクセス障壁をもたらしているという問題を論じている。具体的には、世界保健機関（WHO）が策定中の国際疾病分類第 11 版（ICD-11）において、トランスジェンダー・アイデンティティに関連するカテゴリーを精神障害の分類から除外するという再概念化の提案が議論されている。この提案は、トランスジェンダー・アイデンティティが精神障害の定義上の要件を満たしていないという考えに部分的に基づいている。

研究の目的は、精神障害の本質的な特徴とされる苦痛や機能障害が、トランスジェンダー・アイデンティティそのものに固有のものではなく、むしろ社会的な拒絶や暴力の経験によって説明される可能性があるかどうかを検討することであった。また、提案されている ICD-11 の診断ガイドラインの他の要素の適用可能性についても検証を行った。

このように、ICD-11 におけるトランスジェンダー・アイデンティティの再分類は、精神障害という枠組みを超え、より適切な理解を促進するものである。これにより、トランス

¹⁰³ Rebeca Robles, PhD, Ana Fresán, PhD, Hamid Vega-Ramírez, MSc, Jeremy Cruz-Islas, MSc, Victor Rodríguez-Pérez, PhD, Tecelli Domínguez-Martínez, PhD, Prof Geoffrey M Reed, PhD. 「Removing transgender identity from the classification of mental disorders: a Mexican field study for ICD-11」. The Lancet Psychiatry. July 26, 2016. DOI: [https://doi.org/10.1016/S2215-0366\(16\)30165-1](https://doi.org/10.1016/S2215-0366(16)30165-1).

ジェンダーの人々が直面する社会的課題や医療ニーズが正しく認識され、それに基づいた政策や医療の提供が改善されることが期待される。この段落は、トランスジェンダー・アイデンティティの理解における重要な転換点を示し、その再概念化が法的、社会的、医療的な文脈における差別や障壁を取り除くための一助となる可能性を示唆している。

Persons experiencing gender dysphoria need a diagnostic term that protects their access to care and won't be used against them in social, occupational, or legal areas.

When it comes to access to care, many of the treatment options for this condition include counseling, cross-sex hormones, gender reassignment surgery, and social and legal transition to the desired gender. To get insurance coverage for the medical treatments, individuals need a diagnosis. The Sexual and Gender Identity Disorders Work Group was concerned that removing the condition as a psychiatric

diagnosis—as some had suggested—would jeopardize access to care.

Part of removing stigma is about choosing the right words. Replacing “disorder” with “dysphoria” in the diagnostic label is not only more appropriate and consistent with familiar clinical sexology terminology, it also removes the connotation that the patient is “disordered.”

Ultimately, the changes regarding gender dysphoria in DSM-5 respect the individuals identified by offering a diagnostic name that is more appropriate to the symptoms and behaviors they experience without jeopardizing their access to effective treatment options¹⁰⁴.

この段落は、性別違和を経験する者に対する診断用語の選定が、彼らの医療アクセスを確保し、社会的、職業的、法的な領域において不利に扱われないようにする上で極めて重要であることを論じている。具体的には、性別違和に関連する医療処置として、カウンセリング、クロスセックスホルモン療法、性別適合手術、望む性別への社会的および法的移行が挙げられる。これらの医療サービスを受けるためには、適切な診断が不可欠であり、保険適用のためにも診断名が必要とされる。

性別および性同一性障害に関する作業部会は、一部で提案されているように、性別違和を精神科診断から除外することが、医療へのアクセスを危険にさらす可能性があることと懸念を表明している。偏見やスティグマを減少させるためには、適切な言葉の選択が不可欠である。「障害 (disorder)」という用語を「違和 (dysphoria)」に置き換えることは、臨床性科学の慣習的な用語に沿ったものであり、さらに患者を「障害者」と見なす否定的な意味合いを排除することにつながる。

最終的に、DSM-5 における性別違和に関する診断名の変更は、症状や行動をより適切に表現しながら、効果的な治療オプションへのアクセスを妨げないものとして、性別違和を

¹⁰⁴ American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, 2 · Gender Dysphoria

抱える個人の尊厳を保持することを目的としている。このように、診断用語の選定は、医療アクセスと社会的受容における患者の待遇に対して極めて重要な役割を果たすという論点が明確に示されている。



Gender incongruence

Description

Gender incongruence is characterised by a marked and persistent incongruence between an individual's experienced gender and the assigned sex. Gender variant behaviour and preferences alone are not a basis for assigning the diagnoses in this group¹⁰⁵.

また、この文献では、性別不一致 (Gender Incongruence) について説明している。性別不一致とは、個人の経験する性別と出生時に割り当てられた性別との間に顕著で持続的な不一致が存在する状態を特徴とする。この診断においては、性別に関連する行動や嗜好の変異だけを根拠とすることは不適切であり、診断の基準は、個人が主観的に経験する性別と割り当てられた性別との間に明確な不一致が認められることである。

この性別不一致の概念は、診断の際に単に外見的または行動的な性別変異に依存することなく、個人の内的な性別認識を重視するものである。したがって、診断に際しては、性別不一致が個人の生活全般や精神的健康に与える影響について、慎重かつ包括的な評価が求められる。このような診断基準の設定は、性別不一致のより深い理解を促進し、臨床における適切な対応に資するものである。

上記内容を総括すると、これまでの文献分析に基づき、トランスジェンダー・アイデンティティを精神障害として位置付けることが、トランスジェンダーの人々に対する法的地位の不安定性、人権侵害、さらには適切な医療アクセスへの障壁を引き起こしていることが示された。また、性別違和や性別不一致の診断基準を再定義することが、偏見を払拭し、医療アクセスを保障するために不可欠であることが論じられた。

以上の考察から、「障害者」という用語は偏見をもったものであり、研究書での使用は不適切であることが明確となった。合山究は、その研究書の題名にこのような用語を使用しているのみならず、全篇にわたり同様の視点で登場人物を評価しており、その認識は初期段階から誤っていると看做されるを得ない。

二、論点分析

合山は、賈宝玉の性格を現代医学でいう性別認同障害 (GID) との関連で分析し、この視点から『紅樓夢』の文学的価値を再評価しようとしている。ここでは、合山の視点を指

¹⁰⁵ World Health Organization. "International Classification of Diseases (ICD)". ICD-11 for Mortality and Morbidity Statistics. 2024-01. <https://icd.who.int/browse/2024-01/mms/en#411470068>, (アクセス日 2024年9月1日).

硯齋の批評やテキストとの乖離として考え、賈宝玉の行動や心情に潜む GID の要素を明らかにし、『紅樓夢』の物語全体の構造や主題の再解釈を試みる。以下はまず合山の主要論点を整理しておく。



1. 賈宝玉の性格と行動に見られる性別認同障害の特徴

合山は、賈宝玉の性格と行動が伝統的な男性像と大きく異なる点に注目している。賈宝玉は、幼少期から女性の化粧品や飾り物に強い関心を示し、それを持ち歩くことさえしていた。この行動は、彼が自身の性別に対する明確な違和感を覚えていたことを示唆している。また、彼がしばしば女性的な仕草を模倣し、感情を抑えることなく表現する姿も、当時の社会における男性像とは一線を画しているとされる。

さらに、賈宝玉が胭脂を口にする嗜好や女性の服装に対して特別な執着を示す点も指摘している。これらの行動は、現代の GID 診断基準における典型的な特徴と合致する。合山は、これらの行動が賈宝玉の性別に対する混乱を示しているとし、彼が性別を超えた自己認識を持っていた可能性を提起している。

賈宝玉が長期間にわたり大観園に住んでおり、多くの女性たちと親密な関係を築きながらも、性欲を感じる事が無いという事実も、彼の性別に対する違和感を強く示している。彼は男性としての典型的な反応を示さず、むしろ女性たちとの交流を通じて心の安定を求めているように見える。この点についても合山は、賈宝玉が性別認同に対して深い葛藤を抱えていた証拠であると考えている。

2. 賈宝玉の GID としての解釈と『紅樓夢』の再評価

合山によれば、賈宝玉の性格特性を現代の GID の視点から解釈することで、これまで解明されていなかった『紅樓夢』の構造や物語の核心に迫ることができるという。例えば、賈宝玉が男性社会を拒絶し、女性たちと共に生活することを選んだ背景には、彼の性別に対する混乱があったと考えられる。彼は男性社会の中で自分を見失い、女性たちとの生活を通じて自己を再確認しようとしていた可能性を示唆している。

この視点から見ると、賈宝玉が天界の女子名簿に記載され、女子情榜に名を連ねるという設定も、非常に象徴的な意味を持つ。彼が男性としてではなく、むしろ女性としてのアイデンティティを強く感じていることが、これらの描写によって暗示されていると考えられる。これは、『紅樓夢』全体が性別の境界を越えた異世界の探求であるという解釈を可能にし、物語の本質に新たな視点を提供するものである。

さらに、合山は、賈宝玉が科挙を拒否し、男性としての社会的義務を果たすことを拒む態度にも注目している。賈宝玉は、幼少期から文学的才能に恵まれていたにもかかわらず、科挙という男性社会への入口を強く嫌悪していた。彼が学業に対して無関心であり、むしろ女性たちとの交流に時間を費やすことを選んだのは、彼自身が男性としての役割に違和感を抱いていたからではないかと考えられる。この点も、彼の性別認同に対する葛藤を示

すものとして解釈される¹⁰⁶。

以上は、合山が賈宝玉の性別認同障害の特徴を裏付ける証拠として挙げたものである。ここでは、それらの証拠を起点に、論の再検討を試みる。



三、「性的衝動が起きない宝玉」をめぐる検討

合山の「性的衝動が起きない宝玉」についての考察は、第六章第三節の、「賈宝玉の特異な恋愛生活」において詳述されている。

賈宝玉は女の園の大観園にただ一人の男性として住み、多くの美女に囲まれた享楽生活を四、五年間も続けているが、その間、性行為に及ぶことは一回もない。身体的には健常者と見られるのに、なぜ性行為を忌避するような生活を送ったり、女性との同化を望むかのような不可思議な生き方を続けるのだろうか。血気盛んな時期の若者においては、道徳的な自制心を働かせたり、宗教的、社会的な理由などの制約から無理に抑制したりするのでなければ、普通はそうはならないはずである。ところが、彼には意識的に己を律しているところはほとんど見えないし、また女性と接しても性的欲動や性的興奮をおぼえないようで、性愛に関してはほとんど無関心のごとく見える。また、女性の美しさに魅せられることはあっても、その性的魅力に特別な眼差しを向けたこともないようである。このことは、恋愛文学の傑作とされる『紅樓夢』の根本に関わる重要な問題であり、その解明なしには、『紅樓夢』の十全な理解はあり得ないといつてよいだろう¹⁰⁷。

この段落では、賈宝玉が「大観園」で美女に囲まれながらも、性的行為に全く及ばない点が論じられている。彼は身体的に健常者でありながら、性欲を示さず、女性との同化を望むような生活を送っている。この現象は、通常の若者には見られない異質なものであり、道徳や社会的制約では説明できないとされる。また、彼は女性の美しさには関心を示すが、性的魅力には無関心であり、このことが『紅樓夢』の理解において極めて重要であると主張されている。しかし、合山の議論に対して、テキストから反論できる証拠が見える。例えば、次のようなくだりがある。

わたしの妹で、幼名を兼美【甲側：妙！蓋指薛林而言也。】、あざなを可卿という者を、あなたに娶らせることにしたのです。今宵は吉日、結婚するのにうってつけでしょう。これもただあなたに、この幻の女人の世界の風光ですらこんな程度にすぎないことを肝に銘じてほしいからこそ。まして俗世間の情景などなおさらです。こ

¹⁰⁶ 以上の論点整理は、合山究、『紅樓夢—性同一性障害者のユートピア小説』（東京：汲古書院、2010年）に根拠し、筆者による整理である。

¹⁰⁷ 合山究、『紅樓夢—性同一性障害者のユートピア小説』（東京：汲古書院、2010年）、101頁。

れからはくれぐれも心得て、これまでの考えを改め直し、孔孟の教えに意を注ぎ、世の中を治める道に身を委ねなくてははいけません」。言い終わると、さっそく内々に雲雨の事を授け、宝玉を部屋の中に推しやると、門を閉じて立ち去ってしまいます。宝玉の方はボーッとしたまま、警幻仙姑の言いつけに従って、男女の事に及ぶのを免れませんが、つぶさに述べることはできかねます。翌日になると、愛情は断ち切り難く、言葉には思いやりが溢れ、可卿と離れられなくなります¹⁰⁸。

この場面において、賈宝玉は警幻仙姑によって幻想の世界に導かれる。警幻仙姑は賈宝玉に対し、彼の妹とされる「兼美」を紹介し、彼女との結婚を即座に取り決める。「兼美」は「可卿」という名前であり、賈宝玉と可卿の結婚が成立する。この幻想の中で、賈宝玉は警幻仙姑から性的な啓示、すなわち雲雨の事についての教えを受ける。その後、賈宝玉は夢の中で可卿と性的な交わりを持ち、二人は柔らかい言葉を交わし、深い情愛を分かち合う。

この夢の中での体験は、賈宝玉にとって初めての性的な経験を象徴しており、彼の精神的成長の一環として描かれている。この体験を通じて、賈宝玉は現実世界の愛情や人間関係についての理解を深めるが、同時に夢と現実の境界が曖昧になることで、彼自身の内面的な葛藤が浮き彫りにされる。

【甲側：妙！蓋指薛林而言也。】¹⁰⁹

ここで「妙！」という表現は、脂硯齋は作者の巧みな表現技法に対する賞賛を示している。そして、「蓋指薛林而言也」とは、表面的な描写であるが実は薛宝釵と林黛玉を象徴していることを意味しており、彼女たちに対する賈宝玉の感情や内面の動きを反映している。

さらに、この場面においては、賈宝玉が薛宝釵と林黛玉の二人に対して抱く性的な幻想が暗示されている。賈宝玉は、物語を通じて薛宝釵と林黛玉の双方に強い関心を寄せており、彼女たちとの関係において純粋な愛情だけでなく、性的な憧れや幻想も含まれている。この批語は、そうした賈宝玉の複雑な感情の一端を示唆しており、彼が二人の女性に対して抱く多面的な感情を浮き彫りにしている。

次の回でも、賈宝玉の具体的な性行為描写がある。

さて、秦氏は宝玉が夢の中で自分の幼名を呼ぶのを聞いたため不審に思いますが、細かく問い質すのはばかられます。そのとき宝玉は夢とも現ともつかず、茫然としたままです。皆が急いで桂円湯を運んで来たので、それを二口ほど飲むと、起き上がって衣裳を整えます。襲人は彼の褲の帯に手を伸ばした際、思わず手が太腿に

¹⁰⁸ 曹雪芹著、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、108頁。

¹⁰⁹ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、79頁。

届きますが、ひんやりねっとりした感じがしたので、びっくりして手を引っ込め、どうしたのかと尋ねます。宝玉は顔を真っ赤にして、彼女の手をキュッとつねります。襲人はもともと賢い女の子ですし、年も宝玉より二つ上で、近ごろようやく男女の事にも通じてきたので、いま宝玉のこうした光景を目にすると、半ば察しをつけ、思わず顔を赤らめて、それ以上尋ねようとしません。宝玉は元通りきちんと衣裳を整えると、おばあさまの所へ行き、そそくさと夕食をすませるや、こちらにやって来ます。襲人は乳母や侍女たちがそばにいないのを見計らい、別に下穿きを一枚取り出して宝玉に着替えさせます。宝玉は恥ずかしそうに頼みました。「おねえさん、どうか他の人には言わないでね」。襲人も恥ずかしそうに笑いながら尋ねました。「夢で何を御覧になったのです？あの汚いものはどこから流れ出たのですか？」「一言では言い尽くせないよ」。そう言うと、夢の中の事を襲人に詳しく語って聞かせます。警幻仙姑が雲雨の情を授ける一段まで話が進むと、襲人は恥ずかしがって顔を覆い体を伏せて笑います。宝玉の方も日ごろ襲人がもの柔らかで愛らしいのを好ましく思っていましたから、襲人にせがんで警幻仙姑が教えてくれた雲雨の事を一緒に味わってみようとしています。襲人はもともとおばあさまが自分を宝玉に与えたことを承知していますから、いまこうなったとしても、別に礼を犯したことにはなるまいと思い、そこで宝玉とこっそり試してみることにし、幸い誰にも見つからずに済みしました。これ以後、宝玉は襲人を他の者とはさらに別格に扱い、襲人も宝玉のためにますます心を尽くします¹¹⁰。

『紅樓夢』において、賈宝玉と襲人の関係は、物語の進行とともに重要な転換点を迎える。ここでは、賈宝玉が夢の中で警幻仙姑から性的啓蒙を受け、その後襲人との間に起こる出来事を通じて、彼の性的な目覚めと関係の変化を考察する。

この場面において、賈宝玉は夢の中で警幻仙姑から「雲雨の情」を授けられる。夢から覚めた賈宝玉は、夢中で感じた感覚が現実にも影響を与え、身体的な変化を伴って目覚める。襲人は、賈宝玉の異変に気づき、その様子から何が起こったのかを察する。この場面は、賈宝玉にとって初めての性的経験が現実と結びつく瞬間であり、彼の内面的な変化を象徴している。

襲人は賈宝玉に対して深い理解を示し、彼の恥ずかしい思いを察して言葉を控える。しかし、彼女は賈母から賈宝玉の側に仕えることを許されているという事実もあり、賈宝玉との関係がこの時点でさらに深まることになる。彼女は賈宝玉の性的な目覚めに対して積極的な役割を果たし、二人の関係はこれまでとは異なる次元へと進展する。

この一節は、賈宝玉が初めて現実世界で性的な経験を持つ場面であり、彼の成長過程における重要な出来事として描かれている。夢の中での警幻仙姑の啓蒙と、それに続く襲人との現実の関係が密接に結びつき、賈宝玉は物語の中で新たな段階へと進んでいくことに

¹¹⁰ 曹雪芹著、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第一冊』、115頁。

なる。襲人との関係がこの時点でより深まり、彼女が賈宝玉にとって特別な存在となることが示されており、このエピソードは物語の進行においても重要な位置を占めている。

合山はこの描写が存在することを知っているものの、それを深く理解しているとは言い難い。例えば、合山は以下のように述べる。

第六回に描かれている襲人とのあっけない初体験（周次昌によれば八歳、別説では十三歳）ののち、続作のこの回（第百九回）に至って、やっと二回目の房事が、宝と結婚して一年余りしてなされるのであるが、その描写は、以上のごとく、実に簡単である。実質的には、「雨膩雲香、氤氳調暢」、漢字の数でいえば、僅々十字足らずである。しかもそれは宝の巧みな誘導によってうやむやの中に行なわれたのである。これは『源氏物語』の作者が、無数の性愛シーンのほとんどを「省筆」の手法を用いて意識的に描写しなかったのとは異なり、賈宝玉の場合は、性愛シーンを描こうにも、描くべき実態がなかったことを意味していると思われる。というのは、もしあったのに述べなかったのであれば、幻仙姑によって「意淫」の人として規定された賈宝玉の基本的性格と甚だしく齟齬することになるからである¹¹¹。

この論述においては二つの重要な問題点が存在する。第一に、合山が証拠として提示した第百九回の内容は、脂硯齋評本の範疇に含まれていない点である。第二に、「省筆」の有無に関するテキストの誤読が挙げられる。合山は著作『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』において複数回にわたり脂硯齋の批語を引用しているにもかかわらず、テキストの前後を照応する際に明らかに異なるバージョンの内容を証拠として使用している。その点、合山の論述は明らかに妥当性を欠いている。

また「省筆」に関してであるが、下記はその該当する段落である。

晴雯は彼女が「我們」と言ったのを聞くと、もちろん彼女と宝玉のことですから、思わずまた嫉妬の念にかられ、何度か冷笑して言いました。「你們というのが誰を指すのか、わたしには分かりません。你們のことでわたしに恥ずかしい思いをさせないでいただきたいわ！你們がコソコソやっている例の事にしたって、わたしを騙しおおせるはずもないのですからね。「我們」と口にする資格がどこにあるの？表向きにはお部屋さんの地位にすらよじ登っていないじゃないの！わたしと似たり寄ったりのくせして、「我們」に見合う資格がどこにあるの？」襲人は恥ずかしさで顔を紫色に変えます。考えてみれば、もともと自分が言い損なったのです¹¹²。

この段落で明らかのように、第六回における賈宝玉の性行為は具体的には記述されていないものの、第三十一回における晴雯の言葉から、その行為が第六回以降も継続的に発生

¹¹¹ 合山究、『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』、107頁。

¹¹² 曹雪芹著、井波陵一訳『新訳紅樓夢 第二冊』（東京：岩波書店、2013年）、289頁。

していることが示唆されている。これは「省筆」の手法の一例であると考えられる。

四、脂硯齋への批判をめぐる検討

合山が主張する、賈宝玉が大観園で数年間にわたり多くの女性たちと親密に過ごしながらも、性欲や性行為を持たないという見解は、本文および脂硯齋の批語に照らして再考する必要がある。以上検討したように、賈宝玉は夢の中で可卿との間に明確な性的な体験を持ち、その後、現実世界においても襲人との間で性的関係を結んでいる。この描写は、賈宝玉が性的衝動を持ち、実際に性行為を行っていることを示している。

脂硯齋の批語においても、これらの場面が賈宝玉の成長過程における重要な転換点として位置づけられていることが強調されており、性衝動とその結果としての行為が物語全体において持つ意味が明確にされている。したがって、合山の解釈は、本文の具体的な描写および脂硯齋の批注と矛盾しており、賈宝玉が性衝動を持たないという主張はテキストに基づく解釈として不正確であると結論づけられる。

これをみると、宝玉は宝釵の肉体的魅力に参ってしまい、茫然自失したように思われるかも知れないが、実は女性が美しい女性の容姿に驚き、ほれぼれと見惚れるのと同じように、審美的、趣味的に心が動いたのであって、男性が女性の性的魅力のとりこになったのとはいささか異なるのである。宝玉には何のリビドーも起こらず、彼のその思いはそれっきりで終わってしまっていることを見てもわかるであろう。庚辰本第二十一回の脂評に、「蓋し宝釵の行止は端肅恭嚴にして、軽々しく犯すべからず。宝玉はこれに近づかんとするも、一時冒瀆するを恐るるが故に、敢えて狎犯せず」といっているが、「狎犯せず」というのは、宝玉の場合は、宝釵と遊び戯れようとしてもできなかったと解すべきであって、性愛行為に至らなかったと取ってはいけないのである。脂硯齋も宝玉が性同一性障碍者だなどとは知るよしもなかったので、誤解したのかもしれない。女性が性的であるかどうかは彼には関係ないのである¹¹³。(下線は筆者によるもの)

合山は、賈宝玉が女性に対して性衝動を持たないと主張し、特に彼が薛宝釵に対して抱く感情を「審美的なもの」に過ぎないと解釈している。この論点は、第二十八回における賈宝玉が薛宝釵の美しさに魅了される場面に基づいている。合山によれば、賈宝玉が抱く衝動は性的欲望ではなく、一時的な審美的感情の表れに過ぎないという。しかしながら、この解釈は、本文の描写および脂硯齋の批語に対する誤読に基づくものであり、テキストの意図を正確に反映しているとは言い難い。

まず、賈宝玉が薛宝釵に対して抱く感情が「性幻想」として明確に描写されている事実を無視することはできない。本文において、賈宝玉は「摸一摸」することを望み、薛宝釵

¹¹³ 合山究、『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』、102頁。

の容姿に心を奪われる描写が存在する。これは、賈宝玉が明確に性的な欲望を持っていることを示すものである。合山はこの衝動を「審美的なもの」と解釈しているが、これは本文の明確な描写に反するものである。

次に、合山が引用する脂硯齋の批語、すなわち「蓋寶釵之行止端肅恭嚴，不可輕犯，寶玉欲近之，而恐一時有瀆，故不敢狎犯也」という文章をめぐる解釈についても問題がある。脂硯齋は、賈宝玉が薛宝釵に対して尊敬の念を抱き、その結果として軽率な行動を控える様子を示している。この批語は、賈宝玉が性欲を持たないことを示すものではなく、むしろ彼が強い感情を抱きながらも自制していることを示唆している。この点において、合山の解釈は批語の意味を誤読していると言わざるを得ない。

さらに、合山は脂硯齋が賈宝玉の感情を理解していないと批判しているが、これは根拠に乏しい主張である。脂硯齋は、曹雪芹と密接な関係を持ち、『紅樓夢』の内容や登場人物の解釈において深い洞察を持つ批評者であるとされている。したがって、脂硯齋の解釈を軽視し、独自の解釈を強調する合山の論は、本文の描写および歴史的な文献に基づく正当性を欠いている。賈宝玉が性衝動を持たないとする合山の見解は、本文および脂硯齋の批語に基づく事実を無視し、独自の解釈を過度に押し進めたものである。本文および脂硯齋の批語は、賈宝玉が女性に対して強い感情と性的欲望を抱いていることを明確に示しており、この点を否定する合山の解釈は、テキストの精緻な読み欠けるものと判断される。

五、「宝玉の女性崇拜」をめぐる検討

本節ではまず合山による「宝玉の女性崇拜」説を整理し、この論述の問題点を述べる。

このような女性崇拜は、女性をこの世の普通の人間として見た女性賛美や女性礼賛ではなく、「紅樓夢」の主要な女性を天界から地上に降りたった仙女の化身たちと見る当時流行した仙女崇拜思想に基づくものである。これは、宝玉の女性崇拜の根底をなす観念の一つであり、『紅樓夢』の枠組みとも深い関わりをもっている¹¹⁴。

ここで宝玉は女人三変説を唱え、女性を結婚前の処女期、結婚後の既婚婦人期（妻妾期）、さらに老婆期の三期に分け、後になればなるほどダメになってゆくと見ているようである。わけても彼が絶賛するのはお嫁に行く前の処女期であり、これだけを見ると、宝玉は徹底した処女崇拜者であると見なすこともできるだろう¹¹⁵。

この段落では、合山は賈宝玉の性別意識および彼の男性に対する嫌悪感、自我否定の心理について述べている。まず、賈宝玉が男性であることに対して極端な嫌悪感を抱き、自分自身を「鬚眉濁物」として自嘲し、強い自己否定の意識を持っているとする。さらに、彼は父親や兄弟、さらには僕人たちを含む周囲の男性に対しても強烈な嫌悪感を抱いてい

¹¹⁴ 合山究、『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』、95頁。

¹¹⁵ 合山究、『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』、99頁。

ると指摘する。また、賈宝玉は世俗の男性たちを「臭男人」「鬚眉濁物」と見なし、そのほとんどが尊敬に値しない存在であると考えている。

この嫌悪感は、賈宝玉の内面的な葛藤や性別意識に深く根ざしているとされる。特に、彼が女性を強く崇拝し、女性であることへの憧れが現実で叶わないことから生じる自己嫌悪や絶望感が強調されている。合山は、賈宝玉のこのような心理が『紅樓夢』の中で繰り返し描かれていることに注目している。たとえば、「女兒是水作的骨肉、男人是泥作的骨肉」という台詞が、賈宝玉の女性崇拝と男性嫌悪の感情を象徴するものとして引用されている。

さらに、賈宝玉が太虚幻境の仙女たちから「濁物」と罵られた際に、即座に自己嫌悪に陥る描写が紹介され、これは賈宝玉の強い自我否定の表れであるとされる。また、賈宝玉が幼少期から女性たちに囲まれて育ったことが、彼の女性崇拝と男性蔑視の感情を形成する一因であると指摘されている。このように、合山は賈宝玉の内面的な性別意識が異常に偏ったものであり、彼の人格形成において重要な役割を果たしていると論じている。

加えて、合山は、賈宝玉の女性崇拝が当時の社会的文脈において異常なものであり、その背景には「仙女崇拝」や「処女崇拝」という思想が存在すると指摘する。彼は、この仙女崇拝が『紅樓夢』全体の構造における核心的な要素であると考えている。特に、賈宝玉が女性を単なる肉体的存在としてではなく、天界の仙女として崇拝し、特に純潔や処女性を理想化する傾向がある点を強調している。これが彼の強烈な自己嫌悪感と密接に結びついていると分析している。

合山はまた、賈宝玉の処女崇拝が彼の自己否定的な性別意識に深く関連していると考えている。賈宝玉が男性である自分を「濁物」として否定し、女性、特に純潔な女性を理想化することによって、彼は自分の存在を否定し、同時に女性への異常な憧れを強化している。このような処女崇拝は、当時の社会においても異例であり、合山はこれを賈宝玉の特異な性別意識の核心と見なしている。

合山の視点では、現代の GID（性同一性障害）の診断基準には「女性崇拝」や「処女崇拝」といった要素が含まれていないが、明清時代の士人に対してはこれらの行動が GID の症状として理解される可能性がある」と論じている。このように、合山は、賈宝玉の異常な性別意識と自己嫌悪が、彼の女性崇拝や処女崇拝に深く結びついていることを示唆し、それが『紅樓夢』の物語構造において重要な役割を果たしていると結論づけている。

合山は、賈宝玉が極端な女性崇拝、特に処女崇拝に基づいて男性性を否定し、女性を過度に理想化していると論じている。彼の主張によれば、賈宝玉は女性を「仙女」として崇拝し、特に処女性を理想化することで自己嫌悪を強めているという。しかし、この解釈にはいくつかの問題が含まれている。

第一に、賈宝玉が処女崇拝に基づいて女性を理想化しているとするならば、元妃、李纨、王熙鳳、秦可卿、香菱、襲人といった既婚者や性的経験を持つ女性に対して賈宝玉は反感を抱くはずである。『紅樓夢』の描写において、賈宝玉はこれらの女性に対して批判的な

態度を示しておらず、むしろ深い尊敬や愛情を抱いていることが明らかである。もし賈宝玉が処女崇拝を基盤として女性を評価しているのであれば、このような感情表現は矛盾していると考えられる。

さらに、元妃や李紈、王熙鳳、秦可卿、香菱、襲人は金陵十二釵に数えられる重要な女性キャラクターであり、賈宝玉の人生において重要な役割を果たしている。彼女らに対する賈宝玉の感情が単なる処女崇拝に基づくものであれば、これほど深い敬意や愛情を抱くことはないはずである。したがって、賈宝玉の女性に対する感情が単なる理想化や崇拝に留まらないことは明白である。

これらの点を踏まえると、賈宝玉が処女崇拝に基づいて女性を理想化しているという合山の主張は、テキストに描かれている事実と矛盾していると言える。賈宝玉の女性に対する感情は、多面的で複雑なものであり、これを単一の視点から捉えることは適切ではないと考えられる。したがって、合山の解釈には再考の余地があり、賈宝玉のキャラクターの全体像を理解するためには、より広範な視点が必要である。例えば、次の場面を見よう。

いま夢の中で秦氏が亡くなったと聞いたものですから、急いで身を翻して起き上がったところ、刀で突き刺されたような痛みを胸に感じたため、こらえ切れずに「ワッ」と声を上げると、口からパッと血がほとぼしり出ます。襲人らは慌てふためいて近寄って助け起こし、どうなされたのかと尋ねるとともに、おばあさまに報告して医者をお呼びとします。宝玉は笑いながら言いました。「慌てなくてもいいよ。大丈夫。これは火が急に心臓を攻めたので、血が道に迷ったんだ」。そう言って起き上がると、服を着替えておばあさまにお目通りした後、ただちに寧国府へ出かけようとしてします。襲人は彼のこうした様子を見て心配でなりません、さりとは止めるのも具合が悪く、好きなようにさせることにします。おばあさまは彼が出かけようとするのを見て言いました。「亡くなったばかりの人の所は汚れているし、夜は風も強いから、明日の朝まで待って行くことにしても遅くはないよ」。宝玉がどうして言うことを聞きましょう。おばあさまは人に命じて車を用意させ、お供の者を多めに遣わし、しっかり守らせて行かせます。まっすぐ寧国府までやって来ると、屋敷の門は開け放たれており、両側の灯籠は真昼のように照り輝き、行き来する人々でごったがえし、中では山を揺るがすように泣き声が響き渡っています。宝玉は車を下りると、柩を安置した部屋に駆けつけてひとしきり泣き声を上げた後、尤氏の所へ顔を出しますが、なんと尤氏はちょうど持病の胃痛がぶり返したため、ベッドに臥せているところでした¹¹⁶。

この場面は、賈宝玉が秦可卿の死を聞かされた瞬間の激しい感情と、その後の行動を描写している。賈宝玉は、夢の中で秦の死を知り、目覚めた直後に強いショックを受けて血

¹¹⁶ 曹雪芹著、井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、227頁。

を吐くという、身体的に激しい反応を示す。彼の心中に走った痛みは、「刀で突き刺されたような痛み」などの表現で強調されており、その感情の深さが際立っている。賈宝玉は、これを「火が急に心臓を攻めたので、血が道に迷った」と説明し、自身の感情的な動揺が身体に及ぼす影響を冷静に分析しようとするが、その冷静さは表面的なものでしかないことがすぐにわかる。

この後、賈宝玉はすぐに服を整えて秦の元へ向かおうとするが、賈母や周囲の人々の懸念をよそに、その意志を貫こうとする。この決意の強さは、彼が秦に対して抱いている感情の深さを示している。賈母の制止にもかかわらず、賈宝玉は即座に寧国府へ向かうことを決意する。この行動は、彼の感情が非常に強く、理性を超えて行動を突き動かしていることを表している。

賈宝玉が寧国府に到着した際の描写もまた、場面全体に強い感情の緊張感をもたらしている。府門が開かれ、内部では「山を揺るがすように泣き声が響き渡って」という、非常に大きな悲しみと混乱が描かれており、賈宝玉の感情がこの場に流れ込むように自然に進んでいく様子が表現されている。賈宝玉が停霊室で秦の死を前にして痛哭する場面は、彼の内面的な悲しみが最高潮に達した瞬間であり、その悲嘆の深さがここで再び強調される。

この場面全体を通じて、賈宝玉が非常に感受性の強い人物であることが示されている。秦との関係において彼が抱いていた深い情愛が、彼の行動の動機となり、理性的な制止を超えて行動を突き動かす結果となっている。彼の感情がここまで激しく表現されることは、『紅樓夢』における賈宝玉のキャラクターの一側面を鮮明に浮かび上がらせるものである。

【甲戌側批：寶玉早已看定可繼家務事者可卿也，今聞死了，大失所望。急火攻心，焉得不有此血？為玉一嘆！】¹¹⁷

本批語において、脂硯齋は賈宝玉が秦可卿の死に対して極めて強い感情的反応を示した理由を説明している。批語によれば、賈宝玉は秦可卿を将来の家務を託すに足る人物として高く評価しており、彼女に対して大きな期待を抱いていた。しかし、彼女の突然の死により、その期待が大きく裏切られることとなり、賈宝玉は深い失望を味わうことになる。これにより、賈宝玉は「火が急に心臓を攻めた」として説明される激しい精神的ショックを受け、その結果として血を吐くに至ったと解釈される。

この批語は、賈宝玉が秦可卿に対して単なる親戚以上の特別な感情を抱いていたことを示唆している。彼にとって、秦可卿は家庭の将来を託せる存在であり、その死は単なる個人的な悲しみにとどまらず、家族や家庭に対する将来の不安を象徴するものとなっている。このことは、賈宝玉の感情的な反応が、彼自身の未来への期待やそれが裏切られたことへの深い失望に根ざしていることを示している。

さらに、批語の「為玉一嘆！」という表現は、賈宝玉に対する深い同情を表現している。この感嘆は、彼が秦可卿に対して抱いていた希望が無惨にも潰えたことに対する脂硯齋自

¹¹⁷ 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、130頁。

身の感情を反映している。賈宝玉が抱いていた期待の崩壊と、それに伴う絶望感が、彼の身体的な反応として表れたことを理解する上で、この批語は重要な手がかりとなる。

また、この批語は、賈宝玉の感情的な反応が単なる悲しみにとどまらず、彼の深層心理に根ざしたものであることを示唆している。秦可卿の死は、賈宝玉にとって自らの未来が不確かなものとなり、期待していた未来像が崩れ去る瞬間を象徴しているのである。

以上の考察から、賈宝玉が単に「処女」や「結婚」という要素によって女性を分類するのではなく、各個人に対して真摯に接していることが明らかとなる。彼に「処女崇拜」という過激なレッテルを貼ることは偏見に基づく誤った解釈である。

六、結び

本章では、合山究による『紅樓夢』における性同一性障害者説について検討した。まず、「性同一性障害者」という用語自体の問題点について言及し、用語の不適切さを強調した。特に、トランスジェンダー・アイデンティティに関する国際的な文献を参照しつつ、この用語の使用がどのように社会的偏見を助長し、適切な医療アクセスの障壁となるかを述べた。また、賈宝玉を性別認同障害 (GID) という現代的な枠組みで捉えることに対して、テキストの精読と脂硯齋の批語に基づいて検討した。賈宝玉が性衝動を持たないという主張に関しては、作中の具体的な描写、特に彼の性的経験や女性との関係性を分析することで、その解釈が誤っていることを明らかにした。

さらに、賈宝玉の女性に対する感情や態度が一面的なものではなく、非常に複雑で多層的なものであることを強調した。合山が提示する「処女崇拜」や「仙女崇拜」についても、テキストにおける賈宝玉の他の女性キャラクターとの関係性や彼の内面世界を考慮することで、その主張が十分に支持されないことを述べた。また、賈宝玉の性別認同に対する合山の解釈が、特に脂硯齋の批語との矛盾を抱えている点も指摘しており、合山の解釈は『紅樓夢』の本質的な理解を欠いているとの結論に至っている。

本章全体を通じて、合山究の見解に対する多角的な検討反論が展開され、脂硯齋の批語を踏まえた正確なテキストの解釈が試みられている。これにより、賈宝玉のキャラクターや物語の核心に対する新たな視座が提供され、合山の誤解を正すための重要な論考が提示されている。

結論

研究目的と問題の再確認

本稿は、日本における『紅樓夢』研究において、脂硯齋批語の誤読がどのように作品の理解に影響を与えたかを解明することを目的としている。特に、日本の主要な紅学研究である伊藤漱平、船越達志、合山究がどのようにして脂硯齋批語を断片的に引用し、それに基づいた誤解や偏った解釈が、作品全体の理解にどのように影響を与えたかを検討してきた。

第一章では、伊藤漱平による脂硯齋批語の誤読に焦点を当てて検討した。特に、伊藤が賈宝玉と石の関係を誤って解釈した点を指摘し、その結果、作品全体の象徴性やメッセージがどのように歪曲されたかを述べた。脂硯齋の批語は、宝玉と石の関係を明確に区分しているが、伊藤はこれを文字通りに解釈し、作品の核心的なテーマを見誤っている。

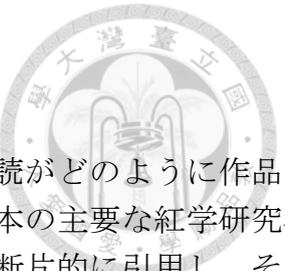
また、伊藤が脂硯齋批語を引用する際、その文脈を無視して解釈している点も問題視した。脂硯齋の批語は、作品の深層的な意味を理解するために不可欠な要素であり、その部分的な引用が全体の理解を阻害していることを明らかにした。

第二章では、船越達志の研究における脂硯齋批語の断片的解釈を取り上げた。船越は、『紅樓夢』をいくつかのミニ小説が合成された作品として捉え、物語全体の統一性を否定しているが、この見解が脂硯齋批語の意図とどのように矛盾しているかを検討した。

脂硯齋批語は、作品全体が一貫したメッセージを持つことを示しており、船越の断片的な解釈は、脂硯齋批語の文脈を無視している。さらに、船越の主張は『紅樓夢』のキャラクター描写や物語の展開を不正確に捉えており、その分析が作品の真の価値を理解する上で問題を抱えていることを示した。

第三章では、合山究による脂硯齋批語の解釈を中心に、彼がどのようにして賈宝玉を性同一性障害者として捉え、この視点から『紅樓夢』の文学的価値を再評価しようとしたかを見た。しかし、この視点は脂硯齋批語や作品全体の文脈と大きく矛盾しており、その解釈が誤っている点を指摘した。

合山は、脂硯齋批語の断片を抽出して自身の理論に都合よく解釈しているが、これは作品の全体像を見誤る原因となっている。脂硯齋は、賈宝玉の内面を深く洞察しており、性別の問題ではなく、彼の精神的成長や感情の変遷に焦点を当てている。合山の解釈は、脂硯齋批語の意図を軽視しており、これが作品の真価を正しく評価する妨げとなっていることを示した。



研究成果の総括と今後の課題

本研究の意義は、日本における『紅樓夢』研究において、脂硯齋批語の部分的な解釈が学術的理解に及ぼした影響を初めて体系的に分析した点にある。特に、伊藤漱平、船越達志、合山究といった日本紅学の主要な研究者が、脂硯齋批語を誤解釈したことにより、作品全体の理解に対し深刻な影響を及ぼしていたことを明らかにしたことは、本研究の大きな成果の一つである。本稿は、脂硯齋批語の全訳と精確な解釈が、日本における『紅樓夢』研究の進展に寄与する可能性を示し、従来の研究が見落としていた視点を提供するものでもある。また、脂硯齋批語は単なる注釈ではなく、作品の内奥に迫るための重要な手がかりであることを改めて確認した。

ただし、本研究には幾つかの制約が存在する。第一に、日本の紅学研究に焦点を絞ったため、他国や地域における脂硯齋批語の受容や解釈との比較が十分に行われていないという点である。中国、台湾、その他地域における研究と比較することで、脂硯齋批語の解釈の相違点をより明確に把握できる可能性がある。第二に、脂硯齋批語の翻訳において、すべての批語が正確に反映されているわけではなく、全体を網羅するには限界がある。脂硯齋批語は非常に難解であり、解釈にはさらなる検討が必要である。今後は、脂硯齋批語のより包括的かつ精緻な翻訳と解釈が求められる。脂硯齋批語は作品理解における重要な構成要素であり、これを正確に解釈し、作品の文脈に即して分析することが肝要である。また、他地域の研究成果と比較検討することで、脂硯齋批語が異なる文化や学問的視座からどう解釈され、作品全体にいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにすることが重要である。さらに、脂硯齋批語の解釈を他の文学作品や文化的背景と関連付けて論じることで、『紅樓夢』研究のさらなる発展が期待される。

本稿は、脂硯齋批語の誤読が単なる学術的問題に留まらず、作品の根幹的テーマや人物像の理解に大きな影響を及ぼすことを示した。脂硯齋批語の正確な解釈は、日本における『紅樓夢』研究のさらなる深化に寄与するものであり、これにより作品の真価がより正當に評価されることが期待される。今後もこの視座に基づいた更なる研究の進展が望まれる。



参考文献

以下の基準に従って文献を配列した。中国語文献は著者の姓の筆画順に、日本語文献は第1著者の苗字を五十音順に、そして英語文献は第1著者のファミリーネームをアルファベット順にそれぞれ並べた。

テキスト資料

中国語原文

1. 『脂硯齋重評石頭記：庚辰本』、北京：人民文學出版社、2010年1月第1版、2016年11月第8次印刷。
2. 『乾隆甲戌本脂硯齋重評石頭記』、胡適紀念館出版、台北：松民彩色印刷有限公司、1984年。

日本語翻訳本

1. 曹雪芹作・井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第一冊』、東京：岩波書店、2013年。
2. 曹雪芹作・井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第二冊』、東京：岩波書店、2013年。
3. 曹雪芹作・井波陵一訳、『新訳紅樓夢 第四冊』、東京：岩波書店、2013年、Kindle版。

研究書

中国語書籍

1. 王俊徳、『紅學二百年管窺：推翻脂硯齋神話 × 曹雪芹作者爭議 × 版本學無意義，論評點派、索隱派與考證派的起源與推廣』、台北：崧燁文化事業有限公司、2023年9月、POD版。
2. 周汝昌、『紅樓夢新證（增訂本）』全二冊、北京：中華書局、2016年1月第1版、2016年5月第2次印刷。
3. 孫玉明、『日本紅學史稿』、北京：圖書館出版社、2006年。
4. 胡適、『胡適紅樓夢研究論述全編』、上海：上海古籍出版社、2013年7月7日。
5. 欧阳健、『还原脂硯齋：二十世纪红学最大公案的全面清点』、哈尔滨：黑龙江教育出版社、2003年10月。

日本語書籍

1. 伊藤漱平、『伊藤漱平著作集 第一卷』、東京：汲古書院、2005年。
2. 伊藤漱平、『伊藤漱平著作集 第二卷』、東京：汲古書院、2008年。
3. 伊藤漱平、『伊藤漱平著作集 第三卷』、東京：汲古書院、2008年。
4. 合山究、『紅樓夢—性同一性障碍者のユートピア小説』、東京：汲古書院、2010年。
5. 船越達志、『『紅樓夢』成立の研究』、東京：汲古書院、2005年。



研究論文

中国語論文

1. 卜喜逢、「《紅樓夢》中的正邪兩賦論與情之關係析讀」、『文史知識』2023年第6期、120-125頁。
2. 木齋、「從版本的演變解讀《紅樓夢》的作者及其寫作歷程」、『雲夢學刊』第43卷第1期（2022年1月）、40-47頁。
3. 田佳瀨、「賈寶玉之為“情不情”新探」、『甘肅廣播電視大學學報』第25卷第2期（2015年）、25-28頁。
4. 吳孟昌、「論王國維〈紅樓夢評論〉的「文學解脫論」」、『興大人文學報』第41期、台中：國立中興大學人文學報編輯委員會、2008年、151-172頁。
5. 李朝陽、「小聰明無大智慧—王熙鳳管理才能駁論」、『名作欣賞』2023年第11期、5-9。
6. 周启志、「奸雄乱世之術—王熙鳳管理術之批判」、『明清小說研究』1996年第3期、193-199頁。
7. 孫遜、「“情情”與“情不情”：《紅樓夢》倫理文明和生態文明的現代闡釋」、『紅樓夢學刊』二〇一四年第三輯、1-15頁。
8. 高明月、「脂硯齋、畸笏叟及其他評者」、『阜陽師範學院學報（社會科學版）』2019年第3期、87-92頁。
9. 高明月、「從脂評自述看脂硯齋與曹雪芹的交往」、『太原師範學院學報（社會科學版）』

第 18 卷第 2 号 (2019 年)、32-36 頁。



10. 高樹偉、「《紅樓夢》“述古翻新”管窺一黛玉不喜義山詩、正邪兩賦及意淫新論」、『紅樓夢學刊』2020 年第二輯、112-130 頁。
11. 陳維昭、「《金陵十二釵》與曹雪芹及其他」、『紅樓夢學刊』二〇二二年第一輯、63-78 頁。
12. 黃太平、「“詩意空間點”與“正邪兩賦說”：《紅樓夢》整本書閱讀首先必須要解決的兩個問題」、『語文月刊』2019 年第 7 期、54-57 頁。
13. 顧紹炯、「評固寵擅權、以權謀私的王熙鳳」、『貴州文史叢刊』1998 年第 6 期、59-67 頁。

日本語論文

1. 金子二郎、「紅樓夢考 (一)」、『大阪外国語大学学報』第 6 号、大阪：大阪外国語大学、1958 年、97-108 頁。

ネット資料

1. American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition, 2 · Gender Dysphoria.
2. Rebeca Robles, PhD, Ana Fresán, PhD, Hamid Vega-Ramírez, MSc, Jeremy Cruz-Islas, MSc, Victor Rodríguez-Pérez, PhD, Tecelli Domínguez-Martínez, PhD, Prof Geoffrey M Reed, PhD. 「Removing transgender identity from the classification of mental disorders: a Mexican field study for ICD-11」. The Lancet Psychiatry. July 26, 2016. DOI: [https://doi.org/10.1016/S2215-0366\(16\)30165-1](https://doi.org/10.1016/S2215-0366(16)30165-1).
3. World Health Organization. “International Classification of Diseases (ICD)” . ICD-11 for Mortality and Morbidity Statistics. 2024-01. <https://icd.who.int/browse/2024-01/mms/en#411470068>, (アクセス日 2024 年 9 月 1 日).